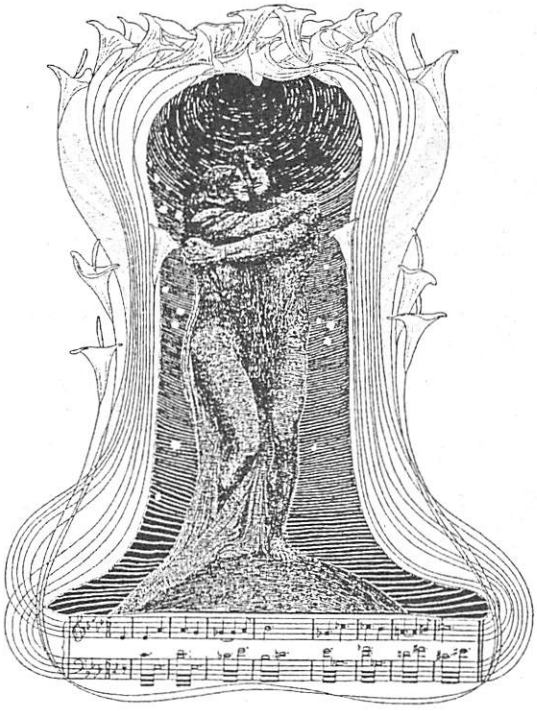
香川日独協会会報

Japanisch–Deutsch Gesellschaft

KAGAWA



»So starben wir, um ungetrennt der Liebe nur zu leben.«

第8号

Mai 2000

目　次

Ｂｅｒｌｉｎにて ---------- 会長　中村 敏子　1

【ホームステイ報告】
中谷さん宅でのホームステイ報告 ---------- ヤン・ショイアマン　5
ホームステイ報告 ---------- ハンナ・ラントファーマン　9
ホームステイ報告 ---------- 山田 恭子　11
ヨーロッパ周遊記 ---------- 川田 敦子　13
１２年ぶりに ---------- 岡本 香代子　15
ホームステイ報告 ---------- 石川 加奈子　18
ホームステイ報告 ---------- 川原 美代子　19
ボンホームステイ報告 ---------- 福池 三千代　22
香川日独協会および独日協会ボンの
　　ホームステイ交換プログラム記録 ---------- 高木 文夫　24

【ドイツからの便り】
アネッテさんからの便り ---------- 25
和太鼓を演奏するシュレックさん ---------- 28

【会員からの便り】
ご挨拶 ---------- 高野 光司　29
「ゲッティンゲン便り」のご紹介 ---------- 中村 敏子　31
短歌２１首 ---------- 北川　祥　33
３つのカルチャーショック
　— ヴィースバーデンに暮して 1998.03～1999.02 — ------ 明神 実枝　35
夏の旅　— 中部ドイツ北上の旅 — ---------- 乗松 達郎　39
夢は叶う — ドイツからワインを ---------- 大坂 靖彦　53
ドイツ感動の旅 ---------- 大坂 靖彦　54
第１回全国ドイツ語スピーチコンテスト ---------- （株）ビッグ・エス　56

【事務局より】
新会員のご紹介及び会員数 ---------- 60
香川日独協会事務局で保管している資料のリスト ---------- 61
９９年度香川日独協会活動報告 ---------- 67

Ｂｅｒｌｉｎにて

会長　中村　敏子

「ドイツにおける日本年」公式開幕式典に出席の機会をいただき、昨年９月末首都ベルリンを訪れた。

州選挙が間近いためか党のポスターが街路樹の幹に所々かけてあり、駅前では、運動員が小さな風車を手に子供連れの母親を勧誘していた。

蒼天秋冷、Berlinは快晴であった。Bonn D.J.Gの陽気な３人と合流し、新装なった議事堂、ポツダム広場を中心にバスで見学した。ドイツ連邦議会が完全にBonnからBerlinに移り、４年におよぶ改築作業を終えた旧帝国議会議事堂(ﾗｲﾋｽﾀｰｸ)で、９月から政治活動を始めていた。Bonnerにとって少々淋しい思いではないかと気遣ったが「Bonnは元気一杯！」と３人は手を振り上げた。この日も各地から議事堂見学に大勢の人が押し寄せ、長い行列を辛抱強く待っている子供の遠足グループもあった。

本会議場正面の壁には、両羽根を力強くひろげ足の爪先がしっかりと空をつかんでいるドイツの紋章、鷲が掲げられている。議場の議員の椅子は、照明の具合で鮮やかな紫色に見える「ライヒスターク・ブルー」。そして、新しいシンボル、議事堂のガラス張りドームがある。これは、54年に焼失したドームを再築したもので360枚の鏡を円錐型に配列した斬新なデザインで目を見はる。正面玄関に連なるぶ厚い外壁の重厚さ、ガラスのドームの透明性、この２つが新生ドイツの象徴なのだろうか。

翌９月27日、開幕式典は、Berlinで最も美しいジャルダルメン広場にあるシャウスピール・ハウスで催された。建物正面の長い外階段で勇壮な和太鼓が打ち鳴らされ、来賓たちの到着が伝えられる。日独両委員長の挨拶につづき立った秋篠宮殿下の朗々とした日本語のスピーチに万雷の拍手があがった。

式典後、ホールでのレセプションは、同じ目的をもった人達の集まりであるから情報交換に、久々の再会に話はつきず、場所をかえて深夜におよびまさに知音の交わりであった。まずは、相手の心を知ろうとすることがこうした交流のはじまりであろう。

日本年の行事は、今年９月までドイツ各地で行われる。香川日独協会も７月、BonnのMarkt Platzでさぬきおどりを披露する。どんな人の輪ができるのだろうか。それぞれに、心の友ができますようにと祈る。

Asien-Pazifik-Wochen
Berlin 1999

Festakt

Eröffnung
„Japan in Deutschland“
und
Asien-Pazifik-Wochen Berlin 1999

27. September 1999
Schauspielhaus/Konzerthaus am Gendarmenmarkt

ヨハン＝セバスティアン・バッハ作曲
「管弦楽組曲第３番」ニ長調、バッハ作品目録 1068 番より

演奏　ベルリン日独室内オーケストラ

ご挨拶

ベルリン市長・州首相
エーバハルト・ディープゲン

「ドイツにおける日本年」実行委員会委員長
樋口廣太郎

ドイツ連邦共和国大統領
ヨハネス・ラウ

秋篠宮文仁親王殿下

ヨハネス・ブラームス作曲
「バイオリン・ソナタ第２番」よりアレグロ・アマービレ

滝廉太郎作曲、三枝成彰編曲
「荒城の月」

・バイオリン演奏　コーニガブリエル・カメダ

ご挨拶

駐独ネパール王国大使
ノヴェル＝コショーレ・ライ

ローベルト・シューマン作曲
「交響曲第４番」第４楽章

演奏　ベルリン州青少年管弦楽団

レセプション
シャウシュピール・ハウスのロビーにて

参考資料：日独協会機関誌「Die Brücke かけ橋」第526号（1999年10月）より

論壇：Kommentar

「ドイツにおける日本年」の公式開幕

「ドイツにおける日本年」実行委員会
事務総長　黒川　剛
(元在デュッセルドルフ総領事、前在オーストリア大使、中央大学総合政策学部教授、当協会理事)

Offizielle Eröffnung von "Japan in Deutschland"

Prof. Tsuyoshi Kurokawa
(Botschafter und Generalkonsul a.D., Professor an der Chuo-Universität, Vorstandsmitglied der JDG, Generalsekretär des Veranstaltungskomitees "Japan in Deutschland")

秋の気配も深くなったベルリンで、9月27日「ドイツにおける日本年」の開幕式典が開催された。会場は、ワイマール共和国時代にドイツ語演劇の最高の殿堂の一つであった旧シャウシュピールハウスで、東独政権によって音楽会用ホールに改装されたが、シンケルの新古典派形式の佇まいはそのままに残されている。

式典は「日本年」実行委員の樋口委員長（日独協会会長）とディープゲン・ベルリン市長の共同主催であるが、名誉総裁である皇太子殿下の御名代として秋篠宮殿下と、独側の名誉総裁であるラウ連邦大統領が来賓として臨席され、両共同主催者とともに「日本年」の公式開幕を告げる挨拶を賜った。

秋篠宮殿下の物柔らかながら品格に満ちた御姿と、ノルトライン・ヴェストファーレン州首相時代の日本との深いかかわりに言及して「出会い」の重要さを強調したラウ大統領の言葉は、それぞれに、ドイツ全土から参集した来席者に深い感銘をあたえた。また、この式典はベルリン市が主催する今年度の「アジア太平洋週間」（重点国は日本）の開幕行事をも兼ねているので、在独ネパール大使も行事の成功を祈る挨拶をした。

前日の26日には、わが国の民間企業の協力をえて、ブランデンブルク門前のパリ広場で、秋田の竿灯や和太鼓など日本各地の伝統芸能の代表が参加したパレードやステージでの音楽演奏による前夜祭がおこなわれ、マスメディアでも大きく報じられ、前景気は上々だったと言ってよい。さらに、「日本年」と直接の関係はないが、同日行われた恒例のベルリン・マラソンで、日本選手が2位になるという嬉しいハプニングまであった。

開幕式典にてご挨拶される秋篠宮殿下

「ドイツにおける日本年」はこれを皮切りに来年秋までドイツ全土で展開されるが、関係各位の協力によりすでに400を越える企画の参加が予定されている。21世紀における日独の新たな出会いをモットーに、伝統芸術から現代の日本を代表する美術、音楽、文学、芸能が紹介されるほか両国経済団体による会議や、東西の物と心、あるいは宗教を主題としたシンポジウムなど多彩なプログラムが並んでいる。

開幕式典と時を同じうして、ベルリンでも源氏物語を題材とした梅若流の新作能がルネサンス劇場で上演されたが、売出しとともに切符は完売となった。また安藤忠雄建築展の初日は、国際的名声を反映して立錐の余地もない盛況であり、「建築家は人間の夢に乗りそれを実現する使命をもっている」という安藤教授の挨拶に会場が湧いた。更に、シラー劇場での文楽公演（曾根崎心中）に先立つ記者会見では専門的な質問もとびだし、筆者からも、表現の手法こそ違え万古不易の人情は共通のものであり、ドイツの観衆に芝居の醍醐味を味わっていただけるだろうと強調しておいた。

ケルン市立東洋美術館での東大寺宝物展は入場者数の新記録をつくっている由であり、秋篠宮・同妃殿下も観覧された。両殿下は引き続き日本文化会館開設30周年行事に臨席され、州首相やケルン市長とともに小塩節教授の記念講演に耳を傾けられた。

「ドイツにおける日本年」はこうして華やかに開幕したが、今後旧東独連邦諸州もふくめて幅広く実施され、デュッセルドルフでは現地官民の協力で大規模な閉幕行事が計画されている。引続きの御声援と御協力をお願いしたい。

Zusammenfassung
Am 27. September fand in Berlin die Eröffnungsfeierlichkeit der Veranstaltungsreihe "Japan in Deutschland" statt. Neben den Kogastgebern, dem regierenden Bürgermeister Diepgen und Herrn Higuchi, Präsident des Veranstaltungskomitees, beehrten Bundespräsident Rau und S.K.H. Prinz Akishino, in Vertretung des Schirmherrs S.K.H. Kronprinz von Japan, die Zeremonie durch ihre Anwesenheit und Ansprachen.
"Japan in Deutschland" wird in den kommenden 12 Monaten mit mehr als 400 Einzelprojekten in allen Bundesländern ausgetragen. Dabei bildet die neue Bundeshauptstadt einen unverkennbaren Schwerpunkt. So wurden zeitgleich mit der Einweihungsfeier Noh-Spiele im Renaissance-Theater und Bunraku im Schiller-Theater mit Erfolg aufgeführt. Vollgestopft mit interessierten Besuchern war die Eröffnung der Architektur-Ausstellung mit Prof. Tadao Ando in der Galerie Aedes.
Ihre Kaiserlichen Hoheiten besuchten in Köln die Ausstellung der Tempelschätze des Todaiji und nahmen an der 30-jährigen Jubiläumsfeier des dortigen japanischen Kulturinstituts teil.
Das Veranstaltungskomitee dankt allen für das große Interesse und bittet um weitere Unterstützung für "Japan in Deutschland".

中谷さん宅でのヤン・ショイアマンさん

山下さん宅でのハンナ・ラントファーマンさん

中谷さん宅でのホームステイ報告

ヤン・ショイアマン Jan Scheurmann

ホームステイを伴う私の日本旅行は１９９９年９月３日～２０日まででした。最初の一週間は高松近郊に住む中谷家で過ごしました。二週目は九州福岡の小郡市の高松家で過ごし、残りの期間は一人で日本を旅行して回り、いろいろなユースホステルに泊まりました。

日本に到着すると私はまずものすごい湿気に強烈な印象を持ちました。しかし、風景はとても興味深いものでした。背景にいつも森に覆われた丸屋根のような山々が見えました。しかし、住宅地があるところにはほとんど樹木がなく、田圃だけで、板のように平らでした。だから何キロメートル先も平野を見ることができました。

関西国際空港から私はまず船で徳島へわたり、港からバスで駅へ行き、中谷さんご夫妻が迎えに来ている志度まで列車で行きました。私は和食レストランでの食事に招待されましたが、そこで上の娘さんであるのぞみさんとも知り合いました。下の子供たち、あい子と啓吾はずいぶん遅くまで学校があります。二人は朝は７時頃家を出て、午後５時頃帰ってきます。しかし、のぞみは奈良の大学で勉強をしていて、夏休みでした。

食後私たちは車で帰宅し、私は緑茶でリフレッシュできました。私たちはずいぶんたくさん自分たちのこと、ドイツのこと、旅のこと、私の滞在中の過ごし方について話しました。いつのまにかあい子と啓吾も帰宅しました。午後遅く奥さんとのぞみさんが夕食の準備をしている間、私は中谷さんと少し散歩に出かけました。

そこでは山中のいたるところに見受けられる、たくさんの枯れた樹木が私の目を引きました。日本は相変わらず酸性雨の難しい問題を抱えているのだと私は思っています。夕食は本当にすばらしいものでした。とても美しい、愛情を込めてこしらえた様々な日本料理が出ました。のぞみの友達のなおこもこの晩は来ていたので、日本での最初のすてきな夕べになりました。旅行の前や途中に抱いていた不安はみんな最後にはどこかへ行ってしまっていました。

さらにたくさんおしゃべりをした後で私は典型的な日本のお風呂に入りました。翌日は礼拝に行きました。中谷さんご一家は福音派キリスト教徒です。礼拝は私が想像していたような教会やそれに似たところでではなく、瀬戸内海の海岸で仮拵えの日よけの中でリラックスした雰囲気で行われました。その後海で泳ぎました。それはリフレッシュにだけでなく、昼食を調達するのに役立ちました。数人の人たちは突堤で釣りをし、子供たちはウニや海草を取りに海に潜り、巻き貝を集めました。それどころか誰かが三つ又でイカをしとめました。いろいろな生き物を調理しました。それに持参したご飯やソバがありました。全体がすばらしく、全くすてきな食事で、他の時の食事とすっかり違っていって、もっと野性的で、素朴でしたが、美味しかった。この日は私の旅の最も魅力あふれる体験の一つでした。このようなことを観察できることを私は期待していませんでした。観光客として他にはほぼ見ることのない日本の一面を見たのです。

この後２時頃私たちは帰宅し、休息をとりました。夕方私は奥さん、のぞみ、啓吾と買い物に高松に行きました。商店が開いていたことはふつうではありませんでした。日曜日でしたから。夕食には私たちが買ってきたものが出ました。その他に私は箸を一組プレゼ

ントしてもらい、それからはいつもその箸で食べました。

翌日中谷さんご夫婦と周辺に観光に出かけました。それで有名な栗林公園を見たのです。私たちは園亭で緑茶を飲みました。この公園で私は「借景」のコンセプトも見ました。その後で私たちは小さな飲食店でうどんを食べました。うどんは箸で食べるにはいくらか練習が必要ですが、とても美味しいものです。その後私たちは丸亀城、善通寺を訪ねましたが、そこでは暗がりの中で通路を手探りしながら、神秘的な仏壇を見なければなりませんでした。それから歌舞伎劇場を案内してもらいました。夕方私たちは全員で料理がベルトコンベアにのってお客の前を通り、客はいくつかだけ取ればよいという寿司屋に行きました。この晩も私にとって新たな日本の名産品を知ったのでした。

次の日のぞみとなおこに連れられて倉敷に行きました。そのために大きな瀬戸大橋を列車で渡りました。倉敷の後は大きな町岡山を訪れましたが、そこではプリクラで三人一緒の写真を撮りました。これは自動のパスポート写真撮影機に似ていますが、背景を選び、写真を加えて加工することができます。その成果はこの日の思い出にステッカー状のたくさんの小さな写真を手にしたことでした。この遠出はとてもすばらしく、三人ともよく分かり合え、たくさん笑い合ったのでした。

次の日は中谷家での最後の日でした。私は一人で高松へ行き、町を見学して、買い物をしました。そごうデパートはとりわけ私の目を引きました。それは私がそれまで見たどんなデパートより大きいものでした。屋根がかけられた歩行者天国もとてもすてきでした。屋根は雨からも守ってくれますが、特に太陽をよけてくれ、ぶらぶら歩きを快適にします。後で私は四国村を訪れました。それは博物館村で、高松の東方にあり、高松と中谷家のほぼ中間にあります。まずはユラユラする蔓でできた古い吊り橋を渡らねばなりません。村には再建された、あらゆる年代の日本の住居が展示してあります。おおいに薦めるることができます、特にこの場所を静かで古風な雰囲気が覆っているからです。

夕食はテンプラでした。そこでの最後の晩だったので、私たちは夜遅くまで話し込みました。

翌日あい子と啓吾に別れを言った後、中谷さんご夫妻とのぞみが駅まで送ってくれました。福岡の次のホストファミリーの元へ向かったからです。みんなとの別れはとても辛く、私は車内で涙と闘わなくてはなりませんでした。とても親切で、私を素朴に受け入れてくれる人たちにこれまでの人生で出会ったことがありませんでした。そのような親切が日本の生活様式の一部だとしても、それはお互いの交流とコミュニケーションのよりよい形なのです。それで私たちはここヨーロッパでも何かを学ぶことができるのです。

私の初めての日本旅行は大成功でした。私はたくさんの新しい印象や体験を手に入れましたが、それは日本学の学生にとってだけ価値があるのではありません。　注目に値するのは日本人の来客を迎える親切さの示し方です。彼らは親切で、よく気がつく、完璧な方法はそれでも押しつけがましくはありません。すぐに馴染んでしまいます。

私は独日協会、特にメンヒさんとシュミットさんに感謝いたします。お二人のご苦労でホームステイプログラムがを可能になります。中谷さんご一家に引き受けていただいた様々なこと、私に対してなされたすべてのことを感謝し、ＤＪＧの他の会員に感謝しします。

Bericht über meinen Homestay Aufenthalt bei Familie Nakatani

(von Jan Scheurmann)

Meine Japanreise mit Homestay Aufenthalt erstreckte sich vom 3.9.1999 bis zum 20.9.1999. Die erste Woche verbrachte ich bei Familie Nakatani, die in der Nähe von Takamatsu, Kagawa-ken auf Shikoku leben, die zweite Woche bei Familie Takamatsu, in Ogoori, Fukuoka-ken auf Kyûshû. In der restlichen Zeit reiste ich allein durch Japan und übernachtete in diversen Jugendherbergen.

Bei meiner Ankunft in Japan war ich zunächst von der extremen Schwüle sehr beeindruckt. Aber auch die Landschaft ist sehr interessant. Man sieht immer kuppelförmige Berge im Hintergrund, die mit Wald bedeckt sind, jedoch dort, wo die Siedlungen sind, sind kaum Bäume, nur Reisfelder und es ist dort flach wie ein Brett. Man kann also kilometerweit über die Ebenen sehen.

Vom internationalen Flughafen Kansai fuhr ich erst per Schiff nach Tokushima, vom Hafen dort mit dem Bus zum Bahnhof, von dort mit einem Zug nach Shido, wo mich Herr Nakatani und seine Frau abholte. Sie luden mich zum Essen in eine Art Schnellrestaurant für japanische Speisen ein, wo ich dann auch die ältere Tochter Nozomi kennen gelernt habe. Die beiden jüngeren Geschwister Aiko und Keigo haben ziemlich lang Schule, sie müssen morgens etwa um sieben aus dem Haus und kommen circa um fünf Uhr nachmittags wieder. Nozomi jedoch hat angefangen in Nara zu studieren, und hatte Sommerferien.

Nach dem Essen fuhren wir mit dem Auto nach Hause, wo ich mich mit grünem Tee etwas erfrischen konnte. Wir sprachen sehr viel über uns, über Deutschland, die Reise und den weiteren Ablauf meines Aufenthalts. Irgendwann kamen auch Aiko und Keigo nach Hause. Am späteren Nachmittag ging ich mit Herr Nakatani etwas spazieren, während Frau Nakatani und Nozomi das Abendessen vorbereiteten.

Mir vielen dort die vielen toten Bäume auf, die überall in den Bergen zu sehen sind. Japan hat wohl noch immer schwere Probleme mit dem sauren Regen, denke ich. Das Abendessen war wirklich großartig, es gab allerhand japanische Gerichte, die sehr schön und mit viel Liebe zum Detail angerichtet waren. Nozomis Freundin Naoko war an diesem Abend auch zu Gast, so dass es ein schöner erster Abend in Japan wurde. Alle meine Befürchtungen die ich vor und während der Reise gehegt habe, waren nun entgültig zerstreut.

Nach vielen weiteren Gesprächen nahm ich dann ein typisch japanisches Bad, ein o-furo.

Am nächsten Tag ging es dann zum Gottesdienst. Nakatanis sind nämlich evangelische Christen. Der Gottesdienst fand aber nicht in einer Kirche oder ähnlichem statt, wie ich vermutet hatte, sondern am Strand der Seto-Inlandsee in einem improvisierten Sonnenschutz in sehr lockerer Atmosphäre statt. Danach ging es zum Schwimmen ins Meer. Was nicht nur der Erfrischung dienen sollte, sondern auch der Beschaffung des Mittagessens. Einige Leute angelten auf einem Pier, die Kinder tauchten nach Seeigeln und Algen oder sammelten Schnecken. Jemand erlegte sogar einen Tintenfisch mit einem Dreizack. Die verschiedenen Tiere wurden dann zubereitet und gegrillt. Dazu gab es mitgebrachten Reis und Soba-Nudeln. Das ganze war phantastisch, es war ein tolles Essen, ganz anders als die sonstigen Mahlzeiten, viel wilder und einfacher, aber köstlich. Dieser Tag war einer meiner faszinierendsten Erlebnisse dieser Reise, dies alles so beobachten zu können, hatte ich nicht erwartet. Man sah eine Seite von Japan, die man als Tourist sonst wohl kaum sieht.

Danach fuhren wir so gegen zwei Uhr nach Hause, wo wir uns ausruhten. Abends fuhr ich mit Frau Nakatani, Nozomi und Keigo zum Einkaufen nach Takamatsu. Es war schon ungewöhnlich, dass die Geschäfte geöffnet hatten, es war ja Sonntags. Zum Abendessen gab es dann die Sachen, die wir gekauft hatten, außerdem bekam ich ein Paar Stäbchen geschenkt, mit denen ich von da an immer aß.

Am nächsten Tag ging es zu einer Sightseeing Tour mit Herr und Frau Nakatani in die weitere Umgebung. So sah ich den berühmten Ritsurin Koen, wo wir in einem Gartenhaus grünen Tee

tranken, in diesem Park habe ich auch das Konzept der „geliehenen Landschaft" gesehen. Danach aßen wir Udon-Nudeln in einem kleinen Restaurant. Udon-Nudeln sind sehr lecker, obwohl man etwas Übung braucht, sie mit Stäbchen zu essen. Wir besuchten danach die Burg von Marugame, den Zentsuji Tempel, in dem man sich in völliger Dunkelheit durch einen Gang tasten musste um einen geheimnisvollen Altar und Gebetsraum zu sehen. Danach zeigten sie mir ein Kabuki Theater. Am Abend gingen wir alle zusammen in eine Sushi Bar, in der die Gerichte auf einem Fließband an den Gästen vorbeifahren und man sich nur etwas zu nehmen braucht. Auch an diesem Abend machte ich Bekanntschaft mit für mich neuen japanischen Spezialitäten.
Am Tag darauf besuchte ich in Begleitung von Nozomi und Naoko die schöne Stadt Kurashiki auf Honshu. Dazu fuhren wir mit dem Zug über die große Seto-Brücke. Nach Kurashiki besuchten wir die Großstadt Okayama, wo wir uns mit puri-kura Automaten zu dritt fotografieren ließen. Diese sind ähnlich wie Passbildautomaten, aber man kann Hintergründe auswählen und die Bilder zusätzlich bearbeiten. Das Ergebnis war, dass wir viele kleine Fotos von uns zum Aufkleben haben, als Erinnerung an diesen Tag.
Dieser Ausflug war sehr schön, ich habe mich mit den beiden gut verstanden, und wir hatten auch viel zu lachen.
Der nächste Tag war mein letzter bei den Nakatanis, ich fuhr allein nach Takamatsu und sah mir die Stadt an und machte Einkäufe. Das Kaufhaus Sogo war mir besonders aufgefallen, es ist größer alle Kaufhäuser, die ich bisher gesehen hatte. Sehr schön sind auch die überdachten Fußgängerzonen, die Dächer schützen vor Regen, aber vor allem vor der Sonne, was das Bummeln sehr angenehm macht. Später besuchte ich das Shikoku-mura. Das ist ein Museumsdorf, östlich von Takamatsu, etwa auf halber Strecke zwischen Takamatsu und dem Wohnort von den Nakatanis gelegen. Man musste zunächst eine schwankende, aus Stricken bestehende, alte Hängebrücke überqueren. In dem Dorf sind rekonstruierte Wohnhäuser von Japanern aus allen geschichtlichen Epochen ausgestellt. Sehr zu empfehlen, vor allem wegen der ruhigen und altertümlichen Atmosphäre die dieser Ort besitzt.
Zu Hause gab es Tenpura zum Abendessen. Wir haben uns noch bis in die Nacht unterhalten, weil es ja mein letzter Abend dort war.
Am nächsten Tag brachten mich Herr und Frau Nakatani und Nozomi zur Bahn, nachdem ich mich von Aiko und Keigo verabschiedet hatte. Ich fuhr nämlich zu meinem nächsten Gastgeber nach Fukuoka. Der Abschied von allen war etwas schmerzlich, ich musste im Zug mit den Tränen kämpfen. So freundliche und mich so einfach akzeptierende Leute habe ich mein ganzes Leben noch nicht kennen gelernt. Auch wenn solche Freundlichkeit zur japanischen Lebensweise gehört, so ist es doch eine bessere Form des Umgangs und der Kommunikation miteinander. Da können wir hier in Europa noch etwas lernen.

Meine erste Japanreise war ein toller Erfolg. Ich habe jede Menge neue Eindrücke und Erfahrungen gewonnen, die nicht nur für mein Japanologiestudium sehr wertvoll sind. Bemerkenswert ist die Art der Gastfreundschaft der Japaner, sie kümmern sich auf freundliche, zuvorkommende, perfekte Art und Weise aber sind dennoch nicht aufdringlich, man fühlt sich sofort heimisch.

Mein Dank gilt der Deutsch- Japanischen Gesellschaft, insbesondere Frau Mönch und Frau Schmidt, die durch ihre Arbeit, dieses Homestay Programm überhaupt erst ermöglichen, ich bedanke mich bei der Familie Nakatani für alle Umstände, die sie auf sich genommen haben, und für alles was sie für mich getan haben, und bei allen anderen Mitgliedern der DJG.

ホームステイ報告

ハンナ・ラントファーマン Hanna Landfermann

１９９９年9月１９日～２９日私は山下家にお世話になりました。山下家は三人の成人した子供たち、祖母さんと一緒に高松郊外志度の田舎にある家に住んでいます。私はみなさんの心温まるもてなしで最初からとても快適に感じました。

全員が仕事を持っているので、もちろん私は一人で数日間は出かけました。栗林公園、町中の美術館・博物館あるいは―日本で一番長い！―高松のショッピング街へ。

しかし、それでも家の人たちが仕事がない日は、家族の中の誰かとその日を過ごし、周辺のいくらかを案内してもらえることがしばしばあったのでとても好都合でした。例えば、四国村、屋島、金比羅さん、倉敷あるいは鳴門のドイツ館へ行きました。それで私は周辺や日本についてのたくさんの新しいことを知るだけでなく、楽しい会話で日本の様々な世代の考え方について興味深いことも知ることができ、これらの遠出は、誰もが口にしたように、9月にしては異常なものすごい暑さだったのですが、とても楽しいことでした。

次女の由果はドイツ語を上手に話すのですが、わずかのドイツ語や英語をのぞいていつも日本語でだけ話しました。それはもちろんいつも簡単というわけではありませんが、私はとても気に入りました。というのは私はそもそも日本語をもっと上手にしたかったからです。この期間に私は多くのことも学びました。

食事は何度も何度も美味しく味わいました。例えば、私はしばしば当地の名産であるうどんを味わいました。このことで私は山下家の人々に大いに感謝を申し上げます。それは私の菜食主義を問題なく受け入れてもらえたからです。日本では肉を食べないことは本当に稀だからです。

その後の日にはお母さんに生け花の先生のところへ連れて行ってもらい、伝統的な小さな村の祭りを体験することができました。フェリーで岡山に渡って友人の陶芸家を工房に訪ね、それどころか自分でいくらか土をいじることができた日のことを嬉しく思い出すのです。このように私はとても多くのことを見たり、体験したりしたので、ここで全部を伝えることができないくらいです。

私はすでに一度日本に行ったことがありますが、日本の家庭に住んだことがなかったので、ここで日常生活の多くの新しいことを知ることができました。もう一度心より山下家のみなさんに高松で私に与えてくれたすばらしい時のことを感謝いたします。また、まもなく日本で、あるいはもしかしたらここドイツで再会することを希望しています。

Homestaybericht

Vom 19.-29.September 1999 war ich zu Gast bei Familie Yamashita. Mit ihren drei erwachsenen Kindern (Miya, 27, Yuka, 25, und Masanobu, 24) und der Mutter von Herrn Yamashita leben sie in einem ländlich gelegenen Haus in Shido in der Nähe von Takamatsu, und durch ihre herzliche Art habe ich mich von Anfang an sehr wohl bei ihnen gefühlt.
Da alle berufstätig sind, bin ich an einigen Tagen natürlich alleine unterwegs gewesen; zum Ritsurinkoen, in Museen in der Stadt oder in Takamatsu's Einkaufspassage – der längsten in ganz Japan!
Aber trotzdem lagen ihre freien Tage so günstig, daß es sehr oft vorkam, daß ein Familienmitglied mit mir den Tag verbrachte und mir etwas aus der Umgebung zeigen konnte, wie z.B. Shikoku Mura, Yashima Plateau, Kompirasan, Kurashiki oder das Naruto German House. So lernte ich nicht nur die Umgebung und viel Neues über Japan kennen, sondern konnte durch die netten Gespräche auch Interessantes über die Ansichten der verschiedenen Generationen in Japan erfahren, und diese Ausflüge haben trotz der enormen Hitze, für September sehr ungewöhnlich, wie mir jeder bestätigte, immer sehr viel Spaß gemacht.
Yuka, die zweitälteste Tochter, spricht zwar auch gut Deutsch, aber bis auf wenige Wörter in Deutsch oder Englisch wurde eigentlich immer nur Japanisch gesprochen. Das war natürlich nicht immer einfach, aber mir hat es sehr gut gefallen, denn ich wollte ja hauptsächlich mein Japanisch verbessern, und ich habe in dieser Zeit auch viel gelernt.
Das Essen hat mir immer wieder phantastisch geschmeckt, oft bin ich z.B. in den köstlichen Genuß der dort typischen Udon(-Nudelsuppe) gekommen. Hiermit noch mal ein großer Dank an Familie Yamashita, daß sie so problemlos auf mein Vegetariertum eingegangen sind, es ist in Japan ja doch recht selten, kein Fleisch zu essen.
An weiteren Tagen durfte ich Frau Yamashita zu ihrer Ikebana-Lehrerin begleiten, konnte ein traditionelles kleines Dorffest miterleben, und an den Tag, an dem wir mit der Fähre nach Okayama übergesetzt sind, um dort einen befreundeten Töpfer in seiner Werkstatt zu besuchen und sogar auch selbst etwas töpfern konnten, erinnere ich mich auch sehr gerne. So habe ich so viel gesehen und erlebt, daß ich hier gar nicht alles anführen kann.
Da ich zwar schon vorher einmal in Japan war, aber noch nie in einer japanischen Familie gewohnt hatte, konnte ich hier viel Neues aus dem Alltagsleben kennenlernen. Ich bedanke mich noch mal herzlichst bei der ganzen Familie Yamashita für die schöne Zeit, die sie mir in Takamatsu gemacht haben, und hoffe sehr, daß wir uns bald einmal wiedersehen werden, in Japan oder vielleicht hier in Deutschland.

Hanna Landfermann

ホームステイ報告

学生会員　山　田　恭　子

私は１９９９年２月２７日（土）～３月１４日（日）の２週間川田敦子さんと二人でホームステイを体験しました。

最初の一週間はＢｏｎｎ近郊のＴｒｏｉｓｄｏｒｆのＢｅｒｎｄｔさんの家に滞在しました。Ｂｅｒｎｄｔさん一家はＢｅｒｎｄｔさん、娘のＫａｙａさん、息子のＫｅｎくんの三人家族で、“Ｐｒｉｎｃｅ”という名前のネコを飼っていました。Ｐｒｉｎｃｅとは時差ボケが直らない間夜中によく遊びました。

私達が音楽に興味があるということで日曜日に無料で開かれるファミリーコンサートに連れて行ってくださいました。日本にもこのような催しがもっと増えれば良いと思いました。

Ｋａｙａさんが寿司、Ｋｅｎくんがギョウザが好きだということで川田さんと２人で何度か料理を作りました。材料がほとんど現地で調達できたことに驚きました。好評だったので嬉しかったです。

また私は日本から習字道具を持って行っていたので、ＫａｙａさんとＫｅｎくんの漢字の名前を書いたりしました。

ホームステイ中私達の希望でＢｒｅｍｅｎとＨａｍｅｌｎに出かけたり、近所の幼稚園で子供達と一緒に遊んだりと、毎日がとても充実していました。ほぼ毎晩夕食後にＢｅｒｎｄｔさんと次の日の打ち合せをしっかりとすることができたからだと思っています。私の話を辞書や英語を使いながら根気強く聞いて下さり非常に安心感がありました。

またＪｏａｃｈｉｍ　Ｂｒｉｔｚｅさんに Ａａｃｈｅｎを、　Ａｎｆｏｎｉｕｓ Ｋｎｅｐさんに Ｂｏｐｐａｒｄを案内していただきました。２人は学生で日本語が上手でした。この３／２と３／３の２日間は、加藤君と樽茶君も一緒でさながら遠足のようでした。とても楽しかったです。私はＢｏｐｐａｒｄの古城で左足首をねんざしたしまい、Ｂｅｒｎｄｔさんに帰ってから病院に連れて行っていただきました。とても不安でしたが幸い大事には至りませんでした。診察を待つ間Ｂｅｒｎｄｔさんがずっと側についていて下さって本当の父親のようでした。

二軒目のホストファミリーはＢｏｎｎ-ＤｕｉｓｄｏｒｆのＲｏｅｄｅｒさんでした。とても優しいご夫婦でした。家のインテリアに日本のものをとり入れていて面白かったです。こまがさりげなく飾ってあったり、ランプシェードの代わりにかさを使っていました。また日本の音楽のＣＤもたくさんありました。

到着した日には BrühlにあるＡｕｇｕｓｔｕｓｂｕｒｇ城を見学しに行きました。その帰りにカフェに寄ってケーキを食べたのですが、ドイツのケーキの大きさ、甘味の少なさ、

つけられた生クリームの量に圧倒されました。
またメンヒさんの運転でビルケンシュトックの靴の直売店に連れて行っていただいたり、Ｖｉｋｔｏｒｉａちゃん、Ｕｌｒｉｋｅちゃん、Ｂｅｎｅｄｉｋｔくんというかわいい子供達がいるＬｏｈｎｅｒさんの家に連れて行っていただきました。Ｕｌｒｉｋｅちゃんがバイオリンを習っている音楽学校の見学もさせていただきました。

またKölnをＫｒａｕｓｅさんに案内したいただきました。ケルンの大聖堂の５０９段の階段を登りました。上からの眺めは素晴らしかったです。その後、チョコレート博物館にも歩いて行ったので、この日は足がとても痛かったです。

印象に残ったのは散歩に行った日のことです。ドイツの人は散歩が好きだという話は聞いていたのですが、それは私の想像をはるかに超えるもので私にしてみればそれは散歩ではなく山歩きでした。多くの人が散歩を楽しんでいました。

ホームステイ最終日には張り切って料理を作りました。ギョウザ、スープ、マーボー豆腐、かき揚げ、炒飯と作っていくうちに増えてしまい、すごい量になりました。奥さんが後で胃薬を飲んでいたのを見て、気を使って食べて下さったのだなあと思い、反省しました。

ホームステイや、その後の旅行中を通して感じたことは、ドイツの人はとても親切であるということです。駅で重いトランクをひきずり、階段しかない所では、さりげなくトランクを持って上がって下さった人、道を聞いた時に自分ではわからないからといって他の人にまで聞きに行って教えて下さった人など今でもはっきりと覚えています。ホームステイを経験する機会を与えて下さり本当に感謝しています。このことは一生の思い出として、いつでも心の中から取出し思い出すことのできる最高の宝物として大切に心の中にしまっておこうと思います。

ヨーロッパ周遊記

川田　敦子

去年の２月２６日、私は大学の同級生である山田さんとドイツへ向けて旅立った。大学に入ってドイツ語を学び始めた私は、かねてよりドイツ語圏の国々を旅したいと思っていた。今回香川日独協会のお世話になり、Ｂｏｎｎに２週間ホームステイをさせて頂き、その後ドイツ周辺の国々を周ると言う、全行程３３日間の我が人生の中で最も長期の旅行が実現したのである。

まず、Ｂｏｎｎに行く前に、私達はＷｉｅｓｂａｄｅｎに寄った。そこで、香川大学と交換留学の提携をしている大学の寮で長澤さんの部屋に１日泊めてもらった。

翌日、Ｂｏｎｎへ向けて旅立った。駅では日本語の流暢なシュレックさんが私たちを出迎えてくれた。そして、ホームステイ先のベルントさんのお宅へ到着。ベルントさん一家は３人家族でお父さんと娘のカヤ、息子のケン、そして猫のプリンスという構成だった。亡くなったお母さんは日本人だったので、炊飯器や、卵焼き機、箸そしてお椀まで何でもあった。ケンの好物は餃子ということで、私は日本で１度も作ったことがなかった餃子をここに来て初めて作ることになった。その他、手巻き寿司を披露したり、習字をするなど、日本文化の紹介もした。

ホームステイ中はファミリーコンサートや幼稚園への見学、モダンバレエ、映画などに連れて行ってもらった。中でも、幼稚園は子供を伸び伸びと育てているところが印象的だった。子供たちに折り紙を教えたり、一緒に遊んだり、ご飯を食べたりと大変貴重な体験ができた。更にボン大学の学生さんの案内でボッパルトやアーヘンの街も訪ねた。ボッパルトのＭａｒｋｓｂｕｒｇは大変古いお城で、厨房や牢獄などを見学した。首かせ手かせに挑戦させてもらった。また、私達はベルントさん宅にステイ中、ハーメルンとブレーメンへ２日間の小旅行に出かけた。その時感じたことは、駅のシステムが大変便利であるということ。「何時にどこどこに着く電車は？」と駅員さんに尋ねると発車時刻、接続、到着時刻をすぐさま調べてプリントアウトしてくれるのである。これには大変助けられた。それから、人々にたどたどしいドイツ語で道を聞くと大変親身になって教えてくれ、地図を見ながら容易に街を散策することができた。中には自転車で走る人にユースホステルまでの道を尋ねると、自転車を押してユースホステルまで案内してくれた。これにはとても感謝した。

次にお世話になったのはローダーさん夫婦のお宅である。彼らの子供たちはもう独立しており、夫婦と猫が１匹いる家庭であった。１番最初に連れて行ってもらったのはポッペルスドルフ城で黄色い豪華な居城だった。庭もとても広くヨーロッパの城という感じがした。それから、メンヒさんの案内で日本でも有名なビルケンシュトックの工場直営店で靴を買ったり、ローナーさん一家を訪ね、長女のヴィクトリア伴奏の下、タイタニックの歌を歌ったり、次女のウラリーケが通うバイオリン学校のレッスンを見学させてもらった。

紙風船やシャボン玉をプレゼントすると、６ヶ月の長男ベネディクトは喜んで遊んでくれた。ドイツでは子供達は昼食を家で取るようで、お父さんも４時くらいに帰宅した。

その他作家のクラウスさんにはケルンを案内してもらった。もちろん、大聖堂にも登った。５０４段の階段はとてもきつかったが、眺めはすばらしかった。それから、世界でたった一つという、チョコレート博物館やローマ・ゲルマン博物館にも足を運んだ。ドイツでは博物館や美術館、教会の入場料は学割が効く事が多くて国際学生証がとても役に立った。学生は日本よりも優遇されている印象を受けた。

またある日はローダーさん夫婦と７連山に散歩に出かけた。皆で寝坊をして１２時過ぎから出かけ、山道を２時間ぐらい歩くと山小屋のレストランに着き、そこでブランチを取った。散歩を楽しんでいる人々が多く、遅い朝食もドイツ人にはよくある事のようだった。日本とは違って時間の流れがゆっくりと感じられた１日だった。

その後、私達はフランスのパリ、スイスのバーゼル、バーデン、チューリッヒを周って再びドイツに入り、ローテンブルク、ミュンヘンを訪ね、オーストリアのザルツブルク、ウィーンを渡り歩いた。紙面上、ドイツ以外の国々のことは割愛させてもらうが、ドイツ滞在を通して感じたことはどこへ行っても、重いスーツケースを引きずる私達にすっと手を貸してくれる優しい人達と親身になって道を教えてくれた心の暖かい人々の存在であった。それから、もう一つ感心した事は人々の環境に対する姿勢である。街中のごみ箱は紙、緑のびん、茶色のびん、その他のごみに分かれており、スーパーには必ず布製の買い物袋を持参するし、簡易包装が心掛けられていた。デポジット制度も広く普及していた。これらは日本が見習わなければならない点である。

ところで、私は長澤さんの次に Wiesbaden に留学することが決まった。この紀行文が紙面に載る頃には私はもうドイツに居るが、一生一度のチャンスをフルに生かして、ドイツで沢山の事を吸収してこようと思う。特に関心のある、環境問題やごみ対策についてはじっくりと学びたい。それから、Bonn でお世話になった、日本をこよなく愛してくれる人々に再会を果たしたい。

最後に、私はドイツを通して、いろんな人々と出会うことができた。ドイツ語の先生方、日独協会の方々、そして私と同じ様にドイツをとっても愛している大学の先輩方、仲間たち。これらの人々みんなから、私はよい刺激を受け、成長してきた。このことは私の人生にとって大変大きな意味を持ち、私の財産になった。ここで皆さんに感謝の意を表する。そして、これからもドイツと関わって生きて行きたい。

12年ぶりに

岡本　香代子　（東京外語大 学生）

「家並みが、バイエルンらしくなってきたわね。」
汽車の窓からライン川が消え、退屈になってきた風景にうとうとしかけていた私は、車室内の会話に飛び起きた。[Regensburg]の文字が見えると、興奮しながら、外の風景に目を凝らす。駅のホームには、バーバラと、彼女の母親が待っていた。

12年前、レーゲンスブルグ大学で研究をしていた父について、我々一家は、1年半ほどこの街に住んでいた。バーバラは、当時7歳だった私のクラスメートで、彼女とは、家族ぐるみの付き合いをしていた。今回、彼女の家庭には5日間お世話になった。彼女らは、１２年前、一緒に遊んだ公園など、この街における私の思い出の場所全てに連れて行ってくれた。

そもそも、私がドイツ語の勉強を始めたのは、いつかまた、ドイツへ戻って来て、友人たちと“会話”がしたいと思ったからである。バーバラの母親によれば、12年前の私は、他の子供たちと、若干言葉を交わしていたと言うが、私には、話せていたという記憶はあまり無い。だから、ドイツ語を勉強して、もっといろんな話をしたい、とずっと思っていた。

そんな理由で、今回のドイツ行きが決まったのである。8月1日から21日までの3週間、ベルリンのゲーテで語学研修を受け、ボンで5日間のホームステイをし、レーゲンスブルグの旧友を訪ねる計画ができあがった。結局は、その後、ベルリンの語学研修で知り合ったベルギー人の友人を訪ね、そこでも4日間お世話になることになり、ヨーロッパでのすばらしい夏休みを過ごすことができた。

ゲーテの語学研修は、この夏一番の試練だった。ドイツ語を本当に勉強したい、という人には、私がとった「青年コース」はお勧めできない。というのは、ヨーロッパ内などの近い国から、夏のバカンスを楽しむために来ている学生が多いからである。そんな環境がら、はるばる日本から、勉強への闘士を燃やして来ていることを理解してもらうのは、なかなか難しかった。しかし、新と旧が隣り合わせのベルリンの街は、本当に興味深かったし、ベルギーから来たＭａｒｉｅとは、両方フリーマーケット好きで意気投合して仲良くなるなど、得たものも多かったように思う。

語学研修も終わりに近づいたある日の夕方、ホテルの部屋に1本の電話がか

かってきた。ボンで滞在することになっていた家庭の、ビッツェガイオ夫人からだった。外国語を学び始めの人なら分かると思うが、外国語での電話というのは非常に怖い。なにせ顔が見えないので、こちらの、“分かっていない表情”が相手には届かないのである。学生同士では、英語でコミュニケーションをとっていたので、ドイツ語は、授業であてられた時のみしか話したことがなかった。ホテルのフロントがつないでくれる一瞬の間に、いろんなことが頭をよぎった。そんな心配を知ってか知らずか、夫人は、はっきりと、ゆっくりとしゃべってくださった。理解できた！　たった２，３分の電話がどんなに、うれしく、自信へとつながったことか。

ビッツェガイオ夫妻は、二人とも、本当に、はっきりゆっくりとしゃべってくださる人だった。私の、単語だけの会話も、何分もかかって出来上がった文章も、快く聞いてくださった。自分がしゃべった外国語が通じる瞬間がうれしくて、車の中でも、食事の後も、私は、つたないドイツ語でしゃべりまくっていた気がする。接頭語によるニュアンスの違い、日本での私の生活、将来何を勉強したいかなど、時間はかかったけれども、本当にいろんなことを話し合えた。語学研修ではできなかった会話の練習が、ここから始まったように思う。

彼らが住む Bad　Neuenahr という街は、温泉を中心とする療養地として知られたところであった。診療所や、介護のための施設、庭園があり、緑の多い、本当に環境の良い街だった。交通の便も良く、２日目はボンへ、3 日目はケルンとアーヘンをまわることができた。これはドイツ全体において言えることだが、大きな街もそれなりに興味深いが、小さな街ほど、独特で、きれいで、住みやすかったりする。この街も、そんな街の一つだった。

天気の良い日曜日、我々は、４つの Turm で囲まれたその街を見て回り、偶然にも年に一度の公開日であった Kuhrhaus と Kuhrgarden（介護施設とその庭園）を見学した。また、その日は、ワイン祭りの日でもあった。片側には、ワイン用のブドウ畑の斜面が迫る道を、民族衣装に身を包んだ人々の演奏とパレードが行く。馬車の上では、子供たちや女性たちが、大きなたるに入ったブドウを楽しそうに踏んでいた。パレードの最後尾を締めくくる、花いっぱいの馬車に乗ったワインの女王が、道行く人々の持っているグラスにワインを注いでいた。後でごちそうになったワインも、もちろん、とろけるような甘さで、おいしかった。そんなすてきな日曜日だった。

本当に、この上なく充実した夏を過ごさせていただいた。ビッツェガイオ夫妻、独日協会ボンの H. シュレックさん、そして高木先生をはじめ、お世話になった多くの人々に心から御礼を言いたい。もう一つ、これからも宜しくと。

バーバラとは、念願だった、“ちゃんとした”会話ができた。お互いの生活

のこと、勉強のこと、そして将来のことも話し合った。12年ぶりでも変わらずに友達でいられて、これからもずっと友達でいられる、心からそう感じた。今度会えたとき、また少し上達しているであろうドイツ語で何を話そう。お互いの仕事についてだろうか。それとも、子連れで再会して、お互い主人のぐちを言い合い、「まったく、どこでもいっしょねえ。」などと笑ったりするのかもしれない。

(1999年12月記)

ホームステイ報告（９９’９．９～９．１８）

石川　加奈子

大学に入学して初めてドイツ語に触れました。ドイツ語を勉強することに苦を感じることはほとんどなく、１年生の頃は、自分がドイツに行くことになるなんて夢にも思わず過ごしていました。２年生になり、この日独協会について知るようになって、一気にドイツへ近づくことができ、実現までもしてしまいました。本当に良い経験ができたことに感謝しています。

私達４人は、大学の夏休みを利用して２家族に分かれてホームステイさせていただきました。私がお世話になったグリムさんは、とてもパワフルな方でした。ドイツ語がつたなく、その上英語も達者でない私にとても良くしてくださいました。グリムさんはとても日本に興味を持ってくださっていて、娘のハンナちゃんは、私達がお土産に持っていった習字セットを気に入ってくれて、一生懸命に練習している姿が印象的でした。ホームステイに訪れた最初の頃は、どのように接したらよいのか戸惑ったこともありました。しかし、レオニーちゃんやユーリアちゃんと紙風船などで遊ぶことを通して、コミュニケーションのとりかたが分かってきました。慣れ親しんできて、とっても楽しんでいたいた時に別れなければならなくなり、ほんとうにつらかったです。

ボンに滞在している間には、日独協会の方があちこち案内してくださいました。特にメンヒさんは元気な方で、車のスピードに助手席でドキドキしたことを覚えています。ホームステイの間に出会った人達は、私達を暖かく迎え入れてくださいました。初めてのドイツ旅行で、贅沢すぎる思い出をもらったような気がします。いつかまた、ドイツを訪れてみたいと思います。

ホームステイ報告

川原美代子

私は、石川さんと、９月９日から１８日まで１０日間グリムさんの家にお世話になりました。グリム家の家族構成は、お母さんのアニタさん、１５歳のハンナちゃん、１２歳のレオニーちゃん、７歳のユーリアちゃんです。

私は、ホームステイだけでなく、海外旅行も初めてだったため、何から何まですべてが新鮮で、ドキドキワクワクの連続でした。

１日目：フランクフルト空港駅から列車に乗ってボン駅に向かった。私たちは、二等席の切符を買っていたのに、一等席に乗ってしまったため、一等席からずっと、乗っているお客さんに見られつつ、スーツケースを押して二等席へと向かった。しかし途中、レストランがあって、通れなかったので、次の駅で降りて急いで二等席へと走り込んだりと、はじめから大変な思いをしたが、ドイツの人は荷物を運ぶのを手伝ってくれたり、とてもやさしかった。ボン駅に着くと、ベルントさんが迎えに来てくれていて、車で家へと連れて行ってくれた。家の前では、アニタさんが待ってくれていて、あいさつをした。この日は、暑かったし、（異常気象だとアニタさんが言っていた）疲れていたせいか、すぐに寝てしまった。

２日目：グリム家の人々は、仕事に学校にと出かけていった。家の鍵を渡してくれていたので、散歩へと出かけ、お昼に家に帰ってきたのはいいが、鍵の開け方がわからず困った。３０分くらい悩んで、ラストチャンスでもう一回挑戦してみて、やっと開けることができた。からくり（？）は、二重になっていたようで、左に２回鍵を回して、さらにノブを左に回して開けないとだめだった。夜は、プッツェンマルクト（移動遊園地）に連れて行ってもらった。アニタさんの会社が提供していたらしく、フリーで乗り物や食事が楽しめた。調子に乗って、ビールを飲んで回転しまくる乗り物に乗ったら、気持ちが悪くなって、吐きそうになって最悪な気分だった。（以後２日間、後を引く）ドイツの乗り物は、日本よりかなりスリリングだと思う。（高くて、速い）

３日目：朝、スーパーマーケットに連れて行ってもらい、夜は、オペラに連れて行ってもらった。内容はさすがに理解できなかったが（ベルントさんも It's difficult だと言っていた）、本場のオペラはブラボーだった。しかも、チケットは安いし。また、オペラの帰りに火事があり、ドイツの消防車も見ることができた。

４日目：朝は、ユーリアちゃんと近くの教会を見学に行った。３時過ぎから、ユーリアちゃんが出演する子供劇（Josef und seine Bruder）を見に行った。バックミュージックも生演奏で、劇もいろいろと趣向を凝らしていてよかった。（でてきたラクダには笑えた）夜は、アニタさんとレオニーちゃんと４人でゲームをして遊んだ。私は、なかなか頭を使

うこのゲームが気に入って、デパートで買って帰りました。

５日目：バスト電車を乗り継いでケルンへ行った。バスは、乗ったときに車掌さんにお金を払い、チケットをもらって機械でスタンプを押す仕組みになっていた。ケルンは、やはり、大聖堂が印象深い。大きく、重厚で圧倒された。チョコレート博物館へ行きたかったのに、行ってみると休館日で閉まっていて残念だった。家に帰って、夜ご飯に、手巻き寿司をつくってみた。（反応は、いまいち？）

６日目：毎日毎日蚊にさされ、ドイツにも蚊はいるのだなと、あたりまえといえばあたりまえのようなことを、朝から納得する。この日は、フォルカーくんとマーティンくん（アメリカンスクールに通う１７歳）が、ボンの街を案内してくれた。地下鉄に乗って美術館へ行ったり、カフェでお茶したりと、とても楽しく半日過ごした。この日の夜ご飯は、カレーライスをつくってみた。（お寿司よりは気に入ってくれたかな？）その夜、みんなで書道をした。かなり衝撃的だったらしく、日本語についていろいろと尋ねられたが、うまく答えることができなくてはがゆかった。書道セットをプレゼントしたら、ハンナちゃんがものすごく喜んでくれて、よかったなぁと思った。

７日目：レオニーちゃんに場所を聞いて、エアメールを出しに郵便局に行った。レオニーちゃんに、あらかじめ聞いていたとはいえ、本当に、そこの郵便局は電気屋さんの中にあって驚いた。夜、ベルントさんとケルンへ東大寺の展覧会？を見に行った。東大寺に行っても見られないような、重要文化財や国宝があって、寺好きの私としては、めったにないチャンスでとても感動した。

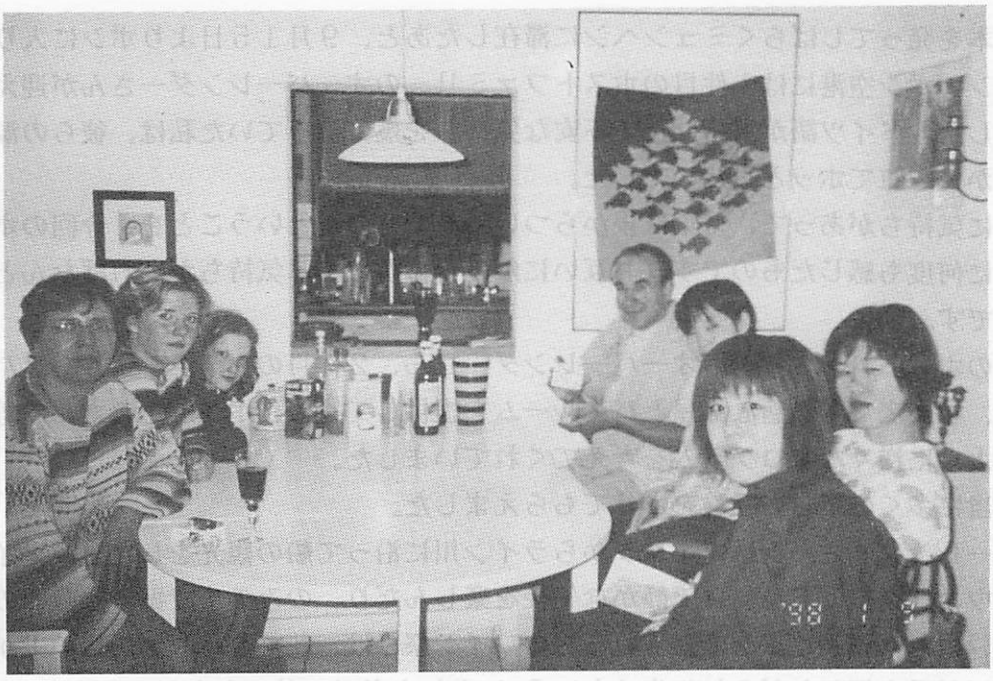
８日目：急に寒くなった。この日は、朝はメンヒさん、昼からシェイファーさんがいろいろな街を案内してくれた。メンヒさんには、ビルケンシュトックの工場にも連れて行ってもらって、３足も靴を買ってしまった。幸せだった。お昼もご馳走になり、また楽しいお話も聞かせていただいた。（長嶋監督のお話などなど）シェイファーさんには、Petersbergやベートーベンハウスなどに、マイカーであるベンツで連れて行ってもらい、映画の主題歌で盛り上がったりと、とても楽しい１日だった。

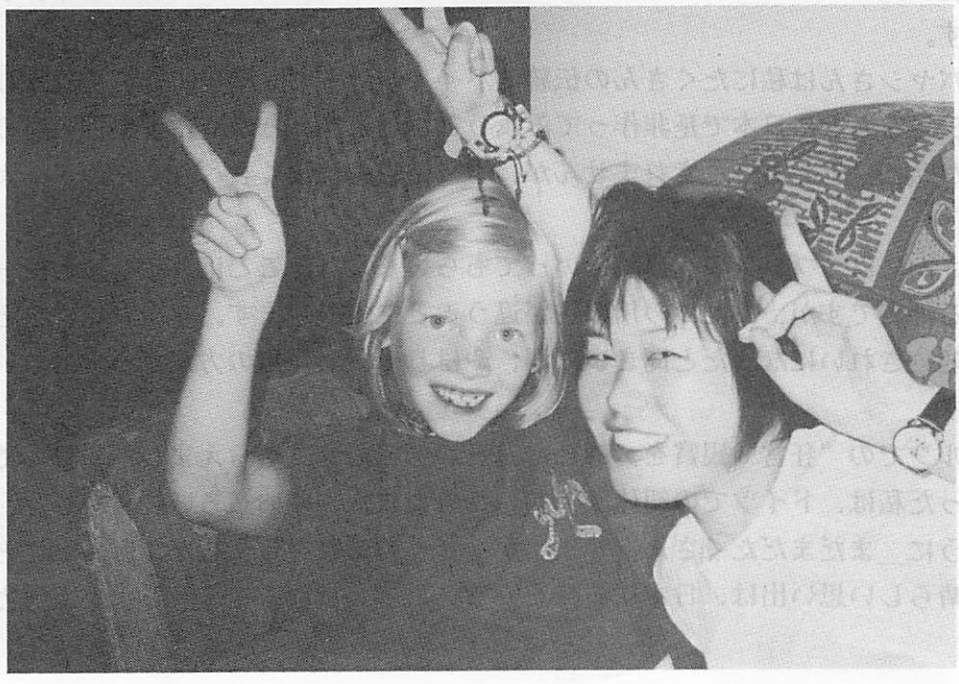
９日目：雨だったため、近くのパン屋さんへケーキを買いに行ったり、ユーリアちゃんと紙風船やけん玉で遊んだり、荷物の整理などをして過ごした。夕方、レストランで食事をし、夜は、ベルントさん、合田さん、高嶋さんも加わって、いっしょにトランプの大富豪をした。

１０日目：ボン駅で、アニタさん、ハンナちゃん、レオニーちゃん、ユーリアちゃん、ベルントさん、みんなが私たちを見送ってくれ、お別れをした。ユーリアちゃんは、列車が動き出しても、走って手を振ってくれて、別れがとてもさみしかった。

ホームステイで関わった皆さんに本当に良くしていただきとても感謝しています。ドイツ語はおろか、英語もままならぬ私に対して、いろいろと話しかけてくださったり、気長に聞いていただたり、本当に感謝感謝の毎日でした。やはり、話したいことを伝えることが

できないのは、はがゆいものです。もっと、聞きたいことも、話してあげたいこともありました。ドイツ語で話ができるように会話能力を身につければ、さらに楽しいホームステイになるにちがいありません。英語もドイツ語もがんばっていきたいです！





――ボンホームステイ報告――

('99.9.15～'99.10.1)

福　池　　三千代

私は日本を発ってしばらくミュンヘンに滞在したあと、９月１５日よりボンに入りました。ケルン・ボン空港には１件目のホストファミリーのオーバーレンダーさんが迎えにきてくれました。ドイツ語が解らなくて不安な気持ちを幾分持っていた私は、彼らの温かい笑顔にむかえられてホッとしたのでした。

まず先に気持ちがあって、言葉は後からついてくるものだということを、今回のホームステイ中に何度も感じたものです。お互いに解り合おうとする気持ちがあればなんとか通じるものです。

１件目のホストファミリーのオーバーレンダーさん、２件目のフランツェル・コバヤシさん共に、私に広くて快適な部屋とバスルームを提供してくれ、ボンでたくさんの思い出が作れるように様々なプログラムを考えてくれていました。

私は本当に多くの楽しい経験をさせてもらえました。

オーバーレンダーさんとはマインツからライン川に沿って船の観光をしたり、アイフェル地方のウィークエンドハウスで静かな午後を楽しんだり、のみの市で掘り出しものを見つけたり、またＡＨＲワインで知られる村のワイン祭りは、花で飾られた山車の上からワインの女王が手を振りながらねり歩くという、いかにもドイツ的でおもしろいものでした。

フランツェル・コバヤシさんとは、自転車であちこちサイクリングしました。なんと彼女の自転車は日本製で、私のサイズにピッタリだったので、とても“快適な走り”ができました。特に気に入ったのはライン川沿いをバード・ゴーデスベルクまでサイクリングしたことです。

またコバヤシさんは私にたくさんの伝統的ドイツ料理やお菓子を作ってくれました。教わったレシピをもとに日本で是非作ってみようと思います。ただドイツ料理の量の多さには、小柄な私にはとても食べきれませんが、本当に彼らはよく食べ、よく飲み、よく歩きます。

メンヒさんにはコブレンツへ連れていってもらいました。ここはライン川とモーゼル川が合流する地点ですが、ふたつの川の色が違うことに気づきます。ライン川はひと昔前にくらべて随分きれいになったと聞きますが、やはりモーゼル川の方がずっときれいな色をしています。

またケルンでの“狂言”観賞をメンヒさんとご一緒させてもらえました。日本で見たことのなかった私は、ドイツでの初体験です。これもまた、おもしろい経験でした。

このように＿まだまだたくさんありますが＿多くの経験をしました。が、私にとっていちばん素晴らしい思い出は、日本に興味を持ち、日本と日本人を理解しようと努力してく

れているドイツの人達と、片言ながら多くの会話を持つことができたことです。心からもてなそうとしてくれる気持ちと気遣いは、本当に私を居ごこちよくさせてくれました。

ドイツ人はよく“あなたは何をしたいのか？”“あなたはどう思うのか？”と尋ねます。その時に“私は何がしたい”“こう思う”ときちんと答えられる自分というものを持った人でありたいと思います。そうして今回私が強く思ったことは、外国を知る前に、まず自国の文化や歴史を学んでおくべきだということです。独日協会の人々は、もしかしたら私達日本人よりもたくさんの日本の伝統文化を知っているので、私は語学力を別にしても、きちんと説明できずにとても残念な思いをしました。次回はもっと多くの日本のこと、ドイツのことを勉強しておきたいと思います。

こちらへ来る日本人の方が圧倒的に多いので、是非もっと多くのドイツの方々に日本、高松へ来てもらいたいと思います。そしてその時は今回私がこちらで受けた多くの親切、感謝の気持ちのいくらかでもお返しすることができればうれしいと心から思っています。

最後になりましたが、独日協会、日独協会の方々に心よりお礼を申し上げます。

以　上

香川日独協会と独日協会ボンのホームステイ交換プログラム記録

（１９９９年4月～２０００年3月）

ボンから香川への派遣：

Scheurman, Jan	１９９９年9月３日～１０日	（中谷博幸・みゆき）
Landfermann, Hanna	１９９９年9月１９日～２９日	（山下由果）

香川からボンへの派遣：

岡本香代子	１９９９年8月２２日～２６日	(Bitzegeio, Ernst-O. & Helga)
山口裕史	１９９９年8月２５日～３１日	(Dr. Olbrich, Alexander & Rebekka)
石川加奈子	１９９９年9月９日～１８日	(Grimm)
川原美代子	１９９９年9月９日～１８日	(Grimm)
合田華子	１９９９年9月９日～１８日	(Dr. Bernd, Dietrich)
高嶋和歌子	１９９９年9月９日～１８日	(Dr. Bernd, Dietrich)
福池三千代	１９９９年9月１５日～１０月１日	(Dr. Oberländer / Franzel-Kobayashi)

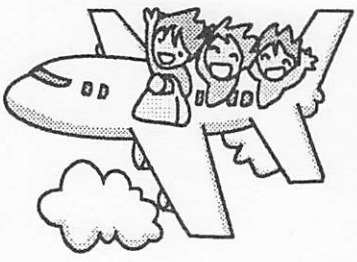
（　　）内の人名は受け入れ先

⊠お知らせ

香川日独協会では独日協会ボンとの協定に基づくホームステイ交換を随時受け付けています。ボンでホームステイを希望される方、ボンからのお客さんを引き受けてくださる方は担当の高木までご連絡ください。

（☎&Fax.087-847-4793; 087-832-1923

💻E-mail: takagi@ec.kagawa-u.ac.jp）



アネッテさんからの便り

Liebe Freunde in Kagawa. Erinnern Sie sich noch an die erste deutsche CIR, die von August 1991 bis Juli 1992 in ihrer wunderschönen Präfektur Ihr Unwesen trieb? Es wäre kein Wunder, wenn Sie mich vergessen hätten. Um so lebhafter erinnere ich mich an diese bewegte Zeit und freue mich, hier an dieser Stelle zu berichten, wie es mir in den letzten Jahren ergangen ist.

Bald nach meiner Rückkehr nach Bonn bekam ich - dank meiner bei Nishi Nippon Hoso gesammelten Erfahrungen - eine Stelle als Assistentin eines Korrespondenten von Fuji Terebi, für den ich zwei Jahre lang arbeitete. Danach hatte ich Lust auf etwas Neues und leitete das Koordinationsbüro mehrerer NGO, die sich für mehr Gerechtigkeit in den Entwicklungsländern einsetzten. Dieses von der EU geförderte Projekt dauerte jedoch nur ein Jahr und das bedeutete für mich, die Suche nach einer neuen Betätigung.

Da mein Herz nun doch für Japan schlägt, ging ich zurück an die Universität mit dem Ziel, mich im Rahmen einer Doktorarbeit wissenschaftlich mit der japanischen Kultur, insbesondere mit dem kulturellen Austausch auf dem Gebiet der Literatur, dem Theater und der Kunst zwischen Japan und Europa seit der Meiji-Zeit, zu befassen. Mein Geld verdiene ich seit dem als Dozentin für deutsche Sprache und Literatur an der Universität, als freiberufliche Übersetzerin für das Japanische Kulturinstitut (Nihon Bunka Kaikan) in Köln und gelegentlich als Dolmetscherin. Aber auch das JET-Programm hat mich die letzten Jahre nicht losgelassen. Bis zum Umzug der Japanischen Botschaft nach Berlin im Sommer letzten Jahres war ich Mitglied der Auswahlkommission, welche die deutschen JET-Teilnehmer auswählte. Darüber hinaus durfte ich den Ausgewählten kurz vor ihrer Abreise etwas über meine Erfahrungen als CIR in Kagawa berichten. Dann wünschte ich mir jedes Mal, ich könnte mit ihnen fliegen, aber so unabhängig wie damals mit 25 Jahren bin ich heute nicht mehr.

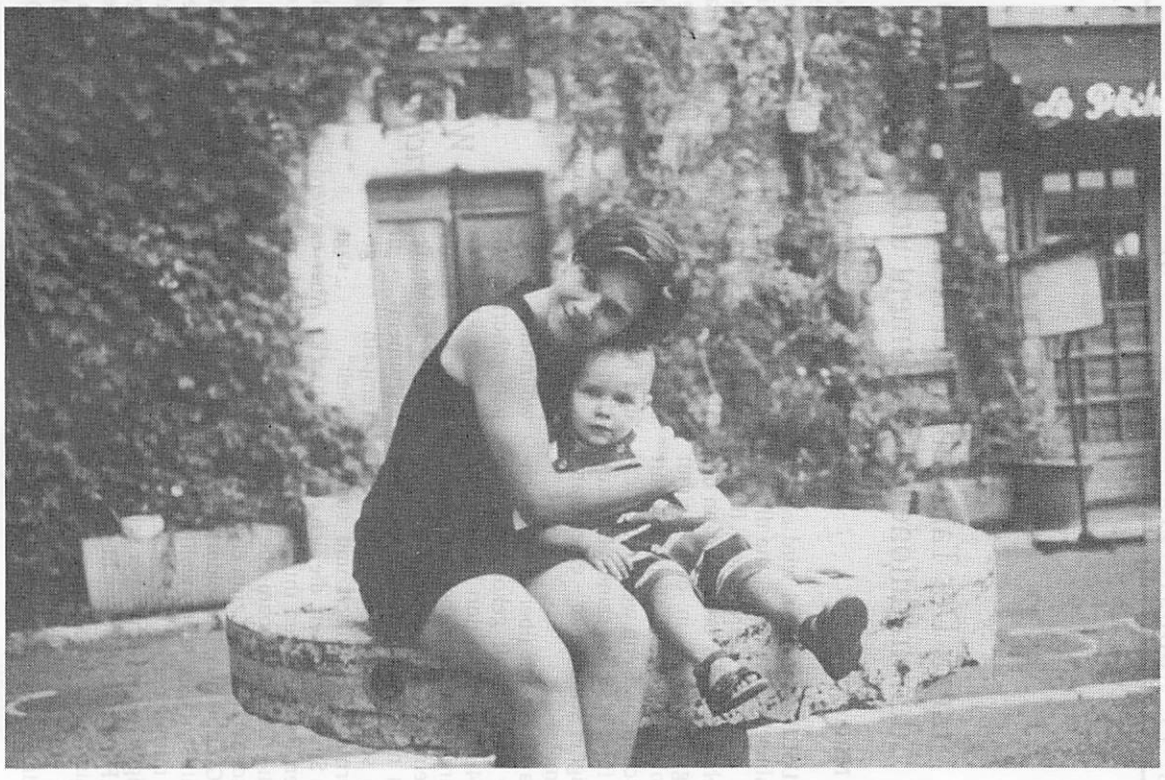
Im November 1996 wurde mein Sohn Leon geboren, der mich seitdem in Atem hält. Leons Vater ist mit Leib und Seele Anglist und kämpft sich die aka-

demische Leiter hinauf. Da gibt es leider keine halben Stellen. Doch dank meiner freiberuflichen Tätigkeiten kann ich mir meine Arbeit einteilen und irgendwie klappt der Spagat zwischen Kindererziehung und Beruf mit Hilfe von Freunden und Großeltern immer.

In Japan (Tokyo) bin ich in den letzten 7 Jahren leider nur einmal gewesen. Letztes Jahr im Januar zu einer Fortbildung für Japanischlehrer. Aber glücklicherweise muß ich mich nicht nur in Büchern mit Japan beschäftigen. Da wäre zum Beispiel die Partnerschaft zwischen der Universität Bonn und der Waseda Universität zu nennen. Jedes Jahr im März habe ich das Vergnügen japanische Studenten im Rahmen eines 4-wöchigen Kurses zu unterrichten. Vormittags lernen die Stipendiaten die deutsche Sprache und Kultur theoretisch im Klassenzimmer. Die Nachmittage sind ausgefüllt mit Ausflügen, Besichtigungen und vielen anderen Events. Eine Exkursion nach Berlin steht auch jedes Jahr mit auf dem Programm. Auch sonst mangelt es mir nicht an Möglichkeiten hier im Rheinland, in Bonn, Köln und Düsseldorf, mit Japanern und japanischer Kultur in Berührung zu bleiben. Die Deutsch-Japanische Gesellschaft in Bonn ist wie sie sicher wissen sehr aktiv und das japanische Kulturinstitut im nahegelegenen Köln bietet auf der Ebene von Ausstellungen, musikalischen oder theatralen Aufführungen, Filmretrospektiven und Symposien so manchen Leckerbissen an.

Aber leider ersetzten all solche Aktivitäten keinen leibhaftigen Besuch in Japan, in Kagawa, in Takamatsu... Wie gerne würde ich einmal wieder mit dem Boot nach Shodoshima fahren, in einem kleinen Restaurant die berühmten Udon essen, Karaoke singen, den Konpira-Tempel besuchen, aus meinem Apartment auf ein Reisfeld schauen, in einer Izagaya Umesaua(?) trinken oder in der Setonaikai baden. Natsukashii. Einst steht fest: Es dauert nicht mehr lange und ich werde meinen Urlaub in Kagawa verbringen. Ich freue mich jetzt schon darauf. Bis dann! Liebe Grüße aus Bonn !!! Ihre Annette

アネッテさんは、初代の国際交流員として、香川県に滞在されました。



Er trommelt, was seine Taiko hergibt

JAPAN Der Tannenbuscher Helmut Schreck wollte eigentlich nur die Sprache erlernen, erfuhr von dem traditionellen Instrument und ist seitdem davon begeistert. Schweißtreibende Angelegenheit

Von **Katja Mitic**

TANNENBUSCH. Manchmal wird es laut im Tannenbusch. Neugierige, die die Ursache des dumpfen Getrommels finden wollen, stehen bald vor dem Haus an der Jakob-Hengstler-Straße, in dem Helmut Schreck wohnt. Ihn selbst allerdings stört das Geräusch nicht. Denn wenn es so richtig dröhnt, fühlt er sich in seinem Element. Dann schlägt er seine Taiko – eine japanische Trommel.

„Zum Taiko bin ich über die Deutsch-Japanische Gesellschaft gekommen", erzählt der 44-Jährige, der dort im Vorstand sitzt. „Japanisch habe ich aber nur gelernt, weil ich meinen Kopf in Bewegung halten wollte, um nicht einzurosten." Sprachen hatten ihn schon immer fasziniert. Und deshalb lernte er japanisch und suchte Kontakt zu Sinnesgenossen, die sich ebenfalls für den Fernen Osten interessierten. Da kam die Deutsch-Japanische Gesellschaft gerade recht. Als er zum ersten Mal die Taiko-Gruppe aus Düsseldorf bei einem Auftritt schlagen hörte, wollte er nur noch eins: mitmachen.

Schwierig war das nicht, aber schweißtreibend. „Für das Taiko braucht ein Spieler rhythmisches Gefühl, körperliche Ausdauer und ein gutes Gedächtnis", so der selbstständige Medienvorlagenhersteller. So benutzt er zum Trommeln schwere Stäbe und muss alles auswendig lernen, weil es keine Noten gibt. „Ungefähr drei bis vier Wochen braucht man, um richtig trommeln zu können", sagt der Japan-Fan über sein außergewöhnliches Hobby, das er erst 1998 entdeckte. Heute spielt Schreck in der Taiko-Gruppe „Shin-Daiko" und hatte auch schon die ersten öffentlichen Auftritte.

„Bei uns in Deutschland ist Taiko etwas ganz Außergewöhnliches. In Japan gehört es allerdings in den Alltag. Früher wurde das Musikinstrument in Tempeln gespielt", sagt Schreck. „Aber es werden nicht nur religiöse Lieder gespielt, sondern auch Erntestücke."

„Ungefähr drei bis vier Wochen braucht man, um richtig trommeln zu können"

Richtig vom Taiko-Fieber gepackt, baute sich der Trommler eine Taiko selbst. Ein altes Weinfass, rund 200 Möbelnieten, eine Rinderhaut und viel Geduld brauchte er dafür. „Drei bis vier Monate hat es gedauert, bis ich überhaupt alles über den Trommelbau wusste." Informationen hat er aus dem Internet, von Schreinerfachleuten und aus japanischen Büchern. Die kann er durch seine Japanisch-Kenntnisse gut lesen.

Und auch sonst fasziniert ihn alles, was mit dem Land der aufgehenden Sonne zu tun hat. Erst vor kurzem hat er einen Taiko-Kurs an Ort und Stelle absolviert. „Wir waren in Matsujama, das ist eine Stadt auf der kleinsten Insel Japans Shikoku", sagt Schreck, der seine Wohnung auch japanisch auszustatten versucht. „Ich schlafe schon wie ein Japaner auf einer ganz harten Unterlage." Auch ein Samuraischwert, ein Kimono, kleine zierliche Teetassen und viele andere kleine Mitbringsel reihen sich in Schrecks Arbeitszimmer aneinander.

Beruflich hat er aber noch nicht mit Japan Kontakt aufgenommen. „Wenn das Hobby die Arbeit durchdringt, ist das vielleicht doch nicht so positiv", so der Trommler. Bis dahin will er noch viel mehr Trommeln lernen und baut auf dem Speicher einen speziellen Raum aus, damit die Bonner aus der Gruppe mal gemeinsam eine Übungsstunde abhalten können, ohne gleich die neugierigen Nachbarn zu verschrecken.

In einem traditionellen *Kostüm trommelt Helmut Schreck.* FOTO: ENGELS

シュレックさん（独日協会ボン理事）には、香川日独協会のホームステイプログラムなどで大変お世話になっております。

ご挨拶

高野光司
ゲッティンゲン大学医学部教授
高松短期大学教授

高松にまいりましてから丁度３年になりましたのに、今頃「ご挨拶」とはおかしいですが、社交性に乏しい私には、なかなかお友達ができないで淋しく思っております。昨年、協会で講演させていただいたり、その他の行事で、３０人くらいの方々には認識いただきましたが、協会名簿にはその５倍くらいの方がいらっしますので、この機会に「ご挨拶」申し上げ、お付き合いの程お願い申し上げます。

私の家はドイツにあり、高松は単身赴任です。妻は独文学専攻ですから高松にいれば、お仲間にいれていただくところですが、これは中央大学で、各学部共通の「児童文学論」の講義、独文の学生のドイツ語担当をしており、これも単身赴任です。昨年の本協会の忘年会には、丁度その日に二人で、成田出発で帰宅いたしまして、皆様と歓談できず、まことに残念でした。

昨年の私の講演会の日には、中村会長様から過分のご紹介をいただき、本会報にも書評を賜るということですが、私には、半自費出版の「ゲッティンゲン便り」（日本図書刊行会）という本がございます。お読み頂ければたいへん嬉しく存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。出版社によりますと、絶版のおそれがあるとのことです。

私ども夫妻も、この年になっていつまでも、バラバラに住みたくありませんので、もう一年か二年で皆様ともお別れせねばなりませんが、今後ともよろしくお願いもうしあげます。

私はゲッティンゲン大学医学部で、２５年と１週間、現役教授、運動神経生理部長、後に病態神経生理部長としてすごしました。私ども家族は合計３２年（マイナス日本滞在期間）をドイツに住みました。妻は、ドイツ文学者、民俗学者、グリム研究家として、いずれも世界最高峰のお三方を師と仰ぐ幸福をえています。長文のドイツ語の二論文その他の論文のほかに、”グリムおばさんとよばれて”（こぐま社）、”心の日記”（講談社）の翻訳書があります。前者はまだ買えます。後者はドイツでは出版されてすぐに８万部も売

れたそうですが、日本ではもう絶版になってしまいました（私の手元にはまだ何部かあります）。

娘二人はピアニストとヴァイオリニストで、いずれもヨーロッパ、アメリカの有数なホールで演奏活動をしています。娘婿の一人、Stephan Forck は昨年３３歳でベルリン音大（東）のセロの教授になりました。彼は、Vogler Quartett の一員です。この弦楽四重奏団を、吉田秀和氏（昨年の文化勲章受賞者）が、１９９４年に「音楽の友」紙上で絶賛されています。「特にセロの快音が響く」とも書いておられます。このフォークラー・クワルテットは今年９月，１０月にニュージーランドと日本に演奏旅行にまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

以下は、ゲッティンゲンのあらましを書いてあったものです。

ゲッティンゲン について

ゲッティンゲンは、東西ドイツ合併後、ほとんど、地理的にドイツの真ん中にある、人口十二万の大学研究都市です。ゲッティンゲン大学の学生数は現在約三万。正式の名前はゲオルグ・アウグスト（ジョージ・オーガスト）大学といいますが、これは、創立時、一七三七年、大英帝国とハノーヴァー王国の王を兼ねていた人の名前です。ヨーロッパの「古い大学」とはいえませんが、最初から、学問の自由を旗印に創られた、世界最初の大学です。創立以来、英国はじめ世界各国から、この大学に学生が集ってきました。この大学で勉強した Ｗ．ｖｏｎ．Ｈｕｍｂｏｌｄｔは、この大学をお手本として、ベルリン大学の創設にたずさわりました。

人類学の祖、近代地理学の祖、体操の父、統計学の父、教育学の祖、幼稚園を初めて創った人、有機化学の祖、物理化学の創始者、数学の帝王などと、この大学が生んだ偉大な学者を数え上れば、きりがありません。誰でも知っているグリム兄弟（二人とも偉大な学者です）も、当大学の教授でした。、多くの日本人学者、たとえば、皇后陛下美智子様の叔父上の数学者で、文化勲章受賞者の正田健次郎も、当大学に留学しました。札幌農学校のクラーク博士も、原爆の父、水爆の父といわれるアメリカ人も当大学で博士論文を書きました。ゲッティンゲンで教えたり、研究したり、学んだりした人たちから、四十人のノーベル賞受賞者が出ています。最近は、一九九一年に、私の若い同僚(神経生理学者)二人がノーベル医学生理学賞を受賞しました。一九六八年の受賞者アイゲン先生とは良く大学の行事や学会その他のパーティーなどで一緒になったり、町で出会ったりします。

「ゲッティンゲン便り」のご紹介

中村敏子

「私は、模型飛行機製作に熱中した少年時代、原子物理学研究を夢見た十七、八歳の頃からゲッティンゲンに憧れた。お読みいただいた『ゲッティンゲン便り』から、私の心の故郷がゲッティンゲンであることは、おわかり頂けよう。」

著者が、日本医事新報に「ゲッティンゲン便り」として稿をおこしたものを主に、雑文を加え一冊にまとめた本のあとがきである。30年もの間、運動神経生理学者、医学者、そしてドイツの国家公務員（ベアムター）として家族とくらした街・ゲッティンゲン。この街とその周辺を、かかわりある人物とともに、あますところなく愛をこめて書き込んでいる。

かなり以前の事になる。高松短大の開放講座プログラムに『「グリム童話」　講師：独文学者　高野享子』という欄を目にした。高野姉妹（ドイツ在住）のデュオ・コンサートが高松で催されたのは、そのあとだったと記憶する。そして、2年前の春、協会主催のビアパーティの席上で享子女史の夫であり、姉妹の父である著者に会った。こういう流れがあったからか初対面とは思えず親しみを込めて迎えた。

それにしても、緩急自在36編、読みごたえのある見事な筆はこびである。専門分野は、ゆっくり時間をとって読むとして、神経伝導速度「チビは速い」はおもしろい。国際破傷風会議でのグスタフ16世 を書いた「王様の失敗」は「1989年」とともに忘れられない。音楽にかかわる４編は、身内でなければかけない詳細にふれ、情感が漂い音楽への想いが伝わる。尋常でない出来事を、科学者の冷徹な目がたんたんと綴る「狂犬病」は背筋の冷え上がるありさまであればあるほど筆がさえる。この稿は亡き父上への鎮魂歌であろう。

豊富な経験と旺盛な好奇心。するどい科学者の目とほどよいユーモア。ドイツにあって「私は日本人」と胸を張る著者がいたるところに見え隠れして、痛快に人をひきつける。そんな味な一冊である。

ドイツの小都市「月沈原」

グリム兄弟やガウスも教鞭をとった ノーベル賞受賞者40人の大学で 25年間勤めた医学部教授からの便り

高野 光司

日本図書刊行会

ゲッティンゲン便り

高野 光司

日本図書刊行会

目次

まえがき
ゲッティンゲン …… 11
ゲッティンゲン大学二百五十年祭 …… 16
ドイツの冬 …… 20
ゲッティンゲンと私 …… 24
ゲーテとゲッティンゲン …… 29
ゲッティンゲンの記念板――高木貞治の家―― …… 33
ビルロート、ブラームス、シーボルト …… 42
グリム兄弟 …… 49
ドイツの紙幣 …… 55
クック船長の収集品 …… 62
マクス・プランク …… 66
外国語の難しさ …… 78
「レントゲン」か「レンチェン」か …… 83
外国への理解 …… 87
幸せな日本人 …… 92
ヨーロッパに来る人のために …… 98
街角の音楽家 …… 123
拍手のない音楽会 …… 127
知られざる名オーケストラ …… 131
フォークラー・クワルテット …… 137
一九八九年 …… 141
学生実習 …… 149
チビは遠い …… 154
王様の失敗 …… 164
教授への道 …… 171
破傷風研究百年 …… 182
狂犬病 …… 186
赤筋と白筋 …… 196
コロンブスの卵 …… 208
一九九一年ノーベル医学生理学賞 …… 230
ヘンレ・メダル …… 241
大学のランク …… 245
アレルギー性鼻炎（ホイシュヌッペン） …… 250
ルッチュマン博士の腰痛 …… 259
納豆をつくる …… 266
心の日記 …… 269

短　歌　２１首

北川　　祥

ボン駅に立てば逸るベートーヴェンの
　　生家に急ぐ地図を片手に

”さわるな”の立て札読めぬふりをして
　　そっと撫でしベートーヴェンのピアノ

遠き日に読みしハイネを辿りつつ
　　何度も歩くハインリッヒハイネアレー

おうた子に教えられ居る幸せを
　　しみじみ思うデュッセルドルフ

ケルンからＴＧＶで駆け抜ける
　　北パリ駅に感無量

記念にとモンブランのペンくれし
　　吾子は貴重な初月給で

旅行けば袖れ合うよな縁でさえ
　　万感せまるデュッセルドルフ

『人生は一幕の劇』と書きくれし
　　藤本義一氏渡独のわれに

突然にドルトモントに飛ばされた
　　デュッセルドルフ空港火事のあの時

皆既日食１３６年ぶりの天体ショー
　　神秘と出会うデュッセルドルフ

皆既日食見らんが為の日食グラス
　　我も欲しいハインリッヒハイネアレー

眩しそうに日食グラスをかざしつつ
空を見上げるローマ法王も

金色の木の葉舞う中沛然と
ハインリッヒハイネアレーに雨がふる

まばたきでごまかすドイツへ出発の
吾子を見送る早朝のプラットホーム

休暇終えし吾子を見送るもう少し
近いといいなデュッセルドルフ

ハーモニカ吹く人の手足すでに無く
耳につるして全身で奏でる

ケーに立つ物乞う人らに降り積もる
ボタン雪は白き凶器

放心状態の路上に座る難民の口に舞い込む一片の雪

無謀すぎると思いつつも決行す
ゲーテ語学学校のインテンシブクラス

二ヵ月間は困難すぎて七転八倒
されど友を得る素晴らしきチャンス

（２０００年１月３１日）
「そろそろ、十三度目の渡独準備にかかります。」

3つのカルチャーショック

～ヴィースバーデンに暮して 1998.03～1999.02～

明神　実枝

＜ヴィースバーデン＞

2000 年以上の歴史を持ち、古くから経済・文化が繁栄した、温泉保養地としてドイツでも人気のある、ライン川とタウヌス山地に挟まれた、ワイン畑の広がるネロベルクから眺めの良い、“緑のオアシス”と呼ばれる、自然との調和の美しい、エレガントで落ち着いた、ヴィルヘルム 2 世皇帝の命により建てられたネオバロック様式のヘッセン州立劇場ではオペラを鑑賞し、新古典様式のクアハウスではコンサートや室内楽に聴き入り、カジノではルーレットを楽しめる、お喋りを楽しめるレストランやクナイペがあって飽きることのない、彩色豊かな収穫物に染まった市場では人が賑わう、ゲーテも保養に訪れたことのある、多くの芸術家にインスピレーションを与えた、旅人の心を休める、人口約 27 万人で大きくもなく小さくもなく、治安も良く、フランクフルトから S-Bahn で 40 分位と地理的環境にも恵まれた、“北のニース”とも呼ばれる、ヘッセン州の州都である、そんな街ヴィースバーデンに、私は 1 年間留学する機会が与えられた。

＜留学を決意するまで＞

ドイツへの留学を考え始めた切っ掛けは、幾人かのドイツの学生との出会い、交流であった。もともと英語や異文化への興味を持っていながら、大学入学後のあまり外国人との交流に積極的でなかった頃、偶然に香川日独協会の交換プログラムによって高松を訪れたドイツ・ボン大学の学生との交流を持つ機会に誘われた。ドイツの学生との交流は初めてであったが、彼らとの交流によって、より興味を追求していきたい新しい世界が開けたようにドイツに興味を持つようになった。彼らはボン大学で日本学を専攻し、日本語や日本の文化・習慣を学ぶために夏季休暇を利用しての来日であった。交流の中では、まず私は彼らの学ぶ姿勢に圧倒された。一緒に高松見物に出かけた時にも食事をした時にも、厚く重い独和・和独辞典を持ち歩いて新しい言葉をその場で習い、日本についても次々に大変興味を持って質問してきた。また、日本語についての質問に始まって日本の歴史や文化、政治・経済、現代の社会問題に至るまで、あらゆる分野の質問を受け、恥ずかしながら返答に詰まることもしばしばであった。自分の未熟さに気づかされながらも、こちらもドイツについて尋ねているうちに、ドイツに対する興味関心が大変高まり、このような会話や討論をより深めたいと考えるようになった。取るに足らない小さな出会いであったが、私の勉強意欲、新しい事へのチャレンジ精神を掻き立てた大変意味のある出会いであった。

ドイツ留学を決意したもう一つの大きな理由は、ドイツが技術大国・経済先進国であると言われながら、自然環境保護対策においても先進国である点の理論的な矛盾であっ

た。「技術、すなわち便利な生活を採れば、自然破壊が生じるのは当然であり、何とかしなければならないが仕方がない」という考え方を持っていた私は、自分の考えの浅さに気づかされ、ドイツの技術保持と自然との共存について詳しく知りたい、実際に見聞きしたい、と考えるようになっていた。これがドイツ留学への興味をさらに膨らまし、その決意に大きく関わった。

＜留学を終えて＞

ドイツでの一年間は、ドイツ語に苦労させられながらも驚きや喜びに包まれた語りきれないほど多くの経験を得られた一年だった。生活の中ではドイツ独特の文化や習慣に驚きながら、大学生活ではドイツ人学生の非常に熱心な勉強振りに慌てふためきながら、同時に新しいものに触れる喜びを味わい、新しいものへの興味が深まった。この一年を振り返って紹介したいことは書ききれないほどあるけれど、ここでは楽しかった思い出よりも私の受けたカルチャーショック、そしてそれについて考えたことを紹介したい。

人に優しい社会

まず第一のカルチャーショックは、ドイツの男性も女性も老人も障害を持った人も生活しやすい社会とお節介なくらい親切なドイツ人に対してである。

例えばバスや電車には、必ずと言って良いほどベビーカーや車椅子のためのスペースがある。それだけでなく周りの人が彼らの乗り降りを当然のごとく助けている。またシルバーシートは装備してあるだけでなく、老人以外の人が座らないというモラルもある。設備が適切に整っているだけでなく、利用者が適切なモラルに従った行動をしている。

お節介なくらい親切なドイツ人には旅先でよく出会った。ドイツを訪れた母と旅行中のある時、母が自動販売機で電車の切符を買っていると電車が来てしまったので、走って飛び乗ったことがあった。その時、慣れない母は自動販売機から出てきた釣銭のコインをいくつか落としてしまった。でも電車に乗りたかったのであきらめて走ったのだが、後ろからドイツ人のビジネスマンが追いかけてきてコインを届けてくれた。大変嬉しかった。おかげで母はドイツ人が大好きになった。

ボンを訪問した時、方向音痴が始まって地図を見ていると、“May I help you?” と積極的に助けに来てくれて、途中までつれて行ってくれたこともあった。

また、駅のホームで電車が来ていなかったので「あれ、間違ったかな？」と時刻表を調べようとしたところ、隣に立っていた人が「どこに行くの？」と聞くので、「ミュンヘンまで」と答えると、「ここであってますよ」と周りにいた3～4人の知らない人達が口々に教えてくれた。

「お節介なくらい親切なドイツ人」と表現したのは、私が困っているけれど誰かに聞こうかどうしようか、誰に聞いたら教えてくれるだろうか、などと考えようとする瞬間に、すでにドイツ人のほうが聞いてきてくれたからである。自分の消極性を思い知りな

がら、日本に親切な人がいない訳ではないが、ドイツ人の親切さは日本のそれ以上であると感じた。

環境政策

ドイツの優れた特徴の十八番でもある地球環境問題への徹底した取り組みには脱帽した。話に聞いていたとおり、ゴミの分別収集方法が機能的で徹底されていおり、ビンの再利用や買い物袋の持参など、日本にはない取り組みが見られた。でも実はドイツに行ったばかりの頃、ゴミが落ちている街を見たり、実際には非協力的なドイツ人もいるということを知ったりしたことで少し失望し、ドイツの環境政策は話に聞いていたほどではないと考えるようになった。しかし、ドイツが環境大国と呼ばれるには必ず理由があるはずだと思い、帰国してから卒業論文において日本とドイツにおける環境問題に対する意識と取り組みに関して日独比較を行なうことにした。その中で私なりに日本とドイツの違いを明確にしたことを通して「やはりドイツはすごい」と思い直した。

地球環境のためにすべき行動に関する統計の結果では、ドイツ人は環境に配慮した製品を進んで買うこと、不買運動などの消費者運動を起こすことなど社会や企業に対して意志表示する行動を答えている。一方日本人は環境負荷に関する知識をつける、必要ないものを買わないようにするなど個人レベルでできることを答えている。これを見ても分かるように、日本人とドイツ人の環境政策に対する意識は全く異なっている。

ドイツは天然資源に恵まれなかったからこそ再利用する知恵が生まれ、環境破壊が問題になる以前から意識が高かったと言われる。また、ドイツはドイツ文化を生み出した森が酸性雨被害にあったからこそ、徹底して取り組むようになったとも言われる。必要に迫られて仕方なく取り組んだ理由も揃っている。しかし、生態学（エコロジー）という学問の発祥の国でもあり、人々の意識も高かったのではないかとも思われる。

他にも、政府の政策、企業の戦略の展開方法、国民の意識において、数多くの違いが見られるが、これからの日本はドイツの環境への取り組みを見習いながらも、我々独自の方法の体系が完成される必要があると思われる。

平和への願い

ドイツでの生活が始まった頃はドイツ語がまだまだ話せず、市民大学（Volkshochshule）で開かれている語学講座を受講していた。秋に受講したクラスでは、イギリス、スペイン、オランダ、ポーランド、ロシア、ルーマニア、アゼルバイジャン、トルコ、ギリシャと主にヨーロッパの各国からの15人のクラスメイトと共にドイツ語を習った。

毎回異なるテーマのためにそれぞれの分野の専門用語を習い、そのテーマについて討論し、宿題はそれについてのレポートを書くことだった。取り扱ったテーマは、民族紛争と難民問題、女性の社会進出、人口の都市集中化と農村の生活、地球環境問題、教育

制度など、国は違っても誰もが考えたことのある、そして考えていかなければならないテーマだった。こういった勉強の仕方だけでも私にとってカルチャーショックだった。日本では与えられた文章を訳したり翻訳したり、穴埋めや並べ替えによって完成させたり、と言う作業が語学学習のメインであるが、ドイツでは自分の考えたことや思ったことが自分の力でドイツ語の文章にできるようにすることが最大の目標であり、私はこんなに考えさせられる方法で語学を勉強したことがなかったからである。

しかし、私にとって最も心に残っているのは「戦争と平和」というテーマに関して、ベルリンの壁崩壊に至る戦争の歴史について学習したことである。ナチのユダヤ人迫害、第二次世界大戦後のベルリン東西分割、そして壁崩壊による東西ドイツ統合、周辺の共産主義体制の崩壊などの数々の悲劇、確かに中学校・高校の歴史の授業で習ったけれども、私にとってそれらは教科書の中の話、テレビの中の出来事であったことを認めざるを得ない。「1989年11月9日のベルリンの壁が崩壊した時、何をし何を考えていましたか」という質問に対して、私の答えは「その頃は中学生で、朝起きたらテレビのニュースで壁崩壊を報道していた。その時初めて壁があった事を知った。」というなんとも恥ずかしいノー天気な中学生だったことを象徴するものだった。

一方、旧共産主義国、ロシアやルーマニア出身のクラスメイトの答えは「13歳だったので良く分からなかったけれど、将来に対して不安を覚えた」、「教科書の内容が全く変わった」、「ベルリンの壁のことはあまり印象に残っていないけれど、自国の大統領夫妻の銃殺刑をテレビで見ていた」など、生々しかった。また、そのクラスの先生は、ご主人の祖父がユダヤ人収容所送りになったことを話した下さった。

私は歴史の教科書に飛び込んだような気分だった。日本が戦後急速な経済成長を遂げたことも手伝って、学校の歴史の時間に習ったことはすべて「過去」と捉えてしまっていたし、朝鮮との間に残された諸問題、原爆の被害に対しても意識が低下してしまっていた。だから、東西冷戦が終結した後も心に残る傷を語ってくれたクラスメイト、強く平和を願って「戦争と平和」というテーマを取り上げ、以前は対立していた国の人間がお互いに心の内を語り合う機会を与えて下さった先生からは、語学以上に大切なものを学んだ。

しかし、このテーマはどのクラスでも取り上げられるテーマではなく、討論が活発にならないクラスもあれば、難民センターのような施設で教えるクラスでは今現在対立している国からの亡命者が同じクラスにいると、急に喧嘩を始めたり、ナイフを持って立ち上がったりすることも珍しくないということを聞いて、冷静な意見交換ができたことに感謝すると共に、私も一人の日本人として、平和を願い続けていきたい。

長くなるのでこの辺で。私の体験に興味を持ってくださった方、ぜひ一緒にコーヒーでも飲みに行きませんか。私の意見に対するご意見をぜひ聞かせて頂きたいです。

夏の旅 ―― 中部ドイツ北上の旅

乗松　達郎

第１回の旅は、デュッセルドルフから、ハイデルベルグ、ミュンヘン、ザルツブルグと左上から斜めに動き、第２回の旅は、ベルリン、ライプツイヒ、ドレスデン、プラハ、最後にフランクフルト・アム・マインと東側を眞直ぐ下への旅だった（日独協会々報へのせてもらった。）。第３回は、バンベルグに始まり、ハンブルグにほぼ眞直ぐに北上だが、時々、枝が横に延びている。前回はハイネの謳う通りschönen Monat Maiの気分を楽しみ、ベルリン・フィルからの帰りは寒々とし、最後のブタペストは３０度をこえる温度差だった。

さて、７月４日からのドイツの旅は、ドイツの家庭ではまづ冷房はないとも聞いていたが、相当暑いかも知れないと覚悟はした。国際交流協会（アイパル）で習っているデーゲン先生に聞くと、「可成り雨が降るよ」。

初日、バンベルクのホテルの部屋に入ったのは午後１１時半。フランクフルトから２時間はバスで揺られた。

次の日、心地よい鳥の声で、目をさますと、快晴。中世の佇まいを残すこの街は戦火を免れ世界文化遺産になっている。

散策。中世そのままの家並みが美しい街を、現代のスピードで走るアウトに気をつけて歩く。地ビールで有名な、生即販のレストランはチャンと記憶に止める。人口６万の都市に過ぎたるものと云える大聖堂は、８１ｍの高尖塔４本を持つ立派なもの。こんな大建築はカメラには入り切れない。この地のバンベルグ交響楽団は優れた評判を持っているが何分少ない人口で、聴衆もそれにつれて少なく、出張公演が多い由。指揮者のホルスト・シュタイン氏はＮＨＫにもよく出ているから、先刻ご存じの通り大きな頭にやさしい目をしている。先日もワーグナーのタンホイザーを振っていた。

町の中央を流れるレグニッツ川の橋の上に市役所がある。その川沿いの漁師の古い家々の彼方に城や寺院を見る眺めは美しい。小ベニスの名をもつのもうなづける。フランス・アルザス・コルマールに同じ名の地区があるが、軍配はこちらに上げる。自由時間の間に早速地ビールを試みる勇士がいた。

午後はバイロイトへ。かなりの暑さの途中の光景（フランケンのスイスの稱あり）をワインを飲んだ目で見ること一時間余。バイロイトの街はワーグナーがわざと選んだ僻遠の位置。音楽シーズンになると一挙に人口がふえるこの町も今は昼寝の時間のように静かである。１８７６年ルートヴィッヒ二世によってワーグナーのために建てられた祝祭劇場も今は静寂の中にある。第１回公演は、「ラインの黄金」だが、赤字のため、第２回は６年後になったとは今では信じられない。現在ＶＩＰでない、数ならぬ我々が入場券を手に入れるのに、３年から５年は要するという。更に次のこともあって、ここは気強くあきらめ

るにしくはない。即ち、小林秀雄が戦後、まだ日本人としては珍しい時期、ニーベルンゲンの指環を聞くため休み２日を入れて６日間滞在したときの感想。「坐り心地の悪い椅子でつらいことですよ。本当につらいことですよ。じっと坐ってね」。

ワーグナーはリングの完成に２５年の歳月を費やし、台本であるゲルマン伝説に基づく韻文も自ら書き下ろしたが内容も語法も難解。丸山眞男が初めてバイロイトを訪れローエングリンに感動しつつも隣席のドイツ人に聞いた。「あなた方はあのワーグナーの台詞はみんなわかりますか」すると隣人は「いや大事な箇所だけです。ワーグナーをきく前の日には台本を読んでおくのだけれども……」と答えた。それを聞いて、ドイツ人においてなお然りか、と彼は大いに安堵した。

旧制高校でワーグナーの小説「ベートーヴェンまいり」を習ったが仲仲面白くて、別に難解とは思わなかった。イギリス人と競い合ってベートーヴェンに面会する話であった。最近岩波文庫で復刊されたのでもう一度読んで見た。これは３０前の作で、好短篇の評判だ。

バイロイトと日本人のエピソード（笑い話か）もう一つ。団体旅行客の日本人が、第一幕が終ったとたん一斉に席を立ち、ポッカリとそこに穴があいたとか。

ワーグナーもユダヤ人嫌いだったが、ヒットラーは彼を崇拝して、ワーグナーの自筆の楽譜がルートヴィッヒ２世に捧げられた後、めぐりめぐってヒットラーの所有になったが、ヒットラーは自殺の際にこれを処分したという。彼の死のラジオ発表の時に流された曲は、ジーグフリードの葬送の由。

次にバイロイトで涼しさの快い林の中を歩いてたづねたのは、ワーグナーとコジマの墓、花が一杯供えられていた。そしてすぐ近くのワーグナー記念館。彼に関係する豊富な貴重資料を所蔵しているが、館内の出来具合は実に良くない。同じ階の隣の部屋に行くために、一度階段を降りてまた別の階段を昇ってやっと辿りつく始末。少し疲れて大きい広間で休む。管理の人にワーグナーの音楽を頼むとタンホイザー序曲を流してくれた。広間の周囲の本棚はすべて革張のものがぎっしり詰まっていた。

館の入口にブロンズが立っている。若き日のルートヴィッヒ２世だが緑青がまだらに流れて、有名な美貌が痛ましくも失われている。

バイロイトの街頭は暑く、バスの運転手は３７度といった。現地ガイドの日本人女性に聞いた。「自分の好みで次々と王宮を建てたり、ワーグナー惜しみなく応援して、果は国を傾けたルートヴィッヒ２世について、今のドイツ人はどう思っているのか」。答、「今のドイツ人は彼が好きで、人気があり、評判が良い」。何かほっと救われた気になった。この女性はヴュルツブルグ在住で、近く日本を訪問し、四国にも行って高松にも回るとの話、再会を約した。

夜、ホテルの食事の後で有志５人が街に繰出し、地ワインを何種類も試して見た。

翌日は前日と打って変って雨の一日。デーゲン先生の言葉「雨が多いよ」の通り。

先づワルトブルク城を目指してチューリンゲンの森をひた走る。いよいよ城のある山頂に

通ずる山道、これが狭い。対向車があり谷側を行くとなればひやひや。中腹にある昼のレストランでいつもの通りワインを少々嗜んだ後、傘をかざしつつ登らねばならない。往来する人も多く、坂もゆるくない。なかなかきつかった。ワルトブルク城は中世のままの姿で建ち、色々の点で名を知られている。タンホイザーで吟遊詩人たちの歌合戦の場といわれる広間。エリザベートの間等いずれも壁には色々のいわれを描いた絵があり、その他の壁の部分、天井、柱、それぞれモザイクで様々の模様に飾られ、美しく、立派であり、圧倒される思いになる。写眞でわかるかどうか、柱も上部は半円形に翼を拡げて、素晴らしい効果を上げている。エリザベートとは中世この城の城主に嫁いだが、その夫を若くして失くし到頭ここを追放されるものの慈悲の心厚く悲運をのりこえて慈善活動にいそしむことで大いに人々を感化し、後には聖人とされた。この聖人エリザベート詣りに参ずる、カトリックの人々が各地から多い。もう一つは、プロテスタントにこの城は縁が大きい。
１５２１年ルターが帝国議会で国外追放処分を受けた後、フリードリヒ賢明公の保護の下、この城に地方貴族イエルクの名で変装しつつ潜伏した。そして、聖書のドイツ語訳に専念したのである。その部屋は迷路のような通路をたどり、奥の奥にある６畳位の大きさで質素な机と椅子だけがあるが、ルター使用のものではないとは残念。只一つこの部屋ルター当時のものがある。部屋の隅に石臼を二つ重ねたような形のものがある。ルターが仕事中に使った足置の台、鯨の首の部分だという。当時キリスト教徒とはいへ、ラテン語の聖書を読める者は僅少であったが、それが直接自分でキリストの教えを受けることとなった意義は大きい。それに加えてドイツ各地バラバラの使われ方の言葉が一つに進む働きも大きい。ダンテの神曲によってトスカナの言葉がイタリアの標準語になり、マンゾーニの「いいなづけ」によって近代イタリア語化のモメントが生まれたのと同様である。

狭い山道を降りて一安心、アイゼナッハの町である。

バッハ記念館では余り愛想のよくない担当女性が当時の楽器、チェンバロなど三種を使って彼の曲を演奏してくれると、満ち足りた気分になった。記念館前に上半身像があるが、気嫌の良くない顔である。伝記によると彼は一生余り笑うことのなかった人というから当然だろう。彼の顔のシルエットのしおりを買う。

ここアイゼナッハ、バッハ生誕の地と後半２７年を暮らした終焉の地ライプチッヒをともに訪れたことになり、更にこれから彼に縁のあるワイマール、リューネブルグ、リューベック、ハンブルグもたづねるので彼の没年２５０年にふさわしいと自分では気に入っている。

雨の中、未だ明るい内にワイマールにつく。宿はマルクトプラッツに面する名門ホテル、クレペンスキー・エレファントホテル。あるドイツ語雑誌には、ホテルの正面、客室の内部まで紹介していたので、そうなのだろう。トーマス・マンの「ワイマールのロッテ」にもこのホテルが登場している。マルクトプラッツは、市が立って、花、野菜、肉などの食品、日常用品を売っており賑わい、風情がある。市役所はすぐ前にあり、このプラッツに面する家並みの一角にルーカス・クラナッハの旧宅がある。彼はルターと親しく多くの肖像を

残しており、また、ヴィーナスやイブの絵が世界各地の主要美術館にあって、却って研究者泣かせと聞いたこともあるが、その墓碑銘に「もっとも迅速な画家」と彫られているのももっともであらう。
私が始めて多分シカゴ美術館で見た「アダムとイブ」の妖しく、魅力的な印象は今も消えてない。

夜の食事はすぐ近くの白鳥亭 zum Weißen Schwan、ゲーテもよく通ったという、余り大きくはないが洒落た感じ。今の天皇が皇太子時代で食事した部屋は最上階にあり、それとおぼしき椅子に坐って見た。ドイツの料理は塩味が強く、また量も多いので我々シニアは少々閉口したが、そのうち慣れたし、残すことも覚えて、旅の途中から気にならなくなった。

バッハの旧住宅の標示銘板がホテルのすぐ近くにあった。バッハの住んでいた頃（1708～１７年）のワイマールは人口５０００人位、次のケーテンは約３０００、最後のライプチッヒ（１７２３～５０年）は3万人といわれる。バッハがワイマール宮廷楽団内の昇進問題や、ケーテン領主から相当の高給で招かれた時に、なかなか、バッハの解任が認められず、退任を強く主張しすぎたとの故で１７１７年１１～１２月の間このワイマールで禁固処分を受けている。さぞ寒かったこと同情する。

ワイマールは１９９９年がゲーテの生誕２５０年の記念年当りヨーロッパ文化都市として、多くの観光客を迎えていた。生まれたのはフランクフルト・アム・マインだが、このワイマールに５７年も住んでいる。

この日も雨である。シラーの旧宅のある歩行者天国のシラー通りを歩いて、左に曲ると前々からよくインプットされている場所に出る。国民劇場前、ゲーテとシラーの銅像が立っている。この劇場ではシラーの戯曲をゲーテの演出で上演されている。シラーの戯曲は一部を除き、現在入手は勿論、図書館などでも残念ながら見ることが出来ない。例えば、ワレンシュタイン，ドン・カルロスなどの長編。旧制高校時代にシラーの固い、きびしい論文をいくつか習い、理解に苦しんだのも今はなつかしい。ゲーテのウェルテルは勿論習ったが、頭の方の文章、「過去をして過去たらしめよ」だけは覚えている。

近くのゲーテハウスに行くと入館者でごった返している。あふれんばかりの書庫、標本で充満する資料庫、それに最後に見た寝室は案外普通のベッドだった。

血ブナなどの大木がそびえる公園を気持良く歩いて行くとリストの家に着く。人生の後半をある意味で熟成期間を過ごした彼のワイマール時代、宮廷楽士長として活躍し音楽学校長として後進を育て、作曲に時間を多く割いて、傑作を作曲している。家の外側も内部も普通のレベルと見た。たまたまか当日たづねる人もない。粛然とした気持で家を出る。彼は晩年僧門に入った。

ゲーテが尊敬する人物として二人をあげている。シェイクスピアとシュタイン夫人である。この年長の愛人とは１０年間に１７００通の書簡を交わしているが、そのシュタイン夫人の家は今あそこで学校になっているとの説明。昼食はマルクトプラッツに面したクラ

ナッハの家の隣の食堂で撮った。

午後曇り空の中、エアフルトへ、チューリンゲン州の州都で１２００年の歴史を誇るというから年数では京都と同じ。人口６万のワイマールに比し人口２１万人。市内には大きい教会が随分沢山ある。とりわけ、ロマネスクの大聖堂とゴシックのゼヴェリエ教会が並立しているさまは、壮大という外ない。カトリックの教会が多いが、信者はプロテスタントが多いと。可愛らしい市内電車が走っている。ウイーンのそれを思い出す。大きな川に掛かっているクレーマー橋の上には店舗が並び土産物などを売っている。フィレンツェのポンテ・ヴェッキオと同じ。

時にリヒアルト・シュトラウスの多くの交響詩の中の「テイル・オイゲンシュピーゲルの愉快ないたずら」は、広く愛好されている愉しい曲である。

以前習ったテキストの中に岩波文庫では第２９話に当る文章があった。「オイゲンシュピーゲルがエルフルトで驢馬に旧約詩編の読み方を教えたこと」。彼は頓智のすぐれたいたずら好きで各地で知られた人物。今回はプラハで大学教授を公開討論でうまくやりこめて立ち去りエルフルトに来た。このエルフルトの名門大学の教授たちを公開状で挑発することに成功しまんまと一杯食わせて賞金を得たという話。彼が本の頁の間に燕麦をはさんで飼馬桶におくと、ロバはそれに気付いて、燕麦を食べようと次々に口でめくり、最後になくなった時、い―あ―、い―あ―と鳴いた。それを見て、オイレンシュピーゲルは大学総長たちに呼び掛ける。「精進苦心の甲斐あって、ロバはいくつかの文字、特に母音を覚えました。よろしければお見せしてお聞かせできます。」総長たちが来ると、断食させておいたロバは、新しい本をすぐに頁をめくって燕麦を探すが、何もないので、い―あ―、い―あ―と鳴いた。「ご覧下さい、「い」と「あ」の二つの母音はこれはもう読めるのです。時間をかけるともっとたくさんできるようになるでしょう」賞金を得たあとさっさと立ち去った。

このエアフルトで思い出すのはゲーテとナポレオンの会見である。

１８０８年１０月２日、この地でゲーテはナポレオンに接見を許される。ゲーテは５９才、皇帝ナポレオンは３９才。ナポレオンは朝食中でゲーテは立たされたまま。ナポレオンはその間もしきりに報告を受け、また指示を与える。ナポレオンは「若きウエルテルの悩み」を７回読んだと話して、作品に細かい批評を加えたという。特にウエルテルの自殺の動機についてなど。会見は約一時間。この扱いは我々には礼を失しているかと思うが、ヨーロッパ大陸に覇を唱える支配者と、文名は高くともドイツに３００以上もある領邦の一つの重臣とでは、当時の階級秩序の意識では止むを得ないのかも知れない。このあともゲーテは、ナポレオンを目撃したヘーゲルと同様に、ナポレオンをフランス革命を収拾し成果を引き継ぐ偉大な政治家として讃美したのであった。

次の日、快晴、ハルツの森を駆け抜ける。途中、トイレ休憩する場所、普通ガソリンスタンドやキオスクのある場所が全くない、さて困ったこと。到頭、小さな村のインフォーメーションセンターの前に止まる。多分今まで見ることのなかった日本人の一団の殺到に

センターの人々はおどろいた顔だった。
ハルツ山地の中の盆地にヴェルニゲローデの町がある。以前は東独領だったが、今は観光に力を入れて多くの人を集めている。
歩行者天国の通りのお土産屋さんには、近くのブロッケン山の魔女に因んで、箒を持った魔女の人形であふれている。若い魔女の姿は余り見かけない。町なかの建物も一風変わったものが目についく。一例、市役所。
このヴェルニゲローデは日本とドイツの百科事典にのらぬ小さな町だがすぐれた少年少女合唱団があり、何年か前、ＮＨＫで放送されたので、私もその名を知っていた。日本で発表されたＣＤ２枚についての批評を紹介する。「発声の統一も見事で、厳正なハーモニーが生まれていて、至純のひとときを味わえる。この子供たちの声は本当に汚れのないクリスタルそのものである。他の児童合唱団の比ではない。」
昼の食事のメニューを紹介しよう。Ｚｕｒ　Ｔａｎｎｅ、樅の木亭か。クリームのアスパラガススープ、魚の蒸し煮、ホウレン草とポテト添え、アップルパイのバニラソースがけ。
メインストリートを歩いていて入れずみの看板が目についた。次ぎに訪れたゴスラーの古い静かな町並みの一角にも看板があった。ハンブルグで乗ったタクシーの運転手の太い腕にも大きく彫られていた。永井荷風も〇〇いのちと彫っていたというが、まづは例外で、ドイツ人と日本人とはいれずみ観が違うのだろう。
ヴェルニゲローデからハルツ山地を行くとブロッケン山が見えて来る。ハルツ山地中の最高峰１１４２ｍ、一見何の変哲もない山容。東独領時代は、レーダー基地もあって軍事的な点で立入禁止だった。この山で４月３０日の夜、いわゆるワルプルギスの夜魔女たちが大勢集まって乱痴気騒ぎするとの話がゲーテのファウスト第一部に多くのページをさいて述べられているのは有名だが、正直な所読んで見て、そんなに面白くない。盛上がった気分になれない。どうしても理くつぽいやり取りの感じがする。この山にはゲーテ、クライスト、アイヒェンドルフ、シャミッソーなどと多くの文学者が登っているが、登山記としてはハイネのハルツ紀行に匹敵する記述は残ってないと、いわれている。ハイネ自身の表現でいえば、自然描写と風刺、皮肉のごちゃまぜであるが、面白く読ませる。紀行の最後の所で夜、宿舎の食堂で大勢の若者たちが、（他に、上流のクラスの母と娘も描かれている。）所謂ドイツ流に大声で談じ、大量に酒を飲み大声を上げ、歌を繰返す様を皮肉な目で描く。そしてそれまでは何も云わなくて最後に初めて打明けるのが、翌朝５月１日、日の出を待つ所、即ち昨夜はワルプルギスの夜に当ること。うまい切り上げ方だ。現在山頂にはハイネの横顔が自然石にきざまれている。
ハイネは実際には４月でなく９月に登っていて、山を降りワイマールに行ってゲーテに会う。１８２４年１０月２日、この１０月２日はゲーテがナポレオンに会った日。その１８０８年から１６年を経て、ゲーテは７５才、ハイネは２７才、ハイネは深い尊敬の気持ちを持っていたが、その日、宰相詩人の口許にひややかなエゴイズムを認めて、えもい

われぬ反撥を覚えて帰った、といわれる。

やがてゴスラーに着いた。旅行前から、また旅行中もゴスラーは田舎だからホテルにバスはなくシャワーだけかも知れませんと、度々言われその覚悟をしていた。ホテルは、Ｄｅｒ　Ａｃｈｔｅｒ　Ｍａｎｎ、由緒のありそうな名前。まづロビーが工事中で２階に上がれという。ごたごたした様子で矢張りそうかも知れないと思いながら部屋に入るとチャンとバスが据えられており、調べると立派なプールもある。

まだ日は高いので、近辺を散策する。大木の林の中にこれも大きな教会が静まり返っている。後で知ったことだが、１１８６年（平家物語の時期）に建てられたロマネスク様式のノイヴェルク聖堂だった。私は、個人的にはゴシックよりもロマネスクの方に親しみをおぼえる。旅行の前にフランクフルト出身の先生に「ゴスラーに行く」と旅行日程を説明すると、「一体、ゴスラーには何があるのか」と云われた。

翌朝市内見学、歴史地区といわれる所、古い古い木骨造りの家並みが続く静かな通り。現在の世界的巨大企業シーメンスの創業者の祖先の家は宏壮である。何でもゴスラーには４５０年以上も前に建てられた家が１７０軒をこえる由。確かに世界文化遺産の名もふさわしい。どの家も窓にはゼラニウムなどで飾られ、旅人の目にやさしい。相当に傾いている家もあるが保全修理は行きとどいているらしい。ドイツ人の観光団もあちこちで見かける。

西洋史の本を読むと神聖ローマ帝国という名が出て来ても、何か実感が湧かない。ゴスラーにその帝国の皇帝の宮殿Ｋａｉｓｅｒｐｆａｌｚがある。我々はその前に立った。広い緑の前庭が拡がり、二つの皇帝騎馬像が相対して立つ向うに、巨大な建物が威厳をもって両翼を左右に延ばしている。ここは１００９年～１２１９年帝国議会の会場でもあった。中に入ると装麗な大広間で中央の絵は、１８７１年ドイツ帝国の成立を物語り、中央のウイルヘルム一世の傍らにはビスマルクが鋭い目で控えている。

だらだらと前庭を下って行くと、皇帝の玉座を蔵する建物があるが奥深くて良くわからない。近くを流れる川には、古い昔から、水車がある。やがて、マルクト広場に出て来る。この町のシンボル金の鷲を冠した噴水の前。１２時になると市役所の時計塔で時計仕掛の人形が出て来るのを待つ。４つの場面が、人形たちは回転しながら、ラムメルスベルク鉱山にまつわる歴史のシーンを見せる。採掘したり、搬送したり。

実はその日の午後は自由行動でオプションとして鉱山見学を勧誘されていたので、すぐに参加をきめた。市場では、蜂蜜を売っていて、小父さんのすすめる物を買って、日本で食べたが美味しかった。

ラムメルスベルク鉱山は、ゴスラーの歴史地区と合わせて文化遺産になっている。ホテルからバス約２０分、１９８８年に廃山となっているが、その大きな施設はそのまま鉱業博物館となっている。伝説によれば９６８年騎士ラムの愛馬がひづめで蹴った時に銀の鉱脈が見つかったということで、チャグチャグ馬っ子風？に着飾った馬の像が、前方以外すべての面に鏡を貼った箱の中におかれていて、反映し会って何頭にも見える。１０００年に

もわたる開発と事業の発展はゴスラーの町の繁栄をもたらし、宮殿設置にもつながった。新居浜の別子銅山は有名で３００年間の事業は住友財閥の基礎を築いているのだから１０００年という長さの重味が知られる。

さて、ヘルメットをわたされて、トロッコ列車に乗り込む。採掘現場までは１０分一寸。以前ここで働いていたと思われる屈強のガイドが、強い通風の音に負けじとばかり声をはり上げて説明する。殆んど切れ目がなく我々の通訳も僅かのすき間を見付けるのに苦労している。突如轟音が鳴り響いて、全員がびっくりの表情。ガイドがさく岩機を作動させたのである。１９８８年の廃業までには盛衰を迎え銀、銅、鉛の鉱脈のつきんとする時に運良く新鉱脈発見という工合に、多くの富をもたらしたこの鉱山も、次第に資源が乏しくなり、アメリカ式技術を採り入れ、最後には無人採掘も行なったが遂に閉山の日を迎えた。我々への説明も最後に到って、ガイドの表情に哀愁と誇りを見たように思う。所で現場での説明中我々全員は、寒さに震え上っていた。７月中旬の外気３０℃近くの所から余り準備もなく入坑し、通風管から流れる空気１０℃にずっと当っていたのである。

次の日、ツェレを経て、ブレーメンに到る。

ツェレは、小さな可愛らしい古い町である。この町の木骨造りの建物は木骨で区切られた壁面が黄色、ピンク、青、緑と塗られて綺麗である。広い堀の向こうにある領主の館は優雅な姿で目を楽しませてくれる。スウェーデン夫妻とすこし話をした。私は、訪問国で手頃な帽子を買うことにしている。化粧店の店頭でダークブルーのものを買った。町の中で辻音楽師の音楽に耳を傾けた。

ブレーメンは５５万人の人口で、単独で一つの州をなしている。市庁や大聖堂の壮大で立派なことは表現の言葉がない。例の有名な動物の音楽隊の銅像は案外小さく、拍子抜け。豚飼と豚の方が大きい。人が触った所は両方ともピカピカ、福が授かるらしい。ドームの横にはビスマルクが珍しくも馬にまたがった大きな銅像がある。２８年もの長期間首相の座にあって権謀術数と鉄血政策でドイツ帝国を実現させた手腕は絶大である。これに対し、この首相を解任し、その後も外部からの手紙を検閲したり、訪問者の氏名をチェックしたりと大いに冷遇したカイゼル・ウィルヘルム２世の像は知らない。戦前鶴見祐輔のビスマルク伝が出たが、戦後日本でこの良くも悪くも大きな人物のまとまった伝記が出ていないのは不思議に思う。勿論、ドイツでは、１０００Ｐをこえる位のものがごろごろ出ているが。

今度は市庁前の１０ｍの巨像は何か。カール大帝に仕え武勲をたてながら壮烈な死をとげた騎士ローランドである。このローランド像が健在である限り、ブレーメンが自由ハンザ都市である平和と権利のシンボルとされている。第２大戦中の猛爆にも無事であり、市の中心も損害がなかった。ちなみに、今はもしこわされても、大丈夫なようにもう一つストックを持っているとは面白い。

この日は土曜日、午後に着いた我々は、ちょこちょこした土産物を買うだけ。最近は、ツーリストに便宜をはかると云って各地で開店強行の動きも報じられている。この憂さを慰

めてくれたのが、ブレーメン名物通り、１００ｍほどのベトヒャー通りで毎日正時に家と家の間に線を張り、それにマイセン磁器の鐘をぶら下げて鳴らすその音が愛らしい。
マルクト広場から３、４分位のホテルに早く帰ったのでホテルのプールに行く。〇〇の冷や水にならないように、長泳ぎは無用。体脂肪率２０％以下の身には少し冷めたかった。
夕食後まだ日暮でない。ひとりで散策に出かけると面白いものに出会う。マルクト広場でワイン祭りをしている。中央の舞台ではバンドが歌い且つ演奏している。周辺に数多い屋台では、主に若い人、それに近い人がワイングラスを片手に、時に耳を傾け、時には肩を組んで歌っている。和やかで陽気な賑やかさは楽しい。私も屋台でワインを求め集まりに加った気になる。店の人と雑談。

翌朝、食堂で食物の並べている中にゼクト・シャンペンを見つける。前年、フランスのアルザスやブルゴーニュのホテルでも朝食時、シャンペンがあってフリーに味わった。ここでは、程々に嗜んで見た。

この日はリューネブルグを経てハンブルグへ。
途中リューネブルガーハイデ（リューネブルグ原野か）はあちらに当ると説明される。自然保護公園である。夏になるとエリカ（英語でヒース）の赤紫の花で一面埋めつくされる大原野。乱開発から防ぐためにすでに１９２１年から保護されクルマの乗入はダメ、馬車なら良い。

快晴のリューネブルグに着く。千年の昔からの塩の生産地として栄えたが、今は静かな町である。先づはＲａｔｓｋｅｌｌｅｒ（市役所の食堂）で昼食。メニュー、クリームアスパラガススープ、コルドンブルー（チキンの詰め物料理）、フレッシュストロベリー。飲み物はビールにした。
食後、快晴の夏の日、市内見学は一寸きつい。しかしそんなには歩かない。ハイネの住んでいた家の標示。何百年も前役所や民家が並ぶ通り。日曜だから特に静かだ。店頭には、目を惹く物もあるが全店お休み。皆さんが買ったのはインフォメーションセンターにある精製された岩塩だけ。見学の途中、川に差しかかり誰かが橋の上から白鳥などにパンを千切って与えると、突如水面が盛上る。何事ぞ。何匹、何十匹とも知れぬ鯉、丸々と肥えた鯉がパンを求め殺到したのである。この近くに黒い大きな構造物がある。その昔舟で塩を積み出していた頃使ったクレーンである。
このリューネブルグには先にふれたオイレンシュピーゲルの墓があったというが眞否は不明。墓標にいわく、「何人もこの石を動すことなかれ、ここにオイゲンシュピーゲル葬られて立つと」。眞疑の確かな方の話をするとバッハが当地の聖歌隊にボーイソプラノとして加っていたが声変りで、楽士に回り、１５～１７才の２年間暮らしたという。
全くこのあたりは山がない平野で麦秋の稔りの時を迎えている。その田野も灌漑のための水路などの区割がなく、どこまでが一枚の広さか検討がつかず、一層広大な感じを強くする。

アウトバーンをまっしぐらに走るバスはいよいよハンブルグに入る。

外アルスター湖畔のホテルに着いても未だ日は高い。多くの人はミュージカル、キャッツの切符が手に入るかも知れないと興奮状態になっている。私はひとり、ハンブルグ美術館（クンストハレ）に向うことにする。タクシーが到着した時は閉館まで一時間を切っている。入館料１５ＤＭのところ、シニアに対する配慮を求めた結果１０ＤＭになった。
先年、ドレスデン美術館でフリードリッヒのあるノイエピナコテークルに回れなかったので、今回は是非とも彼の代表作を収めるハンブルグ美術館でそれらを見たかったのである。スタッフに案内されて、その部屋に直行する、「氷海」「霧の海を眺めるさすらい人」などすでにおなじみの傑作に対面する。前者は凍結する寒さの中の静けさと、氷がギシギシと力を出してきしみ合う緊張との対立の印象は忘れ難い。後者は彼がよく描く自然の中において孤独を求める気持を強く現わしていると思う。外の彼の小品を含めて、心を奪われている間に長い時間が流れる。しかしまだ多少時間も残っていることであり、次の部屋からさらに次へと回ると高名な画家の傑作が現われる。到頭閉館の合図が鳴る。グッヅショップも出る時には閉まっていた。
ハンブルグの美しい風景を構成するのは内アルスター湖と外アルスター湖で、その二つを区分するのがロンバルト橋とケネディ橋である。ロンバルト橋を歩いて帰っていると、日本語の公演ポスター、「楢山節考」が、貼られている。入りはどうだったのだろうか。
外アルスター湖の湖畔は林の中に良い散歩道が作られている。散歩してホテルに帰ると多くの人はキャッツを見に出かけていた。残留組の少数派は、悠々と、食事（メインディッシュ、ハンバーグ風ステーキ）を愉しみ、ワインを快飲した。食後広間を通るとピアノを弾きながら歌っている女性がいる。佳人である。誰いうとなく、腰をおろして聞いていた。その内ホテルのスタッフがリクエストを聞きにくる。直接彼女に何曲かをリクエストする。ドイツ人でなく、イギリス女性でスコットランドに近い所の出身という。陶然としていて、気が付くと広間にいた他の客はいない。さあ腰を上げて帰り難くなったと思っていると、ホテルのスタッフは、別に頼みもしない果物の盛り合わせを持って来る。我々一同は、日本での事を考えて、顔を見合せる。まあ良いか。いよいよ時間も経ち、彼女にＧｕｔｅｎ Ｎａｃｈｔと告げた後、スタッフから受取った書類にはリーズナブルな金額が書かれていた。キャッツ組は１１時過ぎに言葉はわからないものの満足して帰り、冷たい食事にあづかった由。
次の日午前中、自由行動、一同勇躍して繁華街ハンザフィアテルに出かけた。さすが洒落た構えと展示も気の利いた店が多い。
昼食は久し振りの日本食。合格レベルの味を楽しみ、日本茶も遠慮なく飲める。たしかベルリンの日本食店では、コーヒ並の代金を請求された。店のおかみさんと話すと、日本食店の経営は段々難しくなっている。第一に商社、製業会社等、リストラで帰国する人が多いので、ターゲットの在留邦人が減少している。その上、日本人でなく、韓国人などが日本食店を始める傾向にあって競争が激しくなっている。
午後市内観光、ヨーロッパー、二位を争う貿易都市の港湾施設を見るとすごいものと感ぜ

ざるを得ない。巨大な寺院、ミカエル教会ではまたオルガンの演奏を幸運にも聞くことが出来た。この寺院の塔は１３２ｍをこえる高さ。写眞には収まらない。現地ガイドの日本人女性に聞く、毎週日曜に教会に来る人はどの位ですか、「正確にはわからないが１０％位でしょうか」、結婚式を教会で上げる人は段々減っている。第一に結婚でなく同棲する人が多い」と。同棲後結婚してから離婚の例も少なくない。
この日を含め、我々の滞在中のハンブルグは快晴続きだったが、年間通じては、天候は良くない。特に冬を中心にどんより、暗い日が多いとか。市内進行中「この左の道の奥にブラームスの記念館があります」と云われてパット振り向くともう過ぎ去っている。ブラームスの重厚な、音楽はたしかにハンブルグの長い暗い天候に関係があると思われる。
すぐ近くのペーパーバーン、夜の遊び場近くも回った筈だが覚えていない。最後の観光は外アルスター湖畔の周遊である、外国公館、高級ホテルの地域や地区ごとに住宅にしろ庭づくりにしろ特有の雰囲気があって興味深い。湖上に浮かぶ多くのボート、ヨット、遊覧船も一層、目を楽しませる光景となる。
早目にホテルに帰り時間があった。ホテルのプールは立派だった。軽く一泳ぎ。
いよいよ旅の終りに近い今夜の食事はメインイベントである。１７０万人近いドイツ第２の都市、ハンブルグは１２００年も歴史を遡れるが、今や近代的な活動都市、その市庁はルネッサンス様式で建てられ、威厳を持ち、壮麗且つ重厚な外観を示す。その食堂の夜会とは嬉しい。
ストックホルム市役所では、ノーベル賞受賞者の記念晩餐会と同じ食事を食べて、素晴らしかったが、余り儀式張ってロウソク火だけでは、味が見えにくい難があった。總じてどこのラートケラーの食事も良いというのが定評であらう。ここの食堂は港町らしく、色々の型の舟の模型が天井から飾られて、雰囲気があって楽しくなる。食べ物、飲み物ともに期待にそむかず、満足して外へ出た。一寸離れた所に銅像がある、聞けばハイネである。彼はここで伯父さんの店を手伝っていた。大戦後アメリカから観光団が来て、ハイネの銅像を見たいと求めたが、なかった。後で作ったという。
次の日はリューベックとシュヴェーリンへ。
大平原を凄いスピードで走る。旧東独領に入ると家並みの手入不足が目につく。道路などのインフラ建設に力を入れているようだ。一度、もう滅多にお目にかかれない、東独時代の車トラバンドを見た。老友が懸命に走っているように見えた。旧東ドイツでは富める者は益々富み、貧しき者は貧しさの中に沈んで、貧富の隔差は拡がっているとの説明。統一の時には、１０年もすれば色々の問題もまづは解決されると云われたものだが、未だに失業率は東西で１０％近い差がある。たしかに問題は残っていて、例えば農業経営にしても東ドイツでは共同経営で中央の指令で動いていたため、体制解放後、自分の判断で経営できる人材が育っていない。経営指導のため西ドイツから人を派遣していると。
やがて、リューベック。あの有名なホルステン門が見えて来る。中央部がめり込んだ、特徴的で重厚な姿は強い迫力を持っている。１４７７年建造とは古い話で両方の塔はかし

いで見える。門のすぐ側は川で倉庫群が並んでいる。川岸は綺麗に整備され、折柄シニアボートマンの乗る艇がスイスイと水上を辷って来る。見ているこちらも楽しくなる光景。マリエン教会では素晴らしいパイプオルガンが昔からある。例の大バッハの逸話を示すレリーフが柱に掛かっている。名演奏家ブクスデフーデの教えを受けに来たバッハは２０才。４週間の休暇の予定を４ヶ月まで延ばして習った。先生に腕を見込まれたのであらう。ブクスデフーデから彼の娘とバッハとの結婚話が持上ったが、この女性の器量に難がありしかも３０才。話はまとまらなかった。市役所の前に来た。それぞれ異なった風格の三棟の建物がある。ここで自由時間となって、エレベーターで最上階に登れるペトリ教会で、列の中で待つ。最上階に出ると、リューベックの街の全貌が手にとるように見える。「七つの塔とホルステン門の町」と呼ばれるように立派な教会が多い。次は急いでブッデンブロークハウスに急ぐ、着いた時にはもう集合時間まで僅か１０分。折角色々貴重な資料があるのに正味７分では何ともならない。１０DMの入場券を買うのをあきらめ、トーマス・マンの作中人物のモデルの女性のしおり一つを買って、去った。昼食のレストラン、LUEBECKER HANNSEでは魚料理が出て美味だった。隣に人形芝居の可愛らしい小屋があった。

さて最後の目的地シュヴェーリンへ、雨がポツリポツリ。シュヴェーリン湖の中に浮かぶシュヴェーリン城館が見え始めた頃は幸い小降りになる。城館に渡る橋から眺めると、幾つかの塔をそなえた華麗なこの城の印象は深く残る。聞けばフランス・ロワール地方の有名なシャンボール城をモデルにした由。内部の雰囲気は優雅で心地よい。更に裏の庭園も良く整備されていて散策にふさわしい。途中、雨足が強くなって残念ながら引上げたが、満ち足りた気分で帰りの橋を渡る。

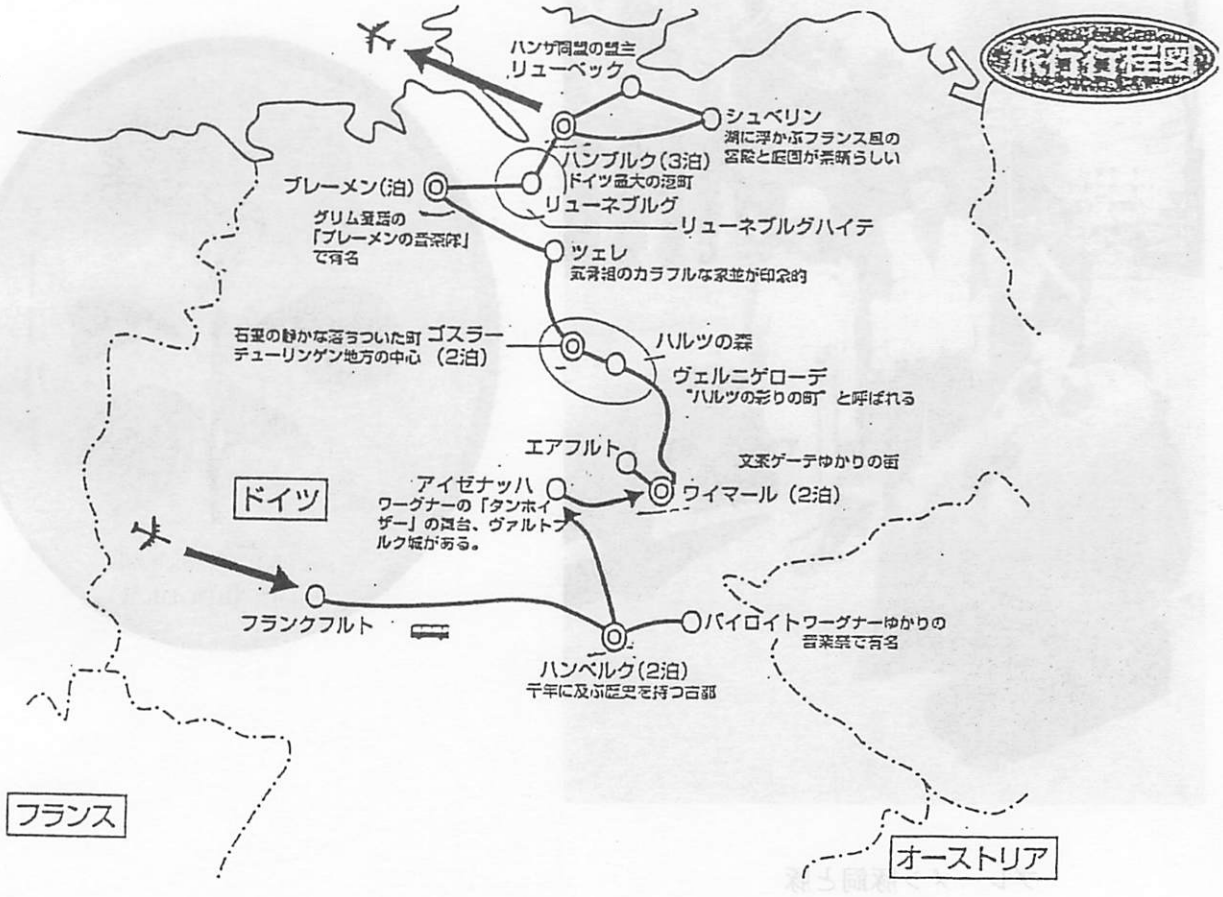
ハンブルグに帰る道中が大変だった。ドイツの天気は変わりやすいという格言通り。もう雨も上って良かったと思っているとピカリと光って雷鳴、そして大降りの雨と急変する。その日私はたまたま一番前の席に座る巡り合せだった。アウトバーンを走る車は、このバスを含めて一向速度をゆるめず、時速１００㎞を確保している。フロントガラスのワイパーは懸命に頑張って左右に振っているが、視野を保てない。前走の車まで３０mから５０mだらうか、おぼろげにしか見えない。こんな時前走車、或いは前々走車に何か起きればどうなるか、前部の着席者は一番大変でないか、手に汗を握る。緊張の時間が流れて、雨も小降りとなり一安心。所がまた雷光、雷鳴、大降りとなる、そして小降り、これを繰返す、ハンブルグに近くなってやっと収まる。

いよいよ今夜は最後の晩餐である。良いワインで魚料理、仔牛肉料理ともに美味。皆で話合っている内に、この旅行中、一度も他の日本人旅行者に会わなかったことに気付いた。こんなことは初めてだ。所謂定番コースを外れていたためだらうが、それだけ、我々は得がたい、旅行で珍しい所に行ったと満足感に浸った。

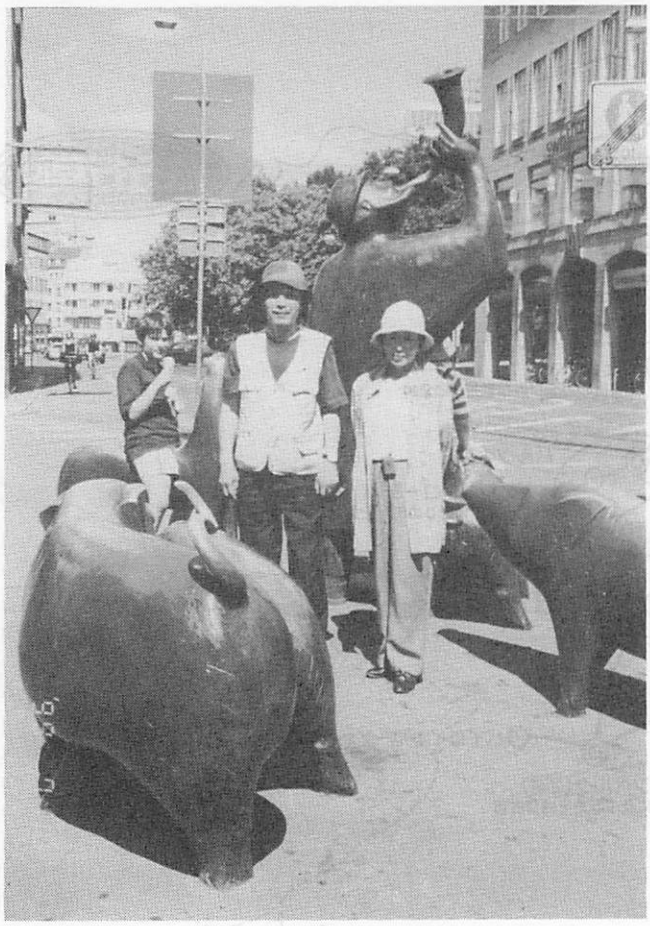
ハンブルグに来たのにこの地の方言、モイン、モインを使うのを忘れていた。忘れてないのは、ずっと前のドイツ語教師の女性、コンスタンツェ・マルチョフさん。お母さんの名、

エリザベートを電話帳で調べ、電話して見たが、コンスタンツェという娘はいませんと、人違いだ。彼女が言っていたハンブルグ名物アールズッペ鰻のスープも試みなかった。小豆島出身でベルリン留学中のピアニストとは幸い話が出来た。
食後、広間を通るとピアノと歌声が聞える。少しだけ座って、別れを告げた。
Ｉ　ｌｅｆｔ　ｍｙ　ｈｅａｒｔ　ｉｎ　Ｈａｎｂｕｒｇ．と。
　全走行１５００㎞の旅は愉しく、色々知る所、見る所、得る所の多い旅だった。
１９９９年ゲーテ誕生２５０年、２０００年はバッハ死去２５０年にあたり、可成りふれることが多かった。この二人を除いたドイツ文化は考えられないと思う。
第４回目の旅は少し間をおいて，ドイツにまた来たい，Ａｕｆ　Ｗｉｅｄｅｒｓｅｈｅｎ！
　さて、長々とおつき合い頂きお疲れ様でした。有難うございました。

追記、バンベルクとバイロイトを案内してくれた現地のガイドのＦｒａｕ　Ｙ．は７月下旬、ドイツ人の夫君と共に高松に見え、一夕ビアガルテンでグラスを傾けた。夫君はビールを自動で注ぐ機械に興味を持ち、Würzburgに帰って友人たちに話しているという。
お礼に修道院造りのワインを送ってくれた。１ヶ月半の舟便で着いたワインの名前が驚きである。片仮名でシーボルト、中心にはあじさいの花がきれいに描かれている。シーボルトはヴュルツブルグ出身。彼はあじさいの学名に長崎の愛人の名を付した。



ヴェロニゲローデの歩行者天国



ブレーメン豚飼と豚

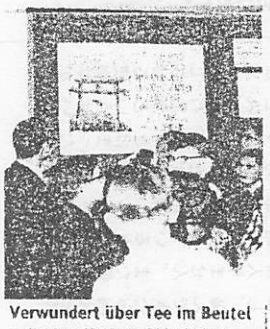
投稿

夢は叶う―ドイツからワインを

成長の源は同友会とドイツのおかげ

㈱ビッグ・エス　社長　大坂　靖彦氏（香川）

今年の四月、ドイツで三十四年ぶりに恩師と出会うことができました。学生時代、ドイツのマインツ郊外、ライン河のほとりの人口千二百人の小さな村で、三カ月ほど、豚やブドウの樹の世話に汗を流しましたが、その後マインツ市内でテレビのブラウン管製造工場で、夜勤に就いてキリスト教系の共同宿舎でお世話になっていたとき知り合ったのが、小学校の教師ヴァルター・ロッセル氏です。先生には郷里の長尾小学校の生徒とドイツの小学生の作品交換会を持ちかけ、実現できました（写真①）。そのロッセルさんとはそれ以来音信不通でしたが、今回ドイツの新聞社の骨折りで三十四年ぶりの再会が実現したのです。まさに感無量でした。このことはドイツの新聞でも大きく取り上げられました。（写真②）



Verwundert über Tee im Beutel

写真①（上）はドイツと日本の小学生の作品交換会の模様。写真②は34年振りの再会を紹介した新聞記事

昭和三十七（一九六二）年、四国の田舎町で育った私は海外への夢絶ち難く、海外と交流の多い上智大学に入学。しかしドイツへの留学試験に失敗。横浜から船に乗りシベリア経由ウイーンに渡りました。ウイーンからは人が定住している地球の最北端、ノルトカップを目指し一日一ドルのヒッチハイクの旅をし、その後一年間で二十カ国を周りました。その中で特に思い出深いのが、今でも一日とて忘れることができない冒頭のドイツの小さな村での、ライン河を眺めながらの農作業でした。（写真③は当時を思い出しながら今年訪れたときのもの）

大学卒業後、松下電器に就職。海外研修生としてハンブルグ市に二年間赴任。合計五年間の会社勤務後退社、郷里に帰り、いっぱしの企業家を夢見ました。しかし現実は厳しく、電器製品の訪問販売や配達に追われる日々が続いていました。そんな将来への展望が開けなかったときに出合ったのが同友会です。

当時年商は五億円くらいになっていました。ビッグ講演会にはほとんど出席し、帰途一時間の車の中では、常に感激を胸に決意を新たにしていたのを思い出します。

写真③今年4月再訪し、当時の農作業を思い出す（向かって左端が筆者）

同友会では東讃支部を設立したり、人材開発委員会・経営研究委員会の副委員長等を引き受けながら勉強させていただきました。おかげさまで現在は毎年多くの新卒社員を採用できるようになり、昨年度は家電・酒・百円ショップという複合型DSで年商百億円を突破するまでに成長することができました。毎年作成している経営計画書もお飾りではなく、実際に魔法の書として活躍してくれています。

そういった中で、かつてお世話になった思い出深い小さな村から、毎年一万本以上のワインをPB商品として商社を通さずに直輸入しています。また、香川日独協会を知人と共に設立し、毎年ドイツを中心に海外の学生を受け入れています。

これからは企業のフィランソロフィーの一環として、ドイツ語を切り口にドイツ、スイス、オーストリア等との交流を深めながら経営の舵（かじ）取りをしていこうと思っています。ドイツに興味のある方、またワインに興味のある方はぜひご一報下さい。

☎〇八七―八四三―七七一一

特別寄稿 ドイツ感動の旅

社長の第二の故郷、ドイツで学ぶ

㈱ビッグ・エス（大坂社長、高松第二支部所属）より本年四月の訪独にお際しての投稿を頂きました。今後とも多数の投稿をお待ちしております。

◇おいしいワインと食事で降参

今年の四月に十二日間、社長のお供をしてドイツにワインの仕入れと店舗視察および商材探しに行ってきました。狭い日本で、毎日激しい商戦に従事している私達にとっては、見るもの聞くものすべてが驚きと感動の旅となりました。おかげさまで器が一回り大きくなったように思います。

四月五日、出発前の打ち合わせ時のテーマは次のとおりでした。

○弊社年間売上高百億達成後の次のステップに相応しい人材像を考える

○オリジナルドイツワインのバイイングと現地確認

○百円ショップ（一マルクショップ）のバイイングとルート開発

○違う世界を体感することでグローバルワイドな視野と考え方を身につける

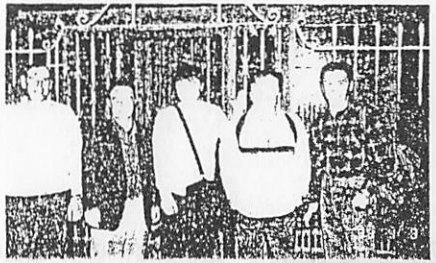
そうして密日ドイツ到着。

ドイツで最初に感じたのは、隣国と陸続きということです。ナポレオンの時代から占領と侵略の繰り返し、一時間もあれば占領されてしまう立地です。現にワインを仕入れている農家にも占領の歴史があり、フランス軍が占領してきたとき、一万本のワインを秘密のケラーにワインが一本だけ通る穴を床に堀り隠したそうです。しかし最後に見つかってしまい、ワインを守るために覚悟を決めて個人的に三千本のワイン提供をするということで交渉し、大切なワインを守ったとのこと。今でもそのときに助かった五十年物のワインがそこには眠っていました。

また、ドイツは古いものを大切にする国だと痛感。町並みはどこに行っても歴史を感じさせる建物ばかり…。ほとんどが石造りというせいもありますが、日本の町とはまったく違う落ち着いた色合いの町が多いです。特筆すべきは電線の少なさ。なんでも地中に埋めているとのことで殆ど目に入りません。また個人も家を大切にし、傷んできたら内装を替えたり、修繕したりして何代にもわたって受け継いでいくそうです。さらに家だけでなく、親もです。食事の中心にはオマと呼ばれるおばあちゃんがどの家族にもいて、大切にされているのに感銘を受けました。

食事のことを述べますと、ある日の夕食では各ワイン農家の人たちが歓迎に駆けつけていただいて大人数での楽しいディナータイムとなりました。ジャガイモ料理とソーセージと野菜（豆とニンジン）の煮物等。うまい！想像以上に料理は口に合いました。ザウアクラウトというキャベツの酢の物もうまい！これはドイツの伝統的料理のひとつということでした。飲み物はすべてワイン。昼間から夜にまでさまざまな味のバリエーションのワインがテーブルに並んでいました。昼からケラーで試飲を重ねていたのでかなり出来あがっている…と思いながらもやはり地元の料理には地元の酒という言葉通り、ワインがまた格別うまい！そのワインづくりに情熱を傾ける人達とそれを支える人達に囲まれて飲むのですからうまいに決まっています。ドイツワイン万歳！そして食後は必ず、ケーキとお菓子。これまたおいしい。でももうおなかが一杯であまり食べられなく残念。そのうえ、話が弾んでいるうちにパンとチーズが出てきます。ドイツの人達はいったいいつまで食べるつもりでしょう。もうパンはお腹に入りません。日本人はもっと食べて鍛えるべきだと素直に思いました。

オリジナルワインぶどう畑にて



高級ワイン専用ケラーの前にて

ついでに朝食のことも述べておきましょう。ドイツパンにバターを塗り、ハムおよびチーズをのせて食べます。昨夜あれだけ食べたのにうまい！他に蜂蜜およびジャムなどもテーブルにあります。

◇社長の再会とワイン

実はこの旅には隠れた大きな目的がありました。社長が三十五年前にドイツをヒッチハイクしていたときにお世話になり、その後音信不通になっていた恩師に会うことです。社長はこの恩師に何とか会いたいとドイツの新聞社数社に手紙を出し、捜してもらいました。その結果、ある新聞社がその恩師を見つけ出してくれまして、いよいよ感動の再会！もちろんドイツ語で話に花をさかせていました。新聞社の記者とカメラマンもやってきて再会ぶりを取材。三日後のマインツ新聞に大きく採り上げられ私達も大喜びしました。この件で私達は事前準備の重要性と、バイタリティあふれる社長をさらに尊敬の目で見るようになったということも書いておきたいと思います。

さて、私達のビジネスの目的の一つにオリジナルワインのラベル破損がなぜ起こるのか、また防ぐことはできないのか、オリジナルワインの製造工程の確認の三点でした。交渉の結果、改善を約束してもらうことができました。

さてワインについて述べますと、ドイツはワインの取れる北限の国です。日本の稚内で北緯四十五度、ドイツはそれからまだ北にあるということを知ってこれまたびっくり。今回の旅の途中ベルリンでは四月中旬ですというのに雪でした。しかし道端にはチェリーの花がすでに花びらを落としていました。そんなところですから、うまく行くとアイスワインという高級なワインが取れることがあるとのことです。今回そのワインやさらに高級な九十四年産のトロケンベーレンアウスレーゼというドイツのワインランクで最高級のものを仕入れることができました。その後はマインツの町の電器店や酒店やスーパーマーケットを見学。驚いたのはスーパーでは買い物をしたときのことっ。ドイツでは環境保護およびゴミ問題のため、買い物袋はこちらが要求しなともらえません。しかも有料。これぐらい徹底しませんと定着しないのだと感心しました。

◇訪独の目的達成

その後マッツ家にて今回の訪独の一番大きな目的である次回のコンテナに積み込むオリジナルワインの試飲を実施。仕入先三家がそれぞれ自慢のワインを用意してくれて一本一本慎重に味見させていただきました。今回は現在品切れ中の赤ワインを中心にアイスヴァインやトロッケンベーレンアウスレーゼ等の超高級ワインも同時に仕入れる予定でしたので、三時間以上の時間をかけてすべてのワインの試飲とラベルそして数量を決定することができました。

そして、今回来てみてわかった大切なことがひとつあります。それはそれぞれの家でそれぞれの想いで、年中ワインに関わって生きている人たちが造ったワインを私達が仕入れていること。すごい情熱とすごいやさしさとすごい苦労と笑顔がボトルに凝縮されて日本まで旅をして私達の手元に届いているわけです。このワインを私達はもっと大事に売って

いきましょう。この人たちの十分の一かも知れないが、もっと愛情をオリジナルワインに持ちましょう。そう思いながら醸造主ペーター氏のワイン談議に耳を傾けました。そして、この場にいるうれしさにすこし泣けました。

第二の目的は、弊社の店舗でオリジナルワインの試飲会をするときに、女性社員が着る衣装を探すことです。ドイツらしい民俗衣装を求めていろんなところを探しましたがなかなか気に入ったものがなくて半ばあきらめかけていたところ、一冊のワイン情報雑誌でワインの女王の記事を偶然発見。しかもその女王は近くの村に住んでいるとのこと。早速電話にて交渉。あいにく本人には会えませんでしたが、その彼女の家にお邪魔して使い古しの衣装を売ってもらいました。恐るべしこの偶然と行動力！信念をもって行動すれば叶わぬこと無しと実感させられました。

ドイツで内観、そして心の旅

◇深夜まで社長と夢を語る

ある夜、ホテルで社長が急にミーティングと勉強会をすると言うのです。結局、今後の私達自身とビッグ・エスの将来についての勉強会を午前三時までしました。わざわざここで話そうと日本にいたときから決めておいたそうです。今後ももっとドイツとのつながりを今以上に大切にしていきたい、もっと多くの社員をドイツに送り込みたいとのこと。インターナショナル的な話に度肝を抜かれてしまいましたが、この場所に今いる自分のことを考えると、出来る！と、自然に思いました。また同時にここにいる責任感が厚くのしかかってきた思いがしました。

テーマはこの旅を通じて、今後自分をどう発展していくのか、会社との関わりをどう持つべきか、何が幸せなのか、人生は点でなく、線で考えその延長線上にあるべき幸せを考え直すといったことを含めて、社長の力も借りながら内観をしました。自分の甘さと、計画の浅さ、会社における自分の責任の甘さが露呈してその日は眠れませんでした。内観と言うのは、過去の自分を振り返って自分を見直すということで、しばしば人は自分の弱いところを隠し、誤魔化しながら生きているように思います。本当の気持ちとか感情は自分自身が一番知っているはずなのに素直になれないことは良くあります。そのままにしておきますと性格として形成されてしまいますので、内観を通して気持ちとか感情の治療をし、より素直な自分を取り戻し楽しい人生を送るための、ビッグ・エス独自の社員研修です。ちなみに社員百名の内七割以上の人が体験しています。

オリジナルワインの農家の人々とワイン大樽の前にて

◇ケルンからハンブルグ

そして首都ベルリンへ

ケルンでは歴史的な建物や博物館を見学して夕食を取る予定の居酒屋に。ドイツらしい居酒屋料理を注文して乾杯。そこでビックリしたのは豚肉料理です。豚の前足が骨付きで丸ごと登場。ドイツ料理は一品の量がとても多いとは何日間かの経験で解っていたつもりでしたが、これにはびっくり目とても一人前の量ではありません。でもおいしいです。みんなの注文分をつまみ食いしながら幸せな気分で久しぶりのビールを口にしました。いままではワイン漬けの毎日でしたのでビールがとても恋しかったです。ケルンは地ビールの特産地で二十三種類程度の地ビールがあるらしいです。うまい。

ケルンの夜はツゥガーさんと奥さんも同席してドイツの居酒屋での夕食。大坂社長の大学時代の同窓生ということもあって、社長の青春時代の話を数多く聞くことが出来ました。

その中でも、ツゥガー夫妻が結婚して新婚旅行に大坂社長を訪ねて来たときのことは印象的でした。二人が訪ねてきたのは二十数年前の大晦日で社長がまだ松下電器を辞めて大坂屋に戻ってきたばかり、電器屋の年末は大忙しで十分なおもてなしが出来なくて、逆にツゥガー夫妻はドイツでバリバリ仕事をしていました大坂社長を知っていましたから、心配されたそうです。それが今は百億企業の社長ということでびっくりもされていました。ここでも若いころの社長の話が聞けました。今の社長があるのは過去の経験からいろんなことを学び、物事を達成させるにはどうすれば良いのか、またどんな方法があるのか、いつまでにやれば良いのかを常に考え実行してきたからだと心底思いました。社長は「誰でも同じ、違いがあるとすれば、思ったことを実行するかしないかだけの違い、哲、大差はありませんよ」と怪く言われます。簡単なことを積み重ねていくと先では大きな違いになってくる、ということは分かっていながら私達はなかなか実行できません。翌日は船の町ハンブルグに、そして、朝早く起きてハンブルグ名物のフィッシュマーケット（日曜朝市）に向かいました。日本でいう縁日的な雰囲気で、港近くの舗道の両脇に延々と屋台の出店が続きます。小売店が営業していないとあってさすがに凄い人。観光客も入り交じり国際色もとても豊かです。屋台の間のホールでは朝からコンサートが開かれ、観客はビール片手にノリノリ。

ハンブルグからベルリンに向かう途中、旧東ドイツの人口二千人程度のマルニッツという村に立ち寄り、店の飾りに使えるような掘り出し物を探す途中、今朝生まれたばかりの子牛を見ました。また、昼食をとった食堂ではご主人が昔ソ連兵の車にひき殺された話などを聞いたりしました。旧西ドイツの町並みとは歴然とした差を感じてしまいました。

◇ドイツの小売業

小売業のことも述べましょう。ドイツの店は日曜日に買い物をすることができません！これは宗教の関係で安息日に従業員を働かせていけないそうです。夜間営業も八時が限度、これでは共働きの家庭はいつ買い物をするのか心配します。ほとんどの店が非常にきれいで、あるリカーショップでも店員が一本一本丁寧にボトルを磨いていました（拭いているのではない、磨いています！）。また、照明を上手に使っていて、商品がどれもこれもスポットライトを浴びているように見えます。私達の店とは業態の違いがあるのでまったく同じことはできないと思いますが、せめてクリンリネスは是非実行したいと思いました。

もう少しドイツ語が自由に話せるようになったらもう一度行きたいです。そう思いながら夢のような国から、これまでの人生の中で一番短い夜（午前零時に目が沈み、五時に東の空が明るくなる）を東に向かう飛行機の中ですごし、日本に四月十七日に帰ってきました。帰国後、今回の旅のことを思い返しますと、いろんな経験をしましたが、自分の心の旅をしたような気がします。また社長の経験した二十年を一気に十二日間で追体験させていただきましたように思います。今まで自分が歩んできました人生と比べてみるとあまりにも落差があるのですが、瞬間、瞬間を捕らえれば、自分にも出来ることがたくさんあり、気が付いてもやっていなかったことが沢山あったと、反省することが出来ました。ちょっとしたこと、または取り組み方で、本当に自分がどうありたいか、と思う時間を持つことで自分の人生はずいぶん変わる、ということを社長は皆にわからしたかったのだと思います。

夢のような国で体験したことをこれからの仕事に生かし、人生に生かしよりよい仕事ができるようになりたいと決意しております。

株式会社　ビッグ・エス
取締役営業部長　太田　学
プロジェクトチームリーダー
酒部門統括マネージャー　国方　俊文
是本　誠志

第1回 ビッグ・エス 2000年2月20日開催

全国ドイツ語スピーチコンテスト

Big-S 1.Deutsch-Redewettbewerb!!

私たち株式会社ビッグ・エスは、年間売上100億円の達成とオリジナルドイツワインのインターネット全国通信販売スタートを記念して日頃お世話になっている地域社会への貢献活動や国際交流の一助として、当社の特徴をいかした形で「全国ドイツ語スピーチコンテスト」を実施します。
ドイツやドイツ語又はドイツワインが大好きで日頃コツコツとドイツ語やドイツ語の歌の勉強をしているけれど、その成果を発表する場がなくてやきもきしている人達が参加します！ドイツへの熱い想いや経験を聞いて下さい。(ドイツ語で……)
又、高校生やドイツ語の勉強を始めたばかりの人の為に朗読の部もあります。応援して下さい！！

■開催要項

開催日時

3:00～

(一般公開、入場無料)

全国から5

非、応援して

より徒歩約2

には県庁北通下車)

●琴電瓦町駅より徒歩約10分／バス

車)

コンテスト

の部

(Erlkönig)

ゲーテ作詞

グリム童話（指定

グリム童話

つえらびそれを

表彰

厳正に

と副賞

決定し、主催者から各入賞者にカップと賞状

入賞者2名には手作りのドイツワインの旅

エスがワインを仕入れている農家にホーム

お問い合わせ窓口

〒761-0101
香川県高松市春日町1627-1
TEL087-843-7711

主催：株式会社ビッグ・エス　後援 ケーステンキ　通・業・100円 ビッグ・エス

後援：大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館／マインツ大学／独日文化交流育英会／GOETHE・INSTITUT（関西ドイツ文化センター）／ラインラントファルツ州経済振興公社／パナソニックドイツ／DAAD（ドイツ学術交流会）／ルフトハンザドイツ航空会社／日本カール・デュイスベルク協会／ドイツ観光局／財団法人高松市国際交流協会／香川第九合唱団／香川日独協会／四国新聞／西日本放送／岡山放送／徳島新聞／四国放送

Veranstalter:Big-S AG.
Unterstützt von:Generalkonsulat der BRD in Kobe-Osaka／Universität Mainz／Studienwerk für Deutsch-Japanischen Kulturaustausch in nrw e.v.／Goethe Institut Kansai／ISB Wirtschaftsförderung Rheinland-Pfalz／Panasonic Deutschland GmbH／DAAD／Lufthansa／Carl-Duisberg-Gesellschaft Japan／Deutsche Zentrale für Tourismus e.v.／Kagawa 9.Symphonie(Chor)／Japanisch-Deutsche Gesellschaft Kagawa／etc.

株式会社 ビッグ・エス

香川県高松市春日町 1627-1

平成 12 年 2 月 16 日

第1回 ビッグ・エス 全国ドイツ語スピーチコンテスト開催

株式会社ビッグ・エスが主催する「全国ドイツ語スピーチコンテスト」が、平成 12 年 2 月 20 日(日)午後 1:00 から高松市番町の社会福祉センター(コミュニティーホール)にて開催されます。開催に先駆け出場者を募集したところ北海道から九州地区まで幅広く約 50 名の方からの応募がありました。当日はプレコンテストを通過した約 25 名の方が参加予定です。

最優秀者には副賞として「手作りのドイツワインの旅」が贈られる予定です。

コンテスト当日の会場は一般開放されます。(入場無料)

連絡先
株式会社 ビッグ・エス 営業部
酒営業統括 Mg 是本 誠志
電話 087-843-7861
FAX 087-843-7761

株式会社 ビッグ・エス(代表取締役 大坂 靖彦)は、2月20日(日)午後1時から高松市番町1丁目10番35号にある香川県社会福祉センター/コミュニティーホールにて「第1回ビッグ・エス全国ドイツ語スピーチコンテスト」を開催します。

株式会社 ビッグ・エスは、年間売上100億円の達成とオリジナルドイツワインのインターネット全国通信販売スタートを記念して日頃お世話になっている地域社会への貢献活動や国際交流の一助として「第1回ビッグ・エス全国ドイツ語スピーチコンテスト」を開催します。

ドイツやドイツ語又はドイツワインが大好きで日頃コツコツとドイツ語やドイツ語の歌の勉強をしているけれど、その成果を発表する場がない人を対象として、参加資格は「日本に住み、両親共にドイツ語を母国語としない人で、高校生以上、海外在住経験1ヶ月以内の人」としました。

又、高校生やドイツ語の勉強を始めたばかりの人にも参加しやすくする為に朗読の部も用意しました。

参加者を全国に広く募集したところ北は北海道札幌市から南は九州福岡市からの参加希望もあり、朗読の部と創作の部合わせて50名を越える参加希望の連絡がありました。

参加希望者多数の為、発表内容を録音したカセットーテープを送ってもらいプレコンテストを実施し、コンテスト当日には両部門合わせて約 20 名の方が参加予定です。

コンテスト当日は第1部を朗読の部として3つの指定テキスト(A.魔王B.白雪姫C.星の銀貨)の中から一つを選び朗読します。(制限時間4分以内)

第2部は創作の部として4分以内の自作文(未発表のもの)を発表します。

厳正に審査の上、入賞者を決定し、各入賞者にはトロフィと賞状と副賞を授与します。上位入賞者2名の副賞には「手作りのドイツワインの旅」と題して、ビッグ・エスと取り引きのあるドイツのワイン農家へホームスティしながらのパーティや葡萄の木の世話をはじめ、ハイデルベルグ城の見学、ライン川下りなど盛りだくさんの内容で生のドイツを体で感じてもらえる旅行をプレゼントの予定です。

今回が初めての開催になりますが、たくさんの機関・企業の後援をいただきました。

地方の小さな企業が小さな社会貢献をしようとする大きな試みです。5年10年と継続して開催できる事を願いながらの第1回目です。ご理解ご賛同をお願いします。

是非、取り上げをお願いします。

株式会社 ビッグ・エス

香川県高松市春日町 1627-1

平成 12 年 3 月 1 日

第1回 ビッグ・エス 全国ドイツ語スピーチコンテスト開催(結果)

株式会社ビッグ・エスが主催する「全国ドイツ語スピーチコンテスト」が、平成 12 年 2 月 20 日(日)午後 1:00 から高松市番町の社会福祉センター(コミュニティーホール)にて開催されました。香川県内を中心に東京都や福岡県からも出場者が集まり当日はプレコンテストを通過した 23 名の方が参加予定しました。

朗読スピーチの部と創作スピーチの部に別れて発表が行なわれ、中には小道具を持ち出して熱演する出場者もあり、会場を沸かせました。朗読・創作それぞれの最優秀賞者には副賞として「手作りのドイツワインの旅」が贈られました。

連絡先
株式会社 ビッグ・エス 営業部
酒営業統括 Mg 是本 誠志
電話 087-843-7861
FAX 087-843-7761

株式会社 ビッグ・エス(代表取締役 大坂 靖彦)が主催する「第1回ビッグ・エス全国ドイツ語スピーチコンテスト」が2月20日(日)午後1時から高松市番町1丁目10番35号にある香川県社会福祉総合センター/コミュニティーホールにて開催されました。

このコンテストは、株式会社 ビッグ・エスが、年間売上100億円の達成とオリジナルドイツワインのインターネット全国通信販売スタートを記念して日頃お世話になっている地域社会への貢献活動や国際交流の一助として企画・開催しました。

コンテスト当日は全国から応募のあった50名中からプレコンテスト(テープ審査)で選ばれた23名の出場者が参加しました。第1部を朗読の部として3つの指定テキスト(A.魔王B.白雪姫C.星の銀貨)の中から一つを選び朗読しました。(19 名の方が出場)第2部は創作の部として4分以内の自作文(未発表のもの)を発表しました。(5 名の方が出場)

中には高校生やドイツ語の勉強を始めたばかりの人も参加していました。

審査委員長の上智大学名誉教授戸川敬一先生を始め、ドイツ人で香川大学教師のデーゲン夫妻やスイス人のブレニマン夫妻らが、厳正に審査の上、入賞者を決定し、各入賞者にはブロンズと賞状と副賞を授与しました。
(詳細は下記)

表彰項目	受賞者氏名／年齢/参加部門	受賞者住所	学校(勤務先)	表彰内容
最優秀賞(創作)	井野 泰寛／20／創作	大阪府摂津市	大阪学院大学	表彰状・ブロンズ・「手作りのドイツワインの旅」
最優秀賞(朗読)	島崎 のぞみ／18／朗読	東京都調布市	日本大学	表彰状・ブロンズ・「手作りのドイツワインの旅」
優秀賞	岩屋 奈々美／18／朗読	兵庫県西宮市	立命館大学	表彰状・ブロンズ・オリジナルワイン 12 本・現金 3 万円
優良賞	加藤 雅明／20／朗読	香川県高松市	香川大学	表彰状・ブロンズ・オリジナルワイン 12 本・現金 2 万円
敢闘賞	脇 あゆみ／18／創作	奈良県生駒市	立命館宇治高校	表彰状・ブロンズ・オリジナルワイン 12 本・現金 1 万円
熱演賞	島原 みどり／50／創作	兵庫県宝塚市	宝塚文化服装研究所	表彰状・ブロンズ・オリジナルワイン 12 本・現金 1 万円
努力賞	江本 和嘉子／20／朗読	徳島県徳島市	徳島大学	表彰状・ブロンズ・オリジナルワイン 12 本・現金 1 万円
審査員特別賞	岩屋 富雄／17／朗読	兵庫県西宮市	芦屋南高校	表彰状・ブロンズ・オリジナルワイン 12 本・現金 1 万円

最優秀賞の 2 名に送られる「手作りのドイツワインの旅」はビッグ・エスと取引のあるドイツのワイン農家へのホームスティを中心にライン川下りやハイデルベルグ城の見学等、生のドイツを体感できる内容です。

コントスト終了後、場所をビッグ・エスの社員研修所(高松市扇町)にかえて「ミニパーティ」が行なわれ、出場者や関係者が集まりました。ミニパーティでは、ドイツ語の歌等が飛びだし楽しい時間が流れました。

Big-S 1.Deutsch-Redewettbewerb!!
第1回全国ドイツ語スピーチコンテスト
主催：株式会社 ビッグ・エス

新会員のご紹介及び会員数

香川日独協会

［新会員］（９９年度に入会された方々）

《名誉会員》　：Ｄｅｇｅｎ，Ｒａｌｐｈ様　Ｄｅｇｅｎ，由美子様
Ｃａｌｏｗ，Ｔａｍｓｉｎ様（００．２．１０退会）

《普通・夫婦会員》：金藤　加奈様　川原美知代様　斉藤　美智子様
嵯峨山由範様　橘　光昭様　田中　聰様
西谷　賢二様　濱田　嘉明様　平木　享様
細川　啓二様　細川　映子様　山地　宣行様
横山　晴美様

《学生会員》　：石川加奈子様　加藤　雅明様　川原美代子様
合田　華子様　高嶋和歌子様　樽茶　直人様
濱　公二様　山口　裕史様　山田　恭子様

《賛助会員》　：アサヒビール㈱高松支店様

以上、　１団体、２８名の方々が、９９年度に当協会へ入会されました。よろしくお願い申し上げます。

［会員数］：２２１名（団体）［２０００．　４．　１現在］

内訳

名誉会員：　５名
普通会員：１１４名
夫婦会員：　４８名（２４組）
学生会員：　２６名
賛助会員：　２８団体

計　　２２１名（団体）

香川日独協会事務局で保管をしている資料のリスト

（２０００．　３．３１現在）

・「ドイツの展望」5/50、1995年9月　ドイツ連邦政府新聞情報庁刊。
・「ドイツの実情」　ソシエテーツ発行　492ページ（2冊有り。）。
・「125 Jahre Generalkonsulat der Bundesrepublik Deutschland Osaka-Kobe」1999年春　大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館発行　14ページ（3冊有り。）。
・「KOPRA」　ドイツ人研修生の支援団体（KOordinationsstelle für PRAktika）のPRパンフレット　連絡先：ドイツ学術交流会（DAAD）東京事務所。
・「EABIP」　欧亜企業研修プログラム（Euro-Asia Business Internship Programme）　問い合わせ先：EABIP東京事務局（ドイツ学術交流会東京事務所内）。
・「西は東から何を学ぶのか」　東西文化交流新時代への提言　ニルス・グルーベル著（在大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館・総領事）、柳原初樹訳（在大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館・広報官）　現代書林1998年7月18日初版第1刷発行（ISBN4-7745-0070-4 C0012）　198ページ。
・「ドイツのヴィルヘルムスハーフェン（ドイツ語）とヘッセン人形博物館（英語）の紹介（60分）」　ビデオ・テープ。
・「Japan und Europa:Getrennte Welten?」Hanns W. Maull(Hg.) Campus出版　603ページ。
・「Kleine Geschichte der Deutschen」ausgedacht und aufgezeichnet von Klsus Böhle（ドイツ語）91ページ。
・「ゲッティンゲン便り」1999年1月20日　第1刷　高野光司著　㈱日本図書刊行会発行　277ページ　ISBN4-8231-0260-6 C0095。
・「ゲルマン文化圏（ドイツ）」［地域商工業振興モデル調査］　平成10年3月　財団法人地域伝統芸能活用センター刊（「通商産業省平成9年度地域商工業振興事業調査」、地域伝統芸能等を活用した地域商工業の振興の現状調査研究）　158ページ。
・「真の豊かさを求めて」　ー日独の政治・経済・社会システムと価値観を探るー（日独シンポジウム）［1994年2月21日~2月22日］　主催：日独協会、ベルリン日独センター、日本経済新聞社．　編者：（財）日独協会、（財）ベルリン日独センター　1994.11.5発行　221ページ。
・「日の丸ドイツ船」　著者：岡村信幸（神戸とシャルンホルストを偲ぶ会）　製作：岩波ブックサービスセンター　1999年12月1日発行　285ページ。
・「ドイツ語手紙137文集」　著者：加藤元規　製作、出版：丸善㈱岡山支店出版サービスセンター　平成10年3月20日発行　243ページ。
・「20 Jahre」（独日協会ボン20周年記念誌）　1996年　独日協会ボン発行　111ページ（36冊有り。）。
・「ボン独日協会創立20周年記念式典冊子」（1996年）。
・「ドイツ留学」（外国人のためのドイツ大学案内）　ドイツ学術交流会（DAAD）東京事務所発行　79ページ。
・「Studying in Germany」(Information for foreigners on studies at colleges of art and music) 2nd edition 1997 DAAD発行　英語版　43ページ。
・「Studium in Deutschland Informationen für Ausländer über das Studium an deutschen Universitäten」5.Auflage 1997 DAAD(Deutscher Akademischer Austauschdienst刊　79ページ。
・「Leben und Studieren in Deutschland」DAAD(Deutscher Akademischer Austauschdienst)刊　88ページ。

・「人と情報の交流をめざして」［日独協会］ー日独協会1996年度の活動からー（財）日独協会刊（リーフレット）。
・「（財）日独協会 役員」名簿 1998年3月20日現在。
・「（財）日独協会 委員会委員」名簿 1997年5月現在。
・（財）日独協会「会員名簿」1993 149ページ（財）日独協会発行。同 1995 133ページ。同 1997 147ページ。同 1998 146ページ。同 1999 145ページ。
・「Die Brücke」日独協会機関誌 第443号 Januar 1992 1992年1月25日発行（毎月1回:25日）17ページ。同 第444号 Februar 1992 13ページ。同 第445号 März 1992 53ページ。同 第446号 April 1992 13ページ。同 第447号 16ページ。同 第448号 Juni 1992 13ページ。同 第449号 Juli 1992 17ページ。同 第450号September 1992 16ページ。同 第451号 Oktober 1992 13 ページ。同 第452号 November 1992 12ページ。同 第453号 Dezember 1992 13ページ。同 第454号 Januar 1993 17ページ。同 第455号 Februar1993 13ページ。同 第456号 März 1993 13ページ。同 第457号 1993.4 24ページ。同 第458号 1993.5 12ページ。同 第459号 1993.5 20ページ。同 第460号 1993.7 20ページ。同 第461号 1993.9 20ページ。同 第462号 1993.10 20ページ。同 第463号 1993.11 12ページ。同 第464号 1993.12 20ページ。同 第465号 1994.1 13ページ。同 第467号 1994.4 12ページ。同 第468号 1994.5 12ページ。同 第469号 1994.6 16ページ。同 第470号 1994.7 20ページ。同 第471号 1994.9 12ページ。同 第472号 1994.10 12ページ。同 第473号 1994.11 10ページ。同 第474号 1994.12 16ページ(2冊有り。)。同 第475号 1995.1 10ページ(2冊有り。)。同 第476号 1995.3 12ページ(2冊有り。)。同 第477号 1995.4 3ページ(2冊有り。)。同 第478号 1995.5 16ページ(2冊有り。)。同 第479号 1995.6 3ページ(2冊有り。)。同 第480号 1995.7 20ページ(2冊有り。)。同 第481号 1995.9 12ページ(2冊有り)。同 第482号 1995.10 3ページ(2冊有り。)。同 第483号 1995.11 15ページ(2冊有り。)。同 第484号 1995.12 3ページ(2冊有り。)。同 第485号 1996.1 15ページ(2冊有り。)。同 第486号 1996.2 6ページ（2冊有り。)。同 第487号 1996.3 12ページ(2冊有り。)。同 第488号 1996.4 6ページ(2冊有り。)。同 第489号 1996.5 16ページ(2冊有り)。同 第490号 1996.6 8ページ(2冊有り。)。同 第491号 1996.7/8合併号 13ページ(2冊有り)。同 第492号1996.9 16ページ(2冊有り。)。同 第493号 1996.10 4ページ(2冊有り。)。同 第494号 1996.11 16ページ(2冊有り。)。同 第495号 1996.12 8ページ(2冊有り。)。同 第496号 1997.1 12ページ(2冊有り。)。同 第497号 1997.2 4ページ(2冊有り。)。同 第498号 1997.3 12ページ(2冊有り。)。同 第499号 1997.4 8ページ(2冊有り。)。同 第500号 1997.5 20ページ(2冊有り。)。同 第501号 1997.6 12ページ(2冊有り。)。同 第502号 1997.7/8合併号 20ページ(2冊有り。)。同 第503号 1997.9 12ページ(2冊有り。)。同 第504号 1997.10 12ページ(2冊有り。)。同 第505号 1997.11 16ページ(2冊有り。)。同 第506号 1997.12 16ページ(2冊有り。)。同 第507号 1998.1 12ページ(2冊有り。)。同 第508号 1998.2 12ページ(2冊有り。)。同 第510号 1998.4 18ページ(2冊有り。)。同 第511号 1998.5 18ページ。同 第512号 1998.6 16ページ。同 第513号 1998.7/8合併号 18ページ。同 第514号 1998.9 20ページ。同 第515号 1998.10 14ページ。同 第516号 1998.11 16ページ。同 第517号 1998.12 13ページ。同 1999.1 第518号 11ページ。同 1999.2 第519号 13ページ。同 1999.3 第520号 13ページ。同 1999.4 第521号 26ページ。同 1999.5 第522号 16ページ(2冊有り。)。同 1999.6 第523号 25ページ。同 1999.7/8合併号 第524号 20ページ。同 1999.9 第525号 16ページ。同 1999.10 第526号 20ページ。同 1999.11 第527号 19ページ。同 1999.12 第528号 13ページ。同 2000.1 第529号 19ページ。同 2000.2 第530号 14ページ。
・「Deutschland」ZEITSCHRIFT FÜR POLITIK,KULTUR,WIRTSCHAFT UND WISSENNSCHAFT

D7999F Nr.6 Dezember 1997D1 ドイツ語版 67ページ。

・「Deutschland」政治・文化・経済・科学の雑誌(日本語版) D20032F NO.5 10/94 J1 Societäts-Verlag発行 67ページ(18冊有り。)。同 NO.2 4/95 J1 51ページ。同 NO.5 11/95 J1 67ページ(2冊有り。)。同 NO.6 12/95 J1 67ページ(4冊有り。)。同 NO.1 2/96 J1 67ページ(4冊有り。)。同 NO.2 4/96 J1 67ページ(3冊有り)。同 NO.3 6/96 J1 67ページ(2冊有り。)。同 NO.4 8/96 J1 67ページ(3冊有り。)。同 NO.5 10/96 J1 67ページ(2冊有り。)。同 NO.6 12/96 J1 43ページ(2冊有り。)。同 NO.2 4/97 J1 67ページ(3冊有り。)。同 NO.3 6/97 J1 67ページ(3冊有り。)。同 NO.4 8/97 J1 67ページ(3冊有り。)。同 NO.5 10/97 J1 67ページ(3冊有り。)。同 NO.6 12/97 J1 67 ページ(3冊有り。)。同 NO.1 2/98 J1 67ページ(3冊有り。)。同 NO.2 4/98 J1 67ページ(3冊有り。)。同 NO.3 6/98 J1 67ページ(2冊有り。)。同 NO.6/98 12月/1月 J 54ページ(4冊有り。)。同 NO.3/99 6月/7月 J 67ページ。

・「JDZB-ECHO」[ベルリン日独センター(JDZB)広報紙] ドイツ語版 Nummer 19,September 1993 8ページ。同 Nummer 20,Dezember 1993 8ページ。同 Nummer 21,Februar 1994 8ページ。同 Nummer 2,April 1994 8ページ。

・「JDZB-ECHO」[ベルリン日独センター(JDZB)広報紙] 日本語版 広報第18号(1993年8月) 8ページ。同 広報第19号(1993年10月) 8ページ。同 広報第20号(1993年12月) 8ページ。同 広報第21号(1994年2月) 8ページ。同 広報第22号(1994年4月) 8ページ。同 広報第23号(1994年6月) 8ページ。同 広報第24号(1994年8月) 8ページ。同 広報第25号(1994年10月) 8ページ。同 広報第26号(1994年12月) 8ページ。同 広報第27号(1995年2月) 8ページ。同 広報第28号(1995年4月) 8ページ。同 広報第29号(1995年6月) 8ページ。同 広報第30号 1995年8月 8ページ。同 広報第31号 1995年10月 8ページ。同 広報第32号 1995年12月 12ページ。同 広報第33号 1996年2月 12ページ。同 広報第34号 1996年夏 12ページ。同 広報第35号 1996年10月 12ページ。同 広報第37号 1997年2月 8ページ。同 広報第38号 1997年4月 8ページ。同 広報第39号 1997年6月 8ページ。同 広報紙第40号 1997年8月 8ページ。同 広報紙第41号 1997年11/12月 12ページ。同 広報紙第42号 1998年 2/3月 8ページ。同 広報第44号 1998年秋 8ページ(7冊有り。)。同 広報第45号 1999年2月 12ページ。同 広報第46号 1999年4月 8ページ。同 広報第47号 1999年6月 8ページ。同 広報第48号 1999年8月 16ページ。同 広報第49号 1999年 秋 12ページ。

・「グーテンタック」No.147 通巻 14. 1-2/99 JAPAN CONTACT出版。

・「Forum」April 1999 17ページ (社)日本カール・デュイスベルク協会発行。同 Juli 1999 17ページ。同 Oktober 1999 17 ページ。同 Januar 2000 16 ページ。

・「German Travel News」July 1998 Vol.30 ドイツ観光局発行。同 Sep 1998 Vol.31。同 December 1998 Vol.32。同 March 1999 Vol.33。同 April 1999 Vol.34。同 May 1999 Vol.35.

・「フォルクスフェスト」ドイツの民族祭 1995年9月 ドイツ観光局発行。

・ナウムブルク市(NAUMBURG)(ザーレ川沿い。ザクセン・アンハルト州。)の観光パンフレット。日本語版、ドイツ語版。

・「ドレスデン」(観光パンフレット 地図付) 1996.12 ドレスデン市観光局発行。

・「Kagawa Journal」(発行年月日不明) 「MATSURI!!」(財)香川県国際交流協会発行 8ページ(5冊有り。)。同 December 1992 No.6 8ページ(2冊有り。)。同 April 1993 No.8 8ページ(2冊有り。)。同 April 1994 No.14 8ページ。同 April 1995 No.20 8ページ(2冊有り。)。同 August 1995 No.21 8ページ(5冊有り。)。同October 1995 No.22 8ページ(5冊有り。)。同 Dcember 1995 No.23 8ページ。同 Feburary 1996 No.24 8ペー

ジ(5冊有り。)。同 April 1996 No.26 8ページ(5冊有り。)。同 JUNE 1996 NUMBER 27 8ページ(5冊有り。)。AUGUST 1996 NUMBER 28 8ページ(5冊有り。)。同 OCTOBER 1996 NUMBER 29 8ページ(5冊有り。)。同 DECEMBER 1996 NUMBER 30 8ページ(5冊有り。)。同 FEBRUARY 1997 31 8ページ(5冊有り。)。同 APRIL 1997 NO.32 8ページ(2冊有り。)。同 JUNE 1997 NO.33 8ページ(5冊有り。)。同 OCTOBER 1997 NO.35 8ページ(5冊有り。)。同 December 1997,No.36 8ページ(5冊有り。)。同 February 1998 8ページ(5冊有り。)。June 1998,No39 8ページ(4冊有り。)。同 August 1998 8ページ(5冊有り。)。同 October 1998,No41 8ページ(4冊有り。)。同 December 1998,no 42 8ページ(4冊有り。)。同 February 1999,no 43 8ページ(4冊有り。)。同 April 1999,no.44 8ページ(5冊有り。)。同 June 1999,no.45 8ページ(5冊有り。)。同 August 1999,no 46 8ページ(5冊有り。)。同 October 1999issue, No.47(4冊有り。)。同 December 1999, no 48 8ページ(5冊有り。)。同 February 2000, no 49 10ページ(5冊有り。)。

・アイバル通信 1996.4 (財)香川県国際交流協会発行 8ページ(6冊有り。)。同 1996.6 8ページ(5冊有り。)。同 1996.8 8ページ(5冊有り。)。同 1996.10 8ページ(5冊有り。)。同 1996.12 8ページ(5冊有り。)。同 1997.2 8ページ(5冊有り。)。同 1997.4 8ページ(5冊有り。)。同 1997.6 8ページ(5冊有り。)。同 1997.8 8ページ(5冊有り。)。同 1997.10 8ページ(5冊有り。)。同 1997.12 8ページ(5冊有り。)。同 1998.2 8ページ(5冊有り。)。同 1998.6 8ページ(4冊有り)。同 1998.8」8ページ(4冊有り。)。同 1998.10 8ページ(4冊有り。)。同 1998.12 8ページ(4冊有り。)。同 1999.2 8ページ(3冊有り。)。同 1999 4 7ページ(4冊有り。)。同 1999 6 8ページ(5冊有り。)。同 1999 8 7ページ。同 1999.10 7ページ(4冊有り。)。同 1999 12 7ページ(4冊有り。)。同 2000 2 7ページ(4冊有り。)

・「THIS IS A ばおち」NO.5 1998.8 TAKAMATSU INTERNATIONAL EXCHANGE GUIDE (財)高松市国際交流協会発行。

・「TIA かわら版」TAKAMATSU INFORMATION BOARD 1998.8 第12号 (財)高松市国際交流協会発行 4ページ。同 1999.4 第15号 4ページ。

・「TIA ニュース THE VOICE」TAKAMATSU INTERNATIONAL ASSOCIATION NEWS/TIA新聞 NO.4 1933 (財)高松市国際交流協会発行 8ページ(5冊有り。)。同 1998.12 No.13 8ページ。

・「グローバルKAGWA」1992 12月 (財)香川県国際交流協会発行 8ページ。同 1993 2月 8ページ(9冊有り。)。同 1993 4月 10ページ(2冊有り。)。同 1993 6月 8ページ(6冊有り。)。同 1993 8月 10ページ(5冊有り。)。同 1993 10月 8ページ(2冊有り。)。同 1993 12月 8ページ(5冊有り。)。同 1994 2月 8ページ(3冊有り。)。同 1994 4月 8ページ。同 1994 8月 8ページ(3冊有り。)。同 1994 10月 8ページ(5冊有り。)。同 1994 12月 8ページ(5冊有り。)。同 1995 3月 6ページ(3冊有り。)。同 1995 4月 6ページ(5冊有り。)。同 1995 7月 8ページ(5冊有り。)。同 1995 8月 8ページ(5冊有り。)。同 1995 10月 8ページ(5冊有り。)。同 1995 12月 8ページ(5冊有り。)。同 1996 2月 8ページ(5冊有り。)。

・「香川日英協会会報」No.1 September 1992 香川日英協会発行 16ページ。同 No.2 June 1993 24ページ。同 No.3 July 1994 28ページ。

・「DE LA SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE KAGAWA」(香川日仏協会会報) No7 1986.12 香川日仏協会発行 16ページ。同 No8 1987.4 16ページ。同 No9 1987.8 20ページ。同 No10 1987.12 16ページ。同 No11 1988.4 16ページ。同 No12 1988.7 12ページ。同 No13 1988.10 16ページ。同 No14 1989.1 12ページ。同 No28・29 1993.1 16ページ。同 No30 1993.4 12ページ。同 No31 1993.7 12ページ。同 No32 19

93.10 12ページ。同 No33 1994.1 12ページ。同 No34 1994.4 10ページ。同 No35 1994.7 16ページ。同 No36 1994.10 12ページ。同 No37 1995.1 12ページ。同 No38 1995.5 12ページ。同 No39 1995.9 8ページ。同 No40 1995.12 12ページ。同 No41 1996.4 8ページ。同 No42 1996.7 8ページ。同 No43 1996.9 8ページ。同 No44 1996.12 8ページ。同 No45 1997.3 8ページ。同No46 1997.7 8ページ。同 No47 1997.10 9ページ。同 No48 1998.1 9ページ。同 No49 1998.4 11ページ。No50 1998.9 17ページ(2冊有り。)。同 No51 1999.1 9ページ。同 No52 1999.4 9ページ。

- 「香川日墺協会会報」創刊号 1998年5月25日 香川日墺協会(Japanisch-Österreichische Gesellschaft in Kagawa)発行 8ページ。
- 「岡山日独協会会報」Nr.27 Juni 1993 岡山日独協会発行 18ページ。同 Nr.28 September 1993 35ページ。同 Nr.29 Januar 1994 17ページ。同 Nr.30 Juli 1994 18ページ。同 Nr.31 Oktober 1994 10ページ。同 Nr.32 Juni 1995 19ページ。同 Nr.33 Dezember 1995 29ページ。同 Nr.34 Juni 1996 20ページ。同 Nr.35 Dezember 1996 21ページ。同 Nr.36 Juni 1997 20ページ。同 Nr.37 Dezember 1997 16ページ。同 Nr.39 Januar 1999 25ページ。同 Nr.40 Mai 1999 17ページ。同 Nr.41 Dezember 1999 25ページ。
- 「大分日独協会会報」第6号 November 1994 74ページ。同 第7号 November 1995 60ページ。同 第8号 November 1996 64ページ。同 第9号 November 1997 72ページ。同 第10号 November 1998 92ページ。
- 「Die Eiche」千葉県日独協会通信 NO.1 1997年6月(平成9年)発行 2ページ。同 NO.2 1997年8月(平成9年) 2ページ。同 NO.3 1997年10月(平成9年) 2ページ。同 NO.4 1998年6月(平成10年) 2ページ。同 NO.5 1998年8月(平成10年) 2ページ。同 NO.6 1998年10月(平成10年) 2ページ。同 NO.7 1999年1月(平成11年) 2ページ。
- 「岩手日独協会会報」Juni 1998 Nr.9 27ページ(2冊有り。)。
- 岩手日独協会 「創立10周年記念誌」(会報) Dezember 1999 Nr.10 平成11年12月25日発行 40ページ。
- 「Heimat」くんま日独協会会報 17 1998年3月20日発行 8ページ。同 19 1999年3月 8ページ。
- 「LINDE」両市民の友情と信頼の輪を 第19号 平成7年10月15日 蕨・独リンデン市民交流協会発行 6ページ。同 第20号 平成9年1月19日発行。8ページ。
- 「Hand in Hand」ー手と手をー 蕨・独リンデン市民交流協会交流開始20周年記念誌 98年 蕨・独リンデン市民交流協会発行 59ページ。
- 「熊本日独協会創立30周年記念誌 '62~'93」327ページ 1993.7.1 熊本日独協会発行。
- 「FREUND SCHAFT Kumamot」熊本日独協会会報 No.6 1999年6月発行 '99春 6ページ。
- 「KASTANIEN」とちぎ日独協会会報 第21号 8ページ 平成11年1月15日 とちぎ日独協会発行。同 第22号 8ページ 平成4月15日。同 第23号 8ページ 平成11年7月15日発行。同 第24号 8ページ 平成11年10月15日発行。同 第25号 12ページ 平成12年1月15日発行。
- 「GUTEN TAG」仙台日独協会だより 創刊号 4ページ 1992.10.1 仙台日独協会発行。同 第2号 4ページ 1993.3発行。同 第3号 8ページ 1993.10発行。同 第8号 8ページ 1996.12発行。同 第9号 8ページ 1998.4発行。同 第10号 8ページ 1999.1発行。同 第11号 8ページ 2000.1.1発行。
- 「仙台日独協会会報」平成9年3月発行 54ページ。
- 「仙台日独協会会報 ー設立10周年記念号ー」Nr.5(1994) 平成6年5月 仙台日独協会発行 141ページ。
- 「仙台日独協会 会員名簿/1994」-1994年4月1日現在- 仙台日独協会発行 63ページ。
- 「Stammtisch」豊橋日独協会会報 vol.11 Februar 1998 8ページ(2冊有り。)。

・「Stammtisch」 豊橋日独協会会報 豊橋日独協会創立5周年記念誌。
・「Gemütlich」 豊橋日独協会 News Letter vol.6 1998.10.12 2ページ。
・「'75 Freundschaft」 '95 日独親善友の会 20Jahre(青森県)。
・「茨城日独文化協会会報」 No.5 1998.2発行 16ページ。同 No.6 1999.10.13発行 19ページ。
・「茨城日独文化協会創立10周年記念誌」 1997.11発行 97ページ。
・神戸日独協会会報 Nr.93 Mai 1998 6ページ。同 Nr.94 Juni・Juli 1998 6ページ。同 Nr.95 August 1998 6ページ。同 Nr.96 September 1998 6ページ。同 Nr.97 Oktober 1998 8ページ。同 Nr.98 November 1998 8ページ。同 Nr.99 Dezember 1998 6ページ。同 Nr.100 Januar 1999 6ページ。同 100号記念特集号 Februar 1999 14ページ。同 Nr.101 Februar 1999 6ページ。同 Nr.102 Maerz 1999 6ページ。同 Nr.103 April 1999 6ページ。同 Nr.104 Mai 1999 4ページ。同 Nr.105 Juni 1999 4ページ。同 Nr.106 Juli 1999 8ページ。同 Nr.107 August 1999 8ページ。同 Nr.108 September 1999 8ページ。同 Nr.109 Oktober 1999 8ページ。同 Nr.110 November 1999 8ページ。同 Nr.111 Dezember 1999 8ページ。同 Nr.112 Januar 2000 8ページ。同 Nr.113 Februau 2000 6ページ。
・「山口日独協会ニュース」 Nr.30 Mai 1998。同 Nr.31 Juli 1998。同 Nr.32 September 1998。同 Nr.33 November 1998。同 Nr.34 Februar 1999 5ページ。同 Nr.35 März 1999 4ページ。同 Nr.36 Juli 1999。同 Nr.37 September 1999 4ページ。同 Nr.38 November 1999。
・「海外訪問の想いで」〈YE派遣生体験記〉 川越ライオンズクラブ 46ページ。
・「香川の国際交流」ーデータブック 1992年(平成4年) (財)香川県国際交流協会発行 124ページ。同 1993年(平成5年) 128ページ。同 1994年(平成6年) 118ページ。同 1995年(平成7年) 124ページ。同 1996年(平成8年) 116ページ。同 1997年(平成9年版) 128ページ(2冊有り。)。同 1998年(平成10年)版 126ページ。同 1999年(平成11年)版 114ページ。
・「文化交流教材資料一覧」(「文化交流教材貸出要綱」:平成8年7月31日より施行。) (財)香川県国際交流協会作成。
・「国際交流活動の手引き」 1992年(財)高松市国際交流協会発行 49ページ。
・「香川の国際交流団体」 1996年7月 (財)香川県国際交流協会発行 69ページ。
・「'93香川県青年海外派遣報告書」(平成5年度) 香川県・(財)明治百年記念香川県青少年基金発行 205ページ。
・第7回「中学生訪中親善使節団報告書」 1998年3月25日~3月31日 (財)高松市国際交流協会発行 32ページ。
・「SHIKOKU UPDATE」(英文) Apr.1999 四国通商産業局産業部国際室発行 22ページ(3冊有り。)。
・「香川県県民ホール開館10周年記念誌」 平成11年10月発行 財団法人置県百年記念香川県芸術文化振興財団香川県県民ホール発行 71ページ。

９９年度香川日独協会活動報告

・１９９９年４月４日（日）～５日（月）。

大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館文化担当領事Ｄｒ．フィーツェ氏とご家族（４名）が、高知県、愛媛県を経由して４日（日）夕方来県されました（中村会長宅泊。）。５日（月）栗林公園の桜を楽しみ、鳴門経由で帰阪されました。

・１９９９年４月１８日（日）１３：３０～１５：４０。

９９年度第１回の「理事会」を高松市内で開催しました。出席理事は、８名でした。協議内容は、次のとおりです。

・９８年度事業報告（案）、９８年度収支決算書（案）について
・９９年度事業計画（案）、９９年度予算書（案）について
・２０００年７月（予定）独訪問団の派遣について
・会則の変更について　　等

・１９９９年４月２０日（火）。

「会報第７号（９８・９９合併号）」を発行しました。発行部数は、３５０です。

・１９９９年５月１８日（火）１８：３０～２０：３０。

大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館文化担当Ｄｒ.クラウス・フィーツェ領事による講演会「ユーロとドイツ経済」を［高松商工会議所会館］５０１会議室で、香川経済同友会の後援で開催しました。参加者は、約９０名でした。また、香川経済同友会、大坂会員には大変ご協力ご支援を賜りまして、誠にありがとうございました。

・１９９９年５月１９日（水）～６月１８日（金）。

ベルリンの首都建設の改修前と改修後との姿をを記録した「写真パネル」約３０枚を、㈱香川銀行のご協力により、［同銀行本店１階ロビー］に展示しました。「写真パネル」は、大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館から提供して頂きました。

オープンは、午前９時から香川銀行本店１階ロビーで、香川銀行副頭取の岡田壽一郎様を初め多数の香川銀行の皆様方や来店されましたお客様、合わせて５０名余りの前で、Ｄｒ．フィーツェ領事が挨拶をされ、開展しました。

その後、Ｄｒ．フィーツェ領事が一枚一枚写真の説明を行い、約１０分でオープニング・セレモニーを終了しました。

香川銀行の皆様方には、大変ご協力を頂きまして、誠に、ありがとうござ

いました。

・１９９９年5月３０日（日）１７：００～１７：３０。

９９年度第２回の「理事会」を［高松ホワイトホテル］で開催しました。出席理事は、１０名でした。協議内容は、次のとおりです。

・９８年度事業報告（案）、９８年度収支決算書（案）について
・９９年度事業計画（案）、９９年度予算書（案）について
・２０００年７月（予定）独訪問団の派遣について
・役員の人事について（顧問への就任：田中香川医科大学長）

以上、原案のとおり了承されました。

・１９９９年5月３０日（日）１８：００～１８：５６。

９９年度の第１回「総会」を、［高松ホワイトホテル］で開催しました。出席者は、４３名でした。審議事項は、次のとおりです。

・９８年度事業報告（案）、９８年度収支決算書（案）について
・９９年度事業計画（案）、９９年度予算書（案）について
・２０００年７月（予定）独訪問団の派遣について
・役員の人事について（顧問への就任：田中香川医科大学長）

以上、原案のとおり承認されました。

・１９９９年5月３０日（日）１９：００～２１：１５。

「懇親会」を総会に引き続いて、［高松ホワイトホテル］で開催しました。参加者は、３９名で盛会でした。また、クノル様の後任のデーゲン様ご夫妻も初めて出席されました。

・１９９９年７月９日（金）。

ボン独日協会理事シュレック様が、愛媛県から来県されました（羽白副会長宅泊）。県立農業経営高校（和太鼓クラブ）等を訪問されました。

・１９９９年７月１０日（土）１５：００～１７：００。

ホームステイ報告会を、［アイパル香川］の会議室で開催しました。参加者は、２３名でした。発表者は、加藤雅明会員・樽茶直人会員、川田敦子会員・山田恭子会員の２組４名でした。ボン独日協会理事シュレック様も参加して頂きました。

・１９９９年７月１０日（土）１８：００～２１：００。

ボン独日協会の理事シュレック様を囲んでの歓迎会を、［ときわ茶寮］で開催しました。参加者は、２３名で、約３時間にわたって懇談しました。

・１９９９年７月１１日（日）。

ボン独日協会の理事シュレック様は、この日、関西国際空港から帰国されました。

・１９９９年8月２１日（土）１４：１５～１５：４５。

９９年度第３回「理事会」を開催。出席理事　６名。

［協議事項］

（１）１０月～１１月の「ドイツ週間」の行事等について

・オルデンブルク独日協会盆栽愛好家グループの受け入れ体制について

・講演会の開催について

・国際交流フェスタ９９への参加について

・「日独裁判官物語」映画鑑賞会の案内について

（２）延期した「遠足」の実施について

（３）９９年度会費の納付状況について

（４）その他

・１９９９年9月8日（水）１０：２０～１５：３０。

「香川国際交流ネットワーク会議」が、（財）香川県国際交流協会の主催で［アイパル香川講堂］で開催され、事務局長が出席しました。

・講演「国際交流団体のネットワーク作り」

講師：関西国際交流団体協議会事務局長　有田　典代氏

・講演「香川県の国際交流について」

講師：香川県国際交流課長　田中　豊哲氏

・分科会

第一分科会「国際交流事業の今後の進め方」

ファシリテータ：（財）香川県国際交流協会管理課長藤田泰弘氏

第二分科会「姉妹都市提携の現状と今後の進め方」

ファシリテータ：(財)高松市国際交流協会事務局長吉岡御井子氏

・１９９９年9月１９日（日）。

「第７回香川チター音楽祭」が、［高松テルサ］で開催され、香川日独協会は、今年もこれを後援しました。

・１９９９年１０月～１１月「香川日独協会ドイツ週間」。

（１）講演会：９９年１０月１７日（日）１３：３０～１５：３０。

・講師：高野光司会員（ゲッティンゲン大学医学部終身職教授、高松短期大学教授）

・演題：「Ｅｘｔｒａ　Ｇｏｔｔｉｎｇａｍ　ｎｏｎ　ｅｓｔ　Ｖｉｔａ」

（ゲッティンゲンなくして人生なし）

―学都ゲッティンゲンに三〇年を生きて―

・講演の内容の詳細につきましては、高野光司著『ゲッティンゲン便り』（1999年1月20日 第1刷 ㈱日本図書刊行会発行 ㈱近代文芸社発売 ISBN4-8231-0260-6 C0095）をご覧ください。

［事務局注。事務局に１冊ありますので、ご希望の方はお申し出ください。］

（２）交流会：９９年１０月２７日（水）～３０日（土）。

「オルデンブルク独日協会会員の盆栽愛好家グループ１１名」を受け入れ。

・２７日（水）来県。

・２８日（木）県園芸総合センターで盆栽技術の習得。
栗林公園視察。

・２９日（金）鬼無植木盆栽センターで「鬼無盆栽植木まつり」を視察。
香川日独協会会員と交流。
㈱ビッグ・エス研修施設
「ＴＥＲＲＳＡ大坂」で）

・３０日（土）新居浜へ。

（３）「国際協力シンポジウム」に出席。

９９年１１月１３日（土）午後１時３０分からリーガホテルゼスト高松で開催された（財）香川県国際交流協会主催の同協会設立１０周年記念事業「国際協力シンポジウム」に秋山理事が出席。

（４）「かがわ国際交流フェスティバル’９９」へ参加。

９９年１１月１４日（日）：アイパル香川、高松市中央公園で開催された、（財）香川県国際交流協会・（財）高松市国際交流協会共催の「かがわ国際交流フェスティバル’９９」に参加し、「ベルリンの建設状況の「写真パネルを展示」した。

（５）「映画鑑賞会」を後援。

９９年１１月２８日（日）午後１３：３０から香川県社会福祉総合センター［コミュニティホール］で、香川大学・香川県弁護士会共催のもと上映されました記録映画「日独裁判官物語」の映画鑑賞会を後援致しました。

・１９９９年１０月１７日（日）１５：３０～１６：４５。

「第４回理事会」を高野会員の講演会に引き続いて、アイパル香川の会議室で開催。協議事項は、オルデンブルク盆

栽愛好家グループ受け入れの最終確認、１１月９日（火）に来県される駐日ドイツ公使シュテッカー氏への対応について、その他でした。出席理事は、６名でした。

・１９９９年１１月９日（火）１８：３０～２１：００。

「花樹海」で駐日ドイツ公使シュテッカー氏の歓迎会を開催。公使は、香川県の「平成１１年度国際化ネットワーク整備事業」に基づく、知事招待による各国の外交官の一員として来県されました。今回は、公使のスケチュールがハードであったこと、当協会の行事が詰んでいたことなどにより、当協会側の出席者は、役員およびこの訪問に関係されました会員とさせて頂きました。ご理解を賜りたいと存じます。

・１９９９年１２月１６日（木）。

「高松高校」に於いて、高松高校生による「第九演奏会」が開催され、事務局が参加しました。

・１９９９年１２月１９日（日）１３：３０～１５：００。

「アイパル香川」の会議室で、ゲーテ生誕２５０周年を記念しまして、瀧川一幸会員による「講演会」を「ゲーテの詩的世界について」―限りなきものとの出会い―と題しまして、開催しました。参加者は、１８名でした。

・１９９９年１２月１９日（日）１５：１５～１６：４５。

「アイパル香川」の会議室で、上記講演会に引き続きまして本年度第２回目の「ホームステイ報告会」を開催しました。報告者は、山口、合田、石川、川原、高嶋の５会員でした。ホームステイ期間は、山口会員：９９．８．２５～３１、合田会員他４名は：９９．９．９～１８でした。

・１９９９年１２月１９日（日）１７：３０～２０：３０。

「なか座」で、９９年度の「忘年会」を開催しました。参加者は、２６名でした。

・２０００年２月１３日（日）１３：３０～１５：３０。

「高松市内」で、９９年度の第５回「理事会」を開催しました。協議事項は、事務局の拡充整備について（事務局担当者の増員）でした。出席理事は、３名でした。

・２０００年２月２０日（日）１３：００～。

香川県社会福祉総合センター「コミュニティホール」で開催された、㈱ビッグ・エス主催の第１回ビッグ・エス「全

国ドイツ語スピーチコンテスト」を後援しました。

・２０００年2月２１日（月）１８：３０～。

「讃岐会館」で開催されました、香川県海外派遣友の会主催の「ドイツ学生代表団」２０名のサヨナラ・パーティに中村会長を含め、学生会員（山口、加藤会員外）１１名が参加しました。

・２０００年3月１６日（木）・１７日（金）。

水戸市で開催されました、「１９９９年度全国日独協会連合会年次総会」に、中村会長が出席しました。

【表紙】
「トリスタンとイゾルデ」のリトグラフより（フランツ・シュタッセン作）

2000年から2002年にかけて、ドイツのオーケストラや歌劇場により、ワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」が日本で相次いで上演されます。

2000年 11月～12月	ベルリン・フィルハーモニー（アバド指揮）
2001年 9月～10月	バイエルン国立歌劇場（メータ指揮）
2002年 1月	バイエルン放送交響楽団（マゼール指揮）

香川日独協会会報 第８号
2000年5月発行

発　行：香川日独協会事務局
Japanisch-Deutsch Gesellschaft KAGAWA
〒760-0004 香川県高松市西宝町 2-2-25
藤本康夫気付 087-833-7190
発行責任者：中村 敏子（会長）
編　集：藤本 康夫、最上 英明
印　刷：（株）サンプリント